

路傍に^①行乞し、面たり^②四祖に謁し、黃梅に母を養ひ、赤縣に孫を留め、流れて東海に入つて、日多の識と爲る底の消息なり。先師、六十九歳、寶曆三年癸酉、夏、甲府能成禪刹に於て、人天眼目を提唱す。^③開筵示衆に云く、

「人天の雙眼目を瞎御して、波斯、夜半空谷に落つ。歸り來つて譚語、人の量るなし。各々左邊を相いで、背觸を訪ふ。夫れ以れば、人天眼目の秘訣、佛海の狂浪、禪苑の毒花。」

是れ作者未だ吾が家の妙を盡さざることを明す。其の出す所の事、宜しく五宗を見るべし。先師常に道ふ、「古徳判じて云く、人天眼目は卻つて盲目と成る」と。又甚だ故あり。若し以て依行せば、恐らくは後人を誤らん。」

昔晦巖老人親しく輯編す。孫を顧み、子を思ふ。近ごろ驚背老漢、註解を問ふ。惡を逐ひ邪に隨ふ、疑咒を千載の當來に斃し、家醜を五家の衰末に揚ぐ。作者、只だ兒孫大いに誤り、註主、又事實を示すの違ふべきことを恐る

のみ。

①三玄三要、淨地上に士を抛ち扇を撒す。五位君臣、澆末代、徒を匡し衆を導く。位を轉じて功に就くの大事を開示し、賊を認めて子と爲すの鈍根を震殺す。

臨濟の嚴呵する所の者は、恐らくは^④七の無分別識を認めて、錯つて根本。如來藏と爲すことを。曹洞の指示する所の者は、只だ恐らくは七地の有功の用智を認めて、偏に八地の無功の行を守る。是れ賊を認めて子と爲すの鈍根なり。

法眼を殿後と爲し、臨濟を先鋒と爲す、豈に優劣を其の際に容れんや。雲門を天子と爲し、馮仰を公卿と爲す。須らく知るべし、宗風、高下なきに非ざることを。

殿後たることは、^⑤八宗皆人を利するを以て、究竟と爲す。^⑥五家共に學者を導く、是れ基本なり。宗旨は高を以て貴と爲すと雖も、其の教示する所、自ら高下前後の分ある而已。常に恨む、願、鑑、嘆、時の人盡く錯つて會することを。爲に報す、

用ひ、一本の香の消ゆる間を云ふ。
①行脚。僧の道心修練のため、名師善友を訪ひて、諸國を遊歴するを云ふ。
②白雲端和尚。白雲守端禪師なり。
③耳朶ある者。耳あるものの謂にて、心あるもの、或は理解の力あるもの、意なり。
④五祖大師。支那臨濟禪の五祖弘忍大師禪師なり。
⑤行乞。乞食、或は托鉢の意なり。
⑥四祖。支那臨濟禪の四祖道心大醫禪師なり。
⑦開筵。開講の意なり。
⑧三玄三要。宗乘を演唱するに、一語の中須らく三支を具し、一支中に三要を具せざる可らずと、即ち一語を説く中にも、權、實、照、用、或は體、相、用を具足して闡くる

なきを云ふ。
④七の無分別識。眼、耳、鼻、舌、身、意の六識及び第七末那識を云ふ。
⑤如來藏。眞如と云ふに同じ。眞如 (Bhūtatāhā) は萬有の實體なり、之を眞如と譯せるは、現象の假相に對して、眞實なること、萬有の變化無常なるに反して、其の常住不變なることを示せるなり、或は之を一如と云ひ、法性と云ひ、佛性と云ふは、絶對なる諸法の本質、衆生の本性なることを示せるなり。
⑥八宗。俱舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗、眞言宗の八宗なり。
⑦五家。臨濟、雲門、曹洞、馮仰、法眼の五宗を云ふ、之に楊岐と黃龍とを加へて七宗と云ふ、楊岐、黃龍共に臨濟なり。世に之を五家七宗とも云

六相義、須らく親切に參究すべし。

眼目に曰く、「師、僧を見る毎に、之れを顧みて即ち曰く、「鑑。」僧擬議す。師即ち曰く、「唛。」而して之を録する者、顧鑑唛と曰ふ。又頌を作りて曰く、「擧するに顧みず、即ち差互す、思量せんと擬すれば、何の劫にか悟らん。」先師久しく雲門宗の大事に參す。始めて三字の旨を會す。之れに依つて三字を宗と爲す、別に格外に通ず。六相の義、法眼宗第一、法を表す、本書の註に見えたり。茲に易解の爲別に一譬を設く。是れ男、是れ女の如きは、是れ總相。六根在るが如きは是れ別相。辨用に依るが如きは是れ同相。眼見、耳聞是れ異相。聚めて身を成すが如きは是れ成相。四大分死の如きは是れ壞相。宗に通じて後に參訣せよ。

●三字。顧、鑑、唛の三字なり。
●六相。總相、別相、同相、異相、成相、壞相、是れなり。
●四句管頌の後の二、即ち一、衆生無邊管頌度、二、煩惱無盡管頌斷、三、法門無量管頌學、四、佛道無上管頌成。

從頭、五派の秘訣、盡く至要を究明すべし。澆季末代、法滅盡の効驗、諸方盡く言ふ、「話頭に參せざれ、文字を知らざれ。唯だ一向に無念無心にし去れ、是れ向上の禪」と。偏知らずや、佛の言く、「法門無量管頌學、佛道無上管頌成」と。

此の示衆に依れば、先師の意、五家を尊重することは是の如く明著なることを。若し其の事なき者に至つては、搜索足らず、參詳及ばざるの致す所なり。臨濟上堂。僧問ふ、「如何なるか是れ第一句。」濟云く、「三要印開して朱點側つ、未だ擬議を容れざる

に主賓分る。」如何なるか第二句。濟云く、「妙解豈に無著の間を容れんや、漚和争か截流の機を負はん。」問ふ、「如何なるか是れ第三句。」濟云く、「棚頭に傀儡を弄するを看取せよ、抽牽都來裏に人有り。」濟又云く、「一句語に須らく三玄門を具すべし。一玄門に須らく三要を具すべし。權あり、實あり。汝等諸人、作麼生か會す。」下座。

先師曰く、「此の三句に於て、甚だ深理あり、參詳を盡すべし。彼の函蓋、乾坤等の句の如きは、眞の宗旨に非ず。此の上堂に至つて、始めて知る、雲門、臨濟同一三昧なることを。若し復た此の旨を知らざる底は、即ち虛堂日多の眞孫に非ざること必せり。」

國譯五家參詳要路門第三

第三 曹洞宗は心地を究め親疎を論ずるを旨と爲す

師諱は良价、雲巖に嗣ぐ。越州諸暨の人、姓は俞氏、初め忠國師に謁して、無情説法を問ふ。契はす。後瀉山に到る。山問ふ、「聞く、開黎會て國師に無情説法を問ふと、是なりや否や。」師云く、「是。」瀉云く、「試みに舉せよ看ん。」師舉し了る。瀉云く、「我が這裏も也た些子あり、只だ是れ其の人に遇ふこと。罕なり。」師云く、「便ち請ふ。」瀉、拂子を以て點一點す。師云く、「請ふ和尚、某甲が爲に説け。」瀉云く、「父母所生の口、終に子が爲に説かず。」師云く、「此間、同時に道を慕ふ者あること莫らんや。」瀉、雲巖に見えしむ。師辭して直に雲巖に造る。前話を請益す。巖云く、「見すや、彌陀經に云く、『水鳥樹林、悉く皆念佛念法』と。」師因つて省あり。偈を作つて云く、「也太奇、也太奇、無情説法不思議。若し耳を將つて聽かば、終に會し難し。眼處に聲を聞いて方に知ることを得ん。」一日巖に問ふ、「某甲餘習あり、未だ盡さず。」巖云く、「汝曾て甚麼をか作し來

①開黎、阿闍梨の略、梵語、阿闍梨耶(阿闍梨)の略、軌範師或は正行と譯す、天台宗、眞言宗等には阿闍梨に種々あるも、普通には子弟の信俗を指導すべき師範職、或は授戒の職を勤むるものを云ふ。
②罕、稀なり。
③造る、到るなり。
④也太奇、也は又の意なり、太奇は甚だ奇なりの意にて、奇妙不思議の意なり。

る。云く、「聖諦も亦爲さず。」曰く、「還つて歡喜地を得るや、也た未だしや。」云く、「歡喜は即ち無きにあらす、糞堆頭に一顆の明珠を拾ひ得るか。」師、巖を辭して問ふ、「百年後忽ち人あり、還つて和尚の眞を遺得すと問はゞ、如何が。」祇對せん。巖良久して云く、「只だ者れ是れ。」師、沈吟す。巖云く、「价開黎、箇の事を承當するとは、大いに須らく審細にすべし。」師猶ほ疑に涉る。後因に水を過ぎて、影を視て方に頓悟するを得たり。偈を作つて云く、「切に忌む從他あれ覺むることを、迢迢として我れと疎なり、我れ今獨り自ら往く、處々渠に逢ふことを得たり、渠今正に是れ我れ、我れ今是れ渠にあらず、應に須らく恁麼に會して、方に如々に契ふことを得べし。」示衆に云く、「末法の時代、人多く乾慧なり、若し眞偽を辨驗せんと要せば、三種の滲漏あり。一には見滲漏、機、位を離れざれば、毒海に墮在す。二には情滲漏、智常に向背して見處偏枯なり。三には語滲漏、體妙、宗を失す、機、終始を味す。」曹山辭する次で、師、山に先雲巖が付する所の寶鏡三昧、五位顯訣を授け畢んぬ。山再拜して去る。

⑤歡喜地、菩薩十地階級の中、初地を歡喜地と云ふ、菩薩此の地に入れば、決して惡趣及び凡夫地に退轉せず、必ず成佛すべきを以て歡喜を得ること比なし、故に歡喜地と名づく。
⑥一顆、一個と云ふ意なり。
⑦祇對、答ふるの意なり。
⑧迢々、高き貌なり、或は遙かなるの意なり。
⑨渠、彼の意なり。
⑩五位顯訣、五位説は達磨十一代の法孫たる洞山眞价禪師の創作する處にして、其の説は涅槃經の嬰兒の五相より出づ、而して師、遷化の後、其の嗣曹山、能く五位の要旨を受けて、五位に據語を下し、之を流布せしむ、名けて五位顯訣と云ふ、然るに曹山の法系は僅か三世にして絶滅

隠々として猶ほ舊日の嫌を懐く。

偏中正。失曉の老婆古鏡に逢ふ、分明に觀面更に眞なし、更に頭に迷

ふて還つて影を認むることを休めよ。

正中來。無中に路有り塵埃を出づ、但だ能く當今の諱に觸れず、也た

前朝斷舌の才に勝れり。

兼中至。兩刃鋒を交へて避くることを須ひず、好手還つて火裏の蓮に

同じ、宛然として自ら衝天の氣あり。

兼中到。有無に落ちず誰か敢て和せん、人々盡く常流を出でんと欲す、

折合還つて炭裏に歸して坐す。

寶鏡三昧

佛祖密に付す、

銀盤に雪を盛る、

混じて處を知る、

動すれば窠臼を成し、

大火聚の如し、

汝今之を得たり、
明月に鷲を藏す、
意、言に在らざれば、
差へば願行に落つ、
但だ文彩に形せば、

せしかば、此の書も亦漸く隠没したり、後宋朝を経て元朝に至り、老謙なるものあり、宋本を得て之を刊行し、中統元年晦然之れに補注を加へて世に弘む、現今我國に傳はるものは即ち是なり、而して我國に初めて傳へしは道元禪師なりと云はる。(一)正中偏は起信論の隨緣眞如の如く、又哲學の實在即現象の意義に等し。(二)偏中正は、千變萬化の差別が即ち平等の實在界なることを意味す、即ち正中偏を反對に云へるものなり。(三)正中來は正偏に基づける修行の工夫を明せるものなり、即ち其究極は正偏兼帯の一位にあれども、それに到達する工夫に於て正中より來るあり、偏中より來るありて自ら二方面なり。(四)兼中至とは前の正偏に基ける修行の功

即ち染汚に屬す、

物の爲に則を作す、

是れ無語にあらず、

汝是れ渠にあらず、

五相完具するが如し、

婆々和々、

語未だ正からざるが故に、

疊んで三と爲り、

金剛の杵の如し、

宗に通じ塗に通ず、

犯忤すべからず、

因縁時節、

大、方所を絶す、

今頓漸有り、

即ち是れ規矩、

夜半正明、

用ひて諸苦を抜く、

寶鏡に臨むが如し、

渠正に是れ汝、

不去不來、

有句無句、

重離の六爻、

變盡して五と成る、

正中妙挾、

挾帶挾路、

天真にして妙なり、

寂然として昭著す、

毫忽も差へば、

宗趣を立するに縁る、

宗通じ趣極る、

天曉不露、

有爲に非すと雖も、

形影相觀る、

世の嬰兒の、

不起不住、

終に物を得ず、

偏正回互、

莖草の味の如く、

敲唱雙舉す、

錯然として吉なり、

迷悟に屬せず、

細、無間に入り、

律呂に應せず、

宗趣分る、

眞常流注、

夫を明せるなり。(五)兼中到とは正、偏、來、至、毫も障礙することなく、互に融攝して自由自在の妙用を顯現する位を云ふ。
●寶鏡三昧。本書は「傳燈」、「禪門諸祖傳頌」等に載せざれば古來作者に就いて異説多し、五燈會元洞山章に「師(洞山)因に辭す、遂に囑して曰く、吾れ雲巖先師の處にあり、親しく寶鏡三昧を印せらる、事窮めて的要なり、今汝に付す」と記せるより、本書の作者は彼の五位説を唱へたる洞山良价禪師なりと云はる。内容は本文に見ゆる如く、一篇、四言、九十四句、三百七十六字より成る。寶鏡は靈明にして能く物を照すの義、三昧は大論の王三昧なり、即ち王三昧に安住する時は、自ら諸佛の受用せる大圓鏡智の大光明を

外寂に内搖ぐ、
法の檀度と爲り、
顛倒想滅すれば、
請ふ前古を觀よ、
虎の缺の如く、
寶几珍御、
羿、巧力を以て、
巧力何ぞ預らん、
情識の到るに非ず、
子、父に順ず、
潛行密用、
主中の主と名づく。

繫駒伏鼠、
其の顛倒に隨つて、
肯心自ら許す、
佛道成するに垂として、
馬の 駟の如し、
驚異有るを以て、
射て百歩に中つ、
木人方に歌ひ、
寧ろ思量を容れんや、
順ならずんば孝に非ず、
愚の如く 魯の若く、
先聖之れを悲んで、
緇を以て素と爲す、
古轍に合せんと要せば、
十劫樹を觀す、
下劣有るを以て、
狸奴白 牯、
箭鋒相直る、
石女起つて舞ふ、
臣、君に奉じ、
奉せざれば輔に非ず、
但だ能く相續するを、

現前し、大自在を獲得す、本書は此の微妙なる王三昧の消息を詠ぜし絶妙の歌なり。
①重離。易の三三離上離下、即ち離爲火の卦なり、此の卦は臣の君に事ふる道は、其の君に諛はす、其の身の分を犯さず、而して正を以てするを貴ぶの意なり、六爻は易の卦をなす六つの畫段の稱、變化の象をあらはすなり。
②缺。缺は「さす」の意、虎、人を傷づくること一度すれば、耳に一缺生ずと。
③駟。馬の足を縛るを云ふ。
④牯。牝牛のことなり。
⑤射。射師、弓の達人にして、百歩の外に居て能く楊柳の葉を射て百發百中なりといふ。
⑥魯。愚の如し。

寛延庚午の春、先師駿州庵原大乘に在つて、碧巖集を提唱す。會中一朝、予を召して曰く、「夫れ法は隨つて入れば益々深し。」昔日、正受の室に在つて參詳尤も久し矣。變盡して五と成るの大事を、格師兄に究むと雖も、行住穩かならざるこ

と、凡そ三十餘年なり、今日に至つて始めて徹底して、其の蘊奥を盡す。前の所得に比すれば、響の如し。是の故に書して以て諸子に與ふ。

洞上五位偏正口訣

寶鏡三昧に曰く、「重離の六爻、偏正回互、疊んで三と爲り、變盡して五と成る。」

重離 三三 六爻

回互疊變の義は、衆說繁絮たり、今之れを記さず。

- 一 正也、空也、眞也、黒也、暗也、理也、陰也。
- 一 偏也、色也、俗也、白也、明也、事也、陽也。



蓋し寶鏡三昧は誰人の所述といふことを知らず。石頭和尚、藥山和尚及び雲巖和尚、祖々相傳し密室相承して、容易に漏泄すること無く、傳へて洞山和尚に到りて、五位の階漸を著はす。位毎に一偈

を安著して、以て佛道の大綱を提く。謂つべし、夜途の玉炬、迷津の船筏なりと。悲しい哉、近代を安著して、以て佛道の大綱を提く。謂つべし、夜途の玉炬、迷津の船筏なりと。悲しい哉、近代禪苑荒蕪し、無智昏愚を以て、向上直指の禪と稱し、寶鏡三昧、五位偏正等の無上の大法財を以て、老屋裏の破古器と爲して、總に顧みず。恰も瞽者の杖子を抛擲して、閑具なりと言ふに似たり。殊に知らず、自ら小果の見泥裏に墮墜して、死に到るまで出離することを得ず。何ぞ計らん、五位は是れ正位の難毒海を慈過するの舟航、二空の堅牢獄を輾破するの寶輪なることを。往々、進修の要路を知らず、者般の秘訣を諳んせず。故に辟支小果の死水裏に陷溺し、焦芽敗種の黑暗坑に墮没す。終に佛手も救ひ難きに到る。是の故に四十年前、正受の室内に在つて、信受する所の大略を以て法施に當つ。眞正參玄、大死一番底の上士を得て、宜しく須らく密付すべし。中下の機爲に、説く所以の者に非ず。謹んで輕忽すること勿れ矣。

大凡そ教海は浩渺なり、法門は無量なり。其の中間秘授あり、口訣あり、未だ曾て五位の紛煩なる者を見ず。重離の煩評、疊變の鑿說、枝上に枝を添へ、蔓上に蔓を結ぶ、畢竟五位は胡爲の法理の爲に、施設する所以の者知らず。法門に小補なきに非ず、學者をして轉々迷悶を増さしむ。縦ひ鷲子、慶喜の大智も了別しがたき者に似たり。予謂へらく、「祖

①玉炬。「たいまつ」なり。
②閑具。不用品の意なり。
③二空。人空、法空の二を云ふ。
④辟支。辟支佛の事なり、緣覺とも云ふ、詳しくは梵語、辟支佛陀 (Pratyeka-Buddha) のことなり、十二因縁の法を觀じて、我執を除き涅槃に悟入す、小乗の佛果なり。
⑤胡爲。何れの意なり。
⑥小補。小助の意なり。
⑦鷲子。舍利弗 (Śāliśī) の事なり、佛十大弟子の一、父

師豈に無用の煩語を留め得て、後昆を勞役する者ならん乎。我れ之を怪しむこと久し矣。正受の室に入るに及んで、從上の疑咒乍ち斃る矣。學者若し之に依つて進修せば、大いに利益あらん。洞上知識の口授に非ずと爲して、疑惑すること莫れ。須らく知るべし、正受は専ら洞山の頰に參究して後、判斷し將ち來ることを。洞上知識の口授に非ずと爲して、輕忽すること勿れ。正受老人曰く、「祖師初め五位を施護する大意は、學者をして四智を證得せしむるの大慈善巧なり。大凡そ佛に四智あり、所謂大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、是れなり。道流、直饒ひ三學精鍊して、多劫を経るとも、未だ四智を證得せずんば、眞の佛子と稱することを許さず。須らく知るべし、道流眞正參究して、八識賴耶の暗窟を打破するとす。大圓鏡智の寶光、立地に煥發す。卻つて怪しむ、大圓鏡光黒うして漆の如くなることを。此れを正中偏の一位と道ふ。此に於て偏中正の一位に入つて、寶鏡三昧を修すること多時、果して平等性智を證得して、初めて理事無礙法界の境致に入る。行者、此を以て足れりと爲す、親しく正中來の一位に入り、兼中至の眞修に依つて、妙觀察智、成所作智等

を帝沙、母を舍利と名づけ、那蘭陀に生る、佛弟子中智慧第一の稱あり、四衆の爲に尊崇せらる、其の眼、舍利鳥(鷲)と云ふ水鳥)に似る、故に舍利、又は鷲子と云ふ、佛は其の母舍利の生めるより名づく、即ち佛は佛多羅 (Dharmā) の略、子の梵語なり。
⑧四智。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四なり、凡そ佛果を極むる時は、此の四智圓備して至妙なるを以て、四智圓妙と云ふ、之に法界體性智を加へて又五智とも云ふ。
⑨八識賴耶。佛教にて意識を分ちて八とし、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識と第七末那識と第八阿賴耶識とを立つ。
⑩立地。立ち處にの意なり。
⑪理事無礙。理は理性にして、一切諸法の緣起の本體を云

の四智を獲得し、最後に兼中到の一位に到つて折合、還つて炭裏に歸して坐す。知らず何の謂ぞや。精金萬鍛、再び鑢ならず。唯だ恐らくは小を得て足れりと爲ることを。貴ぶべし、五位偏正の功勳に依つて、但だ四智を證するのみに非ず、三身も亦體中に圓かなり。見ずや大乘莊嚴論に曰く、「八識を轉じて四智と成し、四智を束ねて三身を具す」と。是の故に曹溪大師偈あり、曰く、「自性 三身を具す、發明すれば四智を成す。」又曰く、「清淨法身は偏が性、圓滿報身は偏が智、百億化身は偏が行。」

洞山良价和尚五位偏正の頌

正中偏。三更初夜月明の前、怪しむこと莫れ相逢ふて相識らざることを、隠々として猶ほ舊日の嫌を懐く。夫れ正中偏の一位は、大死一番、因地一下、見道入理の正位を指す者なり。若し其れ真正參玄の上士有つて、密參功積み、潛修力充ちて、忽然として打發するときは、虚空消隕し鐵山摧く。上、片瓦の頭を蓋ふなく、下、寸土の足を卓するなし。煩惱なく菩提なく、生死なく涅槃なし。一片虚疑にして、澄潭の底なきが如く、太虚の痕を絶するに似たり。往

ふ、事は一切諸法の縁起の事實にして、十界差別の有様なり、本體たる眞如常住の理體と、一切諸法の事とは別處に別在するものに非ずして事のまゝに理なり、理のまゝに事なるを恰も水と波の如し、理事相即相入して障礙あることなく圓融無碍なるを云ふ。

- ① 功勳。功勳五位なり、作者に異説あること偏正五位の如し、然し洞山禪師の作と云はる。(一)向、(二)奉、(三)功、(四)共功、(五)功々、是なり、偏正五位は宇宙の眞相、諸法の本末を明かにしたるものにして、此の功勳五位は其の究竟地に到達する進修の功を明かにしたるものなり。
- ② 三身。法身、報身、化身なり、又化身の代りに應身を入るゝこともあり。
- ③ 澄潭。澄み渡りたる淵のこと

往此の一位を認得して、以て大事了畢と爲し、以て佛道成辨すと謂つて、死守して放つこと無し。其れ此を之れ死水裏の禪と道ひ、棺木裏の守屍鬼と爲す。任使ひ耽著して三四年を経るも、獨覺自了の小窠窟を出づること能はず。所以に言ふ、機、位を離れず、毒海に墮在すと。此れは是れ法華に謂ふ所の正位に、證を取る底の大癡人なり。假設ひ平等無差別の眞智を明了すること有るとも、萬法差別の妙智を煥發すること能はず。是の故に寂靜無爲、空閑陰處に在つては、内外玲瓏、了々分明なりと雖も、觀照緣かに動搖騷鬧、憎愛差別の塵縁に涉れば、則ち半點の氣力なし。衆苦逼迫す。此の重病を救はんが爲に、假に且く偏中正の一位を設く。

偏中正

失曉の老婆古鏡に逢ふ、分明に觀面更に眞なし、更に頭に迷ふて還つて影を認むることを休めよ。行者、若し彼の正中偏に住著するときは、則ち智常に向背して、見處 偏枯なり。是の故に參玄の上士は常に動中、種々差別塵境の上に坐臥して、悉く目前の老幼尊卑堂閣廊廡、草木山川等の萬法を把つて、以て我が自己本來具足、眞正清淨の面目と爲し、明鏡に對して、自ら面目を見るが如し。一切處に於て是の如く觀照して、歲月を重ねるときは、自然に彼此、我が家一枚の寶鏡と

爲る。是に於て兩鏡の相照して、中心一點の影像なきが如く、心境一如、物我不二、白馬蘆花に入り、銀盤に雪を盛る、此れを寶鏡三昧と謂ふ。⑦涅槃經に謂ゆる如來は目に佛性を見ると、是の謂なり。此の三昧に入得するときは大白牛兒推せども去らず、立地に眞俗不二、唯有一乘、中道實相、第一義諦、平等性智を證得して、目前に運出す。學者若し此の田地に到つて以て足れりとせば、則ち亦是れ舊に因つて、二乘小果の深坑に墮す。何が故ぞ、菩薩の威儀を知らず、佛國土の因縁を了せざるが故に、祖師此の患難を救はんが爲に、重ねて假に正中來の一位を設く。

正中來。無中に路あり塵埃を出でず、但だ能く當今の諱に觸れず、也

た前朝斷舌の才に勝れり。

此の一位は、正乘の菩薩、上位に證を取らざることを明す。菩薩既に如上の所證を以て足れりと爲す、轉進んで退かず、無功用海中、無緣の大悲を煥發し、四弘清淨の大誓に依つて、上求菩提下化衆生の願輪に鞭つ。所謂向去中の卻來、卻來中の向去なる者乎。明暗雙々底の受用を知らしめんが爲に、且く兼中至の一位を設く。兼中至。兩刃鋒を交へて避くることを須ひす、好手還つて火裏の蓮に同じ、宛然として自ら衝天の氣

⑦涅槃經。涅槃は梵語涅槃那(Nirvāṇa)の略にして、寂滅、四寂、滅度、無爲などと譯す。涅槃經は「大般涅槃經」の略、釋尊將に入滅せられんとする時、純陀長者より最後の供養を受け、爲に大衆に向つて、「一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易」の深理を説き玉ひし經なり。北凉、曇無讖の譯、南北兩本あり、南本は三十六卷、北本は四十卷あり。⑧二乘小果。聲聞、緣覺の悟入する小乘の劣果を云ふ。

あり。

此の一位は、菩薩、明暗不二の法輪を撥轉し、紅塵堆裏灰頭土面、聲色隊中七狂八顛、火裏の蓮華の火に逢ふて、色香轉々鮮明なるが如し。入廊垂手の他受用、謂ゆる途中に在つて家舍を離れず、家舍を離れて途中に在らず。是れ凡、是れ聖、魔外も辨すること能はず、佛祖も手を挟むこと能はず。心を擧して向はんと擬すれば、兎角龜毛別山を過ぐ。者裏猶ほ是れ、他の穩坐地に非ず。是の故に謂ふ、宛然として自ら衝天の氣有りと、畢竟如何。須らく知るべし猶ほ兼中到の一位あることを。

⑨鶴林。白隱禪師の號なり、師以後此の法流にあるものを鶴林派と云ふ、現今臨濟の宗旨、大概此の末流に非ざるはなし。

兼中到。有無に落ちず誰か敢て和せん、人々盡く常流を出でんと欲す、折合還つて炭裏に歸して坐す。

鶴林、著語して曰く、「徳雲の閑古錘、幾か妙峯頂を下る、他の癡聖人を備ふて、雪を擔つて共に井を填む。學者若し洞山の兼中到の一位を透得せんと欲せば、先づ須らく此の頌に參すべし。寬延第三庚午の天林鐘吉祥辰、沙羅樹下白隱老衲述ぶ。」或時、先師予に語つて曰く、「洞山五位の頌、各々美を盡せり矣。中に於て兼中到の一頌、善を盡さざるに似たるか、予、奈如とか思へる。予曰く、「然り矣。若し雲門・臨濟の宗旨を以て言はば、此の頌大いに劣れり、洞山の作に非ざるに似たり。彼の宗風は審細に義を論ず、是の故に此の頌、是

の如く指示して、全く一字子の失なし。若し東山下の事を以て之を頌せば、雪竇の徳雲の閑古錐の偈、誠に善盡し美盡すと謂つべきか。尊意如何。先師應諾々して曰く、「誠に然り。因つて此の偈を以て、洞山に代別して茲に著くる而已。」

國譯五家參詳要路門第四

第四 瀉仰宗は作用を明かにし親疎を論ずるを旨と爲す

師諱は靈祐、百丈に嗣ぐ。福州趙氏の子、初め百丈に參す。侍立する次で、夜深けぬ。丈曰く、「看よ、爐中火有りや否や。」師之を撥ひて曰く、「無し。」丈、身を起して深く撥ひて少火を得たり。擧して之を示して曰く、「汝無しと道ふ、者箇、響。」師大悟す、禮謝して所見を陳ぶ。丈曰く、「此れは是れ暫時の岐路のみ。經に云く、「佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。時節既に至りぬれば迷の忽ち悟るが如く、忘の忽ち憶するが如し。方に己が物を省みるに、他より得ず。」故に祖師曰く、「悟了同未悟、無心亦無法」と、只だ是れ虛妄凡聖等の心なければ、本來の心法元自ら具足す。汝今既に然り、善く自ら護持せよ。」

仰山諱は慧寂、瀉山に嗣ぐ。韶州葉氏の子、仰、親を辭して遊方^①の日、人之に戯ぶる者あり。仰の扇上に於て題して曰く、「寂子去つて行脚、諸魔誰をしてか滅せしむ。」仰續いで曰く、「龍、蛇腹の中に生ず、他の十箇月を借る。」人皆之を異とす。蓋し仰は屠門に出づ、諸魔或は猪毛と曰ふ。初め耽源に參す。已に玄

①遊方。遊歴、或は行脚の意なり。
②玄旨。深旨なり、靈奧なり。

旨を悟る。源、仰に謂つて曰く、「國師當時、六代祖師の圓相共に九十六箇を傳へ得て、老僧に授與して曰く、「吾が滅後三十年、南方に一の沙彌あり、到り來つて大いに此の教を興さん。次第に轉授して斷絶せしむること毋れ」と。我れ今汝に付す、汝當に奉持すべし。」遂に其の本を將つて仰に付す。仰一覽して便ち火卻す。源、一日、仰に問ふ、「前來の諸相甚だ宜しく秘惜すべし。」曰く、「當時看了つて便ち燒卻せり。」源曰く、「吾が此の法門、人能く會することなし、唯だ先師及び諸祖、諸大聖人方に委悉すべし、子何ぞ燒くことを得たる。」仰曰く、「某甲、一覽して便ち其の意を知る、但だ用ひ得て本を執るべからず。」源曰く、「然も此の如くなりと雖も子に於て即ち得たり、後人、之を信じ及ばさず。」仰曰く、「和尚若し要せば、重ねて録せんこと難からず。」即ち重ねて一本を集めて上呈す。且つ遺失することなし。源曰く、「然り。」

香嚴智閑禪師、瀉山に參す。山問ふ、「我れ聞く、汝百丈先師の處に在つて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふと。此れは是れ汝聰明靈利、意解識想、生死の根本、父母未生の時、試みに一句を道へ看ん。」嚴、一問せられて、直に得たり茫然たることを。察に歸つて平日看過する底の文字を將つて、從頭に一句を尋ねて 酬對せん 要すれども、竟に得ること能はず。乃ち嘆じて曰く、「晝餅、餓に充つべからず。」屢々瀉山の說破を乞ふ。山曰く、「我れ若し汝に說似せば、汝已後我れを罵り去ら

●委悉。詳細を知るを云ふ。
●察。室の意なり。
●酬對。應答の意なり。

ん、我が説く底は是れ我が底、終に汝が事に干らす。嚴遂に平昔看過する底の文字を將つて、燒卻して曰く、「此の生に佛法を學ばず、也た且つ箇の長行の粥飯僧と作つて、心神を役することを免れん。」乃ち泣いて瀉山を辭して、直に南陽に過ぎて、忠國師の遺蹟を觀て、遂に憩止す焉。一日草木を爇除す。偶々瓦礫を抛つて、竹を撃つて聲を作す。忽然として省悟す。遂に歸つて沐浴し、香を焚いて遙かに瀉山を禮す。讚して曰く、「和尚の大慈恩、父母に 逾ゆ、當時若し我が爲に說破せば、何ぞ今日の事有らん。」

●干らす。關與せずとの意なり。
●爇除。不用の雜草木を刈り取るの意なり。
●逾ゆ。超ゆなり。
●面壁。壁に向つて坐す。今は人なき方に向いて坐するをいふ、達磨の少林九年面壁に徴ふ。

瀉山の宗風、審細にして老婆の臭乳に似たりと雖も、宗旨の峻なること、他師に過ぐることは、香嚴の爲に一言を與へず、他の存せざる所、依行すべきに堪へたるを以てなり。後人は是を以て宗極に通すべき耶。瀉山茶を摘む次で、仰山に謂つて曰く、「終日茶を摘む、只だ子が聲を聞いて、子が形を見ず。」仰、茶樹を撼す。瀉曰く、「子只だ其の用を得て、其の體を得ず。」仰曰く、「未審し和尚如何。」瀉良久す。仰曰く、「和尚只だ其の體を得て、其の用を得ず。」瀉曰く、「子に三十棒を放す。」仰曰く、「和尚の棒は某甲喫す、某甲が棒は誰をしてか喫せしめん。」瀉曰く、「子に三十棒を放す。」瀉起つて曰く、「我れ適來一夢を得たり、爾試みに我が爲に原ね看ん。」仰一盃の水を度す。瀉便ち

面を洗ふ、少頃あつて香嚴至る。瀉曰く、「我れ適來一夢を得たり、寂子我が爲に原ね了る、汝更に原ね看ん。」嚴一盞の茶を點じ來る。瀉曰く、「二子の神通、鷲子^⑤目連に過ぎたり。」

瀉山因に仰山に問ふ、「寂子、心識微細の流注、無にし來ること幾年をか得たる。」仰山敢て答へず、卻つて云く、「和尚、無にし來ること幾年ぞ矣。」瀉曰く、「老僧、無にし來ること已に七年。」瀉又問ふ、「寂子如何。」仰曰く、「惠寂正に鬧し。虛堂拈じて曰く、「古人、玄微を及盡すすら猶ほ走作を恐る、今人只管孟八郎にして道ふ、總に是れ^⑥五逆の人、雷を聞くと。」

瀉山、仰山に問うて云く、「寂子如何。」仰云く、「和尚、他の見解を問ふか、他の行解を問ふか。若し他の行解を問はゞ、某甲知らず。若し是れ見解ならば、一瓶の水を一瓶の水に注ぐが如し。」雲門云く、「某甲が見處、從上の諸聖と一絲毫許りも移易せず。」

仰山、瀉山に問うて曰く、「百千萬境、一時に來るとき如何。」瀉山云く、「青是れ黄にあらす、長是れ短にあらす、諸法各々自位に住す、汝が事に干るに非ず。」仰山則ち作禮す。

中邑洪恩禪師、僧の來るを見る毎に、手を拍して和々の聲を作す。仰山謝戒す。邑、來るを見て、禪牀上に於て口を拍して曰く、「和々。」仰山即ち西より東に過ぐ。邑又口を拍して、和々の聲を作す。

仰山又東より西に過ぐ。邑、口を拍して和々の聲を作す。仰山又中心に立つ、然して後に謝戒し了る、卻つて退いて後に立つ。邑云く、「什麼の處より此の三昧を得來る。」仰山云く、「曹溪の印子上に於て脱し將ち來る。」邑云く、「汝道ふ、曹溪、此の三昧を用つて、什麼人をか接す。」仰云く、「一宿覺を接す。」仰又復た中邑に問うて云く、「和尚、什麼の處より此の三昧を得來る。」邑云く、「我れ馬祖の處に於て、此の三昧を得來る。」

此の中邑の一則は、瀉仰宗の所據と爲すべき歟。擧す。王太傅、招慶に入つて煎茶す。時に朗上座、明招の與に銚を把る。朗、茶銚を翻卻す。太傅見て上座に問ふ、「茶爐下是れ什麼ぞ。」朗云く、「捧爐神。」太傅云く、「既に是れ捧爐神、什麼としてか茶銚を翻卻す。」朗云く、「仕官千日、失一朝に在り。」太傅拂袖して便ち去る。明招云く、「朗上座、招慶の飯を喫卻し了れり、卻つて江外に去つて野煙を打せん。」朗云く、「和尚作廢生。」招云く、「非人其の便を得たり。」雪竇云く、「當時茶爐を踏倒せん。」

碧巖集第四十八則、茶道も亦向上出身の作用有ることを明す。茶道に本末中の三節あり。本とは人を成すなり。人各々皆散亂塵動の器のみ。故に恒事を以て、自然に定を教ふ、我れを誠むるを戒と爲す、亂れざるを定と爲す、物に徹するを慧と爲す。是を以て點茶に約して親疎を論するのみ。

⑤ 茶銚翻卻。碧巖集第四十八則にあり。

⑥ 目連。大目連連 (Mahāmaṇḍīpa) の時、釋尊十大弟子の一人にして、神通第一なりと云ふ。
⑦ 五逆の人。五逆罪を犯せる人の意なり。
⑧ 一糸毫。少しもの意なり。

主に五事あり。一に室を掃ひ、二に物を居る、三に具を改め、四に茶を點す、五に客を接す。客と作るに五あり、一に室に進み、二に座に著く、三に衣を改め、四に茶を喫す、五に物に徹す。夫れ人、平生を精鍊すれば、作用自ら清し。是を本を成すと曰ふ。宗旨に參詳し、瀉仰の理に至る、是を末を成すと曰ふ。事理に通達し、物々感ふことなし、是れを中道の理を得ると曰ふ。凡そ三義を得、十道に通ずるときは、則ち謂つべし、茶道の要を究盡すと。此の問答の如き三義、眼瞞す、笑ふべきに堪へたるのみ。雪竇の拈語、茶道を蘇活す、請ふ高く眼を著けよ。

①居る。据るなり、茶室内に器物を配置するなり。

國譯五家參詳要路門第五

第五 法眼宗は利濟を先にし親疎を論するを旨と爲す

師諱は文益、餘杭魯氏の子、祝髮して開元寺覺律師に詣して、具戒を受く。覺化を四明に盛にするに及んで、師往いて毘尼を習ふ。文章に工なり、覺之れを奇とす、目けて吾が門の游夏と爲す。師、玄機一發するを以て、雜務俱に捐つ、錫を振つて南適して、福州に抵る。初め長慶に見ゆ、契悟する所なし、進修の輩と湖外に之かんと擬す。既に發して雨に値ふ、①少く城西の地藏に憩ふ。堂に入つて、藏の地爐に坐するを見る。師に問ふ、「此の行何くにか之く。」曰く、「行脚し去る。」曰く、「行脚の事作麼生。」曰く、「知らず。」曰く、「知らざる最も親し。」三人火に附く。因に肇論を擧す、「天地と我れと同根」の處に至つて、藏又曰く、「山河大地と自己と是れ同か是れ別か。」修曰く、「同。」藏、兩指を豎て、熟々之を視て、兩箇と云つて便ち起ち去る。雨霽れて辭して行く。藏之れを送つて問うて曰く、「上座、尋常三界唯心と説く。」乃ち庭下の石を指して曰く、「且く道へ、此の石心内に在るか心外に在るか。」師曰く、「心内に在り。」曰く、「行脚の人、甚の來由を著

①毘尼。毗奈耶(Vinaya)の略、調伏、離行とも譯す、舊譯に律と云へると同じ、道德的規律なり、能く衆生の身、口、意の三業を調和し、諸の惡業を伏滅して、諸の善業を作さしむるが故に此の名あり。②少く。暫くなり。

てか、塊石を安じて心頭に在るや。師、窘して以て對ふること無し。遂に包を放つて俱に決擇を求む。月餘に近うして見解を呈し、道理を説く。藏曰く、「佛法は是れ慙廢にあらず。」曰く、「某甲此に到つて辭窮り理絶せり。」藏曰く、「若し佛法を論せば、一切現成。」師大悟す。臨山・崇壽に出世す。

僧、師に問ふ、「慧超、和尚に咨す、如何なるか是れ佛と。」師云く、「汝は是れ慧超と。」則監院の如き

師の會中に在つて、也た曾て參請入室せず。師一日問うて云く、「則監院、何ぞ來つて入室せざる。」則云く、「和尚豈に知らずや、某甲青林の處に於て箇の入頭あり。」師云く、「汝試みに我が爲に舉せよ看ん。」則云く、「某甲問ふ、如何なるか是れ佛。」林云く、「丙丁童子、來求火と。」師云く、「好語、恐らくは備錯つて會せん、更に説くべし看ん。」則云く、「丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲が如きは是れ佛、更に去つて佛を覓む。」師云く、「監院、

果然として錯つて會したる。則、不憤して便ち起單す、江を渡つて去る。師云く、「此の人、若し回らば救ふべし、若し回らずんば救ひ得ず。」則、中路に到つて自ら付つて云く、「他は是れ五百人の善知識、豈に我れを賺すべけんや。」遂に回つて再び參す。師云く、「爾但だ我れに問へ、我れ爾が爲に答へん。」則便ち問ふ、「如何なるか是れ佛。」師云く、「丙丁童子、來求火。」則言下に大悟す。如今有る者は只管瞠眼して、解會を作す、所謂彼れ既に瘡なし、之を傷ること勿れ。這般の公案、久參の者は一舉

- ① 慧超問佛は碧巖第七則なり。
- ② 起單。單は僧堂にて靈水の坐する處を云ふ。
- ③ 付。思ふ、或は度(は)かるるなり。

して、便ち落處を知る。法眼下、之を箭鋒相柱ふと謂ふ。更に五位、君臣、四料簡を用ひず、直に箭鋒相柱ふることを論す。是れ他の家風、此の如し。一句下に便ち見ば、當陽に便ち透らん。若し句下に向つて尋思せば、卒に摸索不着ならん。師出世して五百衆あり、是の時佛法大いに興る。時に韶國師久しく疎山に依る、自ら旨を得たりと謂へり。乃ち疎山平生の文字頂相を集めて、衆を領じて行脚す。師の會下に至つて、他亦去つて入室せず。只だ參徒をして衆に隨つて入室せしむ。一日、師陞座。僧あり問ふ、「如何なるか是れ曹源の一滴水。」師云く、「是れ曹源の一滴水。」其の僧惘然として退く。韶、衆に在つて之を聞いて、忽然として大悟す。後出世して師に承嗣す。頌あり、呈して曰く、「通玄峯頂、是れ人間にあらず、心外無法、滿目青山。」師印して云く、「只だ這の一頌、吾が宗を繼ぐべし。子後に王侯の敬重あらん、吾れ汝に如かず。」師、圓成實性の頌に云く、「理窮つて情謂を忘す、如何が驗齊あらん、到頭霜夜の月、任運に前溪に落つ、菓熟して猿を兼ねて重く、山長うして路迷ふに似たり、頭を擧ぐれば殘照在り、元是れ住居の西。」

- ④ 相柱ふ。相支ふなり。
- ⑤ 君臣。君臣五位にして、作者不明、洞山の作とも其の弟子曹山の作とも云ふ。
- ⑥ 四料簡。臨濟禪師の四料簡を云ふ、洞山の五位と共に廣く禪門に行はる。
- ⑦ 任運。自然の意なり。
- ⑧ 之れは碧巖第四十則なり。

擧す。陸亘大夫、南泉と語話する次で、陸云く、「肇法師道く、「天地と我れと同根、萬物と我れと一體なり」と。甚だ奇怪なり。」南泉、庭前の花を指して、大夫を召して曰く、「時の人此の一株の花を見

ること、夢の如く相似たり。」

石頭、因に肇論を閲して、此の萬物を會して、自己と爲すと云ふ處に至つて、豁然として大悟す。後一本の參同契を作る、亦此の意を出でず、看よ他、慙慙に問ふ。且く道へ、什麼の根にか同じく、那箇の體にか同じき。這裏に到つて也た奇特なることを妨げず、豈に他の常人、天の高き地の厚きを知らざるに同じからんや。豈に慙慙の事あらんや。陸亘大夫慙慙に問ふ。奇なることは甚だ奇なり、只だ是れ教意を出でず、若し教意是れ極則なりと道はゞ、世尊何が故ぞ、更に花を拈じ、祖師更に西來して作麼にかせん。南泉の答處、衲僧の鼻巴を用ひて、他の爲に痛處を拈出して、他の窠窟を破る。遂に庭前の花を指して、大夫を召して云く、「時の人此の一株の花を見ることが、夢の如くに相似たり。」人を引いて萬丈の懸崖上に向つて、打一推して他の命根をして斷せしむるが如し。巖頭道く、「此れは是れ向上の人の活計、只だ目前の些子を露して、電拂に如同す。」南泉の大意是の如し、虎兒を擒へ龍蛇を定むる底の手脚ありて、這裏に到つて、也た須らく是れ自ら會して始めて得べし。道ふことを見すや、向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。看よ他の雪竇顯出すること。曰く、「聞見覺知一々に非ず、山河は鏡中に在つて觀ず、霜天月落ちて夜將に半ならんとす、誰と共にか澄潭影を照して寒じ。」

南泉一株花の話、是れ宗門の骨髓なり。先師、雲山老宿と商量するが如き、夫れ雲門法眼の二宗

は、大概詩の通韻、叶韻の如し。本巖頭雪峯下より出づ。巖頭は瑞巖主人公に出でて、遊化三昧、受用確乎たり。故に瀉仰の作用、高貴尊勝の風を出す。雪峯は即ち支沙雲門を出す。支沙一轉して地藏を得たり。又一轉して法眼宗を得たり、故に雲門法眼の二宗は言句迷ひ易し。

五祖弘忍大師、深く願輪に乗じ、再來して法演と爲る。雲門臨濟の受用を弄し得て、車の兩輪の如し。是れを東山下の暗號密令と道ふ。圓覺佛光國師、大宋に在つて虛堂室中に往いて、參詳許多の次で、卒に言句三昧を得たり。雲門大師、心賺然ならず、再び大燈國師と作つて、我が宗を扶起す、別に生涯あることを示す。又關山一休等、専ら五家に來由あることを教諭す。祖師、兒孫を加助することは是の如く親切なり。眞淨文禪師頌あり、曰く、「雲門臨濟百花の春、一一靈機總に神あり。總に神あり、祖庭復た春ならずや。」

- ①巖頭。雲巖禪師を指す。
- ②法演。五祖法演禪師なり。
- ③賺然ならず。飽き足らず、即ち不滿の意なり。
- ④關山。關山惠玄禪師、即ち妙心寺開山無相大師なり。
- ⑤一休。大徳寺の一休宗純禪師なり。

國譯五家參詳要路門附錄 二門

臘八示衆 第一

朔日夜示衆に曰く、「夫れ禪定を修する者は、先づ須らく厚く蒲團を敷き結跏趺坐して、寛く衣帶を繫け、脊梁骨を豎起し、身體をして齊整ならしむべし。而して始め數息觀を爲すべし。無量三昧の中には、數息を以て最上と爲す。氣をして丹田に満たさしむ、而して後に一則の公案を拈じて、直に須らく斷命根を要すべし。若し是の如く歲月を積んで怠らざらんば、縦ひ大地を打つて失すること有るも、見性は決定して錯らず。豈に努力せざらんや、豈に努力せざらんや。」

第二夜示衆に曰く、「楞嚴經に曰く、「一人道を成じて眞に歸すれば、十方虚空悉く消殞す」と。凡そ道を修する處、必ず護法神あり、魔障神あり。譬へば城市に人多く聚れば、賊盜亦隨つて聚るが如し。心願強きときは、護法神力を得、心魔動くときは障神力を得。是の故に學道は、先づ須

①臘八。臘月、即ち十二月八日のこと、此の日釋尊、菩提樹下に於て成道し玉へりとして、各宗法會を執行す、之を成道會と云ふ、禪宗の各道場にては十二月一日より八日まで、臘八接心として最も嚴重なる接心會を行ひ、雲水の修行を進め、又一面釋尊成道の昔を偲ぶなり。

②結跏趺坐。圓滿安坐の義、身體疲倦せず、精神また安穩、覺王も佛弟子の之を行ふを見ては怖畏すといへり。これに全跏趺坐と半跏趺坐の二種あり、足の表を跏といひ、裏を跏といふ、兩足互に纏結して

らく大誓願を發し、辭讓謙遜を專にし、心を一切衆生の下に置き、威く皆度脱せんことを要すべし。佛祖の大道、願力なくして能く徹底する者あることなし。譬へば射を學ぶ者の如く、一箭一箭、鵠に中らんことを欲す。始め中らずと雖も、久しくして已まざれば、必ず其の妙を得。參學も亦復た然り。一念々々、大憤志を起し、精神を抖擻して、須らく大道の淵源に徹せんことを要すべし。是の如く念々退かざるときは、一切の法理、現前せすと云ふことなし。無上菩提、猶ほ俯して地芥を拾ふが如くならん焉。」

第三夜示衆に曰く、「如來の正法眼藏、的々相承、是れを傳燈の菩薩と謂ふ。如來の正法眼藏、能く護持する、是を護法の菩薩と謂ふ。傳燈と護法とは猶ほ師家と檀越との如し、師檀合はざるときは、大法獨り行れず、而して護法を最上と爲す。昔弘法大師嘗て大日如來を祈請して曰く、「誰か是れ護法の最上なる耶。」如來告げて曰く、「辯才天に如くはなし」と。是れ傳燈は第一たりと雖も、若し護法の力なきときは、佛法只だ獨り行はれざる所以なり。是の故に護法を最上と爲す。又坐禪は一切諸道に通ず。若し神道

坐するなり、即ち右足を以て左歷上に安じ、左足を以て右歷上に安ずる坐相を全跏趺坐と云ひ、右足を以て左歷上に安ずるのみを半跏趺坐と云ふ。

③脊梁骨。脊骨(せばれ)のことなり。

④丹田。下腹部なり。

⑤斷命根。一生懸命、或は無我に入るの意なり。

⑥楞嚴經。梵語 Śūraṅgama-sūtra 具には「大佛頂如來密印修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」と云ひ、又略して「首楞嚴經」とも云ふ、唐の神龍元年天竺沙門、般刺密諦譯出す。

⑦鵠。的なり、的の眞中を云ふ。

⑧地芥。芥は「ちり」なり、地上に落ちてある塵芥を云ふ。

⑨傳燈。傳法と云ふが如し。

を以て之れを道はゞ、身は即ち天地の小なる者なり、天地は即ち身の大きな者なり。天神七代、地神五代、並に八百萬神悉く皆身中に鎮坐せり。此の如く鎮坐の諸神を祭祀せんと欲せば、神史に謂ゆる靈宗の神祭に非ずんば、之れを祭ること能はず。靈宗の神祭は禪定に非ずんば、之を祭ること能はざるなり。脊梁骨を豎起し、氣を丹田に充して、正身端坐、眼見耳聞、一點の妄想を難へず、六根清淨を獲るときは、則ち是れ天神地祇を祭るなり。一炷の坐と雖も、其の功德鮮しと爲す。是の故に道元禪師曰く、「勤むべきの一日は、貴ぶべきの一日なり。勤めざるの年百は、恨むべきの百年なり」と。嗚呼、恐るべく慎しむべし。」

- ⑤ 難。交、或は混の意なり。
- ⑥ 六根。眼、耳、鼻、舌、身、意の六なり。
- ⑦ 道元禪師。日本曹洞宗の祖、承陽大師なり。
- ⑧ 初祖大師。達磨大師なり。

第四夜示衆に曰く、「數息觀に六妙門あり。所謂、數、隨、止、觀、還、淨なり。息を數へて三昧に入る、是を數と謂ふ。息を數へて漸く熟すれば、唯だ出入の息に任せて、三昧に入る、是を隨と謂ふ。十六特勝等、要を以て之れを言はゞ數隨の二字に歸す。故に初祖大師曰く、「外諸縁を息して、内心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして、以て道に入るべし」と。内心喘ぐことなしとは、根本に依らざるなり。心牆壁の如くとは、直向進前することなり。此の偈甚深なり、汝等請ふ試みに本參の語頭を取つて、牆壁の如く、直に進み去れ。使令ひ士を以て大地を撃つて失することあるとも、見性は決定して徹せざることなけん。努力せよや、努力せよや。」

第五夜示衆に曰く、「所謂、接心は長期百二十日、中期九十日、下期八十日なり。尅期決定して、大事を明めんと欲す、故に一衆戶外に出でず、況んや雜談をや。參禪は只但だ勇猛の一機のみ。汝等聞かすや、近頃、庵原に平四郎と云ふものあり、不動尊の石像を彫刻して、以て吉原山中瀑布の處に安置す。忽ち瀑水の漲落するを覽るに、水泡、珠を跳して前泡後泡、或は流ること一尺にして消し去り、或は二尺三尺にして消し去り、乃至二間三間にして消し盡く。宿縁の感する所、竟に世間の無常、都べて水泡の如くなるを覺知す。殆んど一身に通つて、安處するに堪へず。偶々人の澤水法話を讀むを聽くに、曰く、「勇猛の衆生の爲には、成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には、涅槃三祇に亘る」と。因つて忽ち大憤志を發して、獨り浴室に入つて、堅く戸扉を鎖し、脊梁骨を豎起し、兩拳を握り、雙眼を瞪り、純一に坐禪す。妄想魔境、蜂午紛起し、法戰一場して、終に斷命根を得て、深く無想定に入る。天明に及んで鳥雀の舎を繞つて啼くを聞き、自ら全身を求むるに終に得べからず。唯だ兩眼脱出して、地上に在るを見る。須臾にして忽ち爪際の痛を覺ゆ、而して兩眼位に歸る、四支起つことを獲たり。是の如くすること三夜、坐起一に前の如し。第三日の朝に及んで、面を洗ふて庭樹を視るに、大いに平日の所見に異なり、甚だ奇異と爲す。仍つて隣僧に問ふ、總に辨せず、因つて鶴林に見えんと欲す、橋を昇いて薩埵嶺を踰ゆ。子浦の風景を眺望して、始めて知る、先に得る所

- ① 庵原。静岡縣庵原郡なり。
- ② 戸扉。戸や窓を云ふ。
- ③ 瞪。見つめる、或は見ひらくなり。
- ④ 子浦。田子浦のことなり。

は草木國土悉皆成佛底の端的なることを。徑に鶴林に見えて、屢々爐竈に入つて、數段の因縁を透
過す。彼は是れ一個の凡夫なり、未だ曾て參學の事を知らず。然れども纔かに兩三夜にして、是の如
きの事を證す、唯だ勇猛の 一機、妄想と相戰つて勝つことを得る者なり。汝等何ぞ勇猛の憤志を發
せざるや。」

第六夜示衆に曰く、(時に侍者茶を行く。)「建仁開山千光祖師、入宋の時、
偶々暑に中つて 瘧を患ふ。一老翁あり、爲に茶を飲ましむ。瘧速かに治
す。因つて茶の實を齎し來りて、 禁廷に貢して、之を宇治縣に種るしむ。
又 明惠上人に贈る。上人亦之を桐尾に種う。故に千光・明惠を以て茶の
祖と爲す矣。夫れ茶の能たる、苦を以て體と爲す、故に能く心の臟を養ふ。
心の臟治るときは、四臟自ら平かなり。明惠上人曰く、「茶は能く睡眠を除
く、修道の人喫すべき者なり」と。又外に之を論すれば、心の臟を養ふに
苦修を第一と爲す。専ら精彩を著けて、苦修骨に徹するときは、神氣朗然
たり。故に慈明曰く、「古人の刻苦なる、光明 必ず盛大なり」と。禪關策進に曰く、「心を役して已ま
ざれば、果證を得る」と。果證は決定の義なり。是の故に汝等宜しく苦修を貴ぶべし。近頃奥州に文
溟和尚と云ふ者あり、予に見えんと欲して百計すること六年、遂に來つて掛搭を求む。予が曰く、「賜

①爐竈。罽物師の用ふる「ふい
こ」なり、之は其の會下或は
門下となりて訓練を施さるゝ
を云ふ、禪門にて能く用ひら
るる語なり。
②一機。一念の意なり。
③瘧。黃疸のことなり。
④禁廷。宮廷に同じ。
⑤明惠上人。桐尾高山寺に住
す、華嚴、禪、密等の諸宗を兼
修せらる。

紫の大和尚なるも、法眼未だ明かならざれば、予に於ては小僧と爲す、呵罵すれども猶ほ未だ足らず。
若し身に世儀を存し、意に尊大を抱かば、予に見えて何の益かあらんや。」曰く、「某、誠に大法の爲に
乍入叢林の沙彌なり、請ふ和尚、慈悲を惜まず接待せよ。喝雷棒雨、豈に敢て命を惜しまん哉。」因
つて入室を許す、一夏九旬の間、刻苦精鍊、予が手中の棒を喫すること、擧げて計るべからず。果し
て我が宗 向上の大事を契證す。行くに臨んで長く弟子の禮を取ることを約す。然れば則ち勇猛の一
機、竟に法成就に至る、慎まざる可けんや。」

第七夜示衆に曰く、「一子出家すれば九族、天に生ずと。夫れ出家は、須
らく眞の出家を要すべし。所謂、眞の出家とは、大誓願を憤起し、勇猛精
進にして、直に命根を斷すれば、豁然として法性現前す、是れを眞の出家
と謂ふ。九族生天も、亦眞實にして虚しからず。昔、播州に一りの女人あ
り、懐胎の夜に當つて、自ら願を發して曰く、「此の兒若し男兒ならば、必ず當に出家せしむべし」と。
其の夜夢に一りの老人あり、來り告げて曰く、「吾れは此の家九代已前の祖なり、死して冥府に墮し
て無量の苦を受く、而今汝が勝願力に依恃して、永く地獄の苦を脱することを得たり。」又甲州に良
山和尚と云ふ者あり。徒を匡し衆を領す。臘八、例に依つて衆と禪坐す。一夜其の亡母、刀を携へ來
つて腋下に刺す、大いに叫ぶこと一聲、血を吐いて悶絶す矣。山、良久して蘇す。次の日俄かに衆

④乍入。今入、或は新參の意な
り。
⑤冥府。冥途、或は地獄と云ふ
が如し。
⑥蘇す。蘇生、「甦る」なり。

と別れて行脚す。一鉢三衣、風喰露宿、師を尋ね道を訪ふ。年を経て禪定頗る熟す、三昧に入らんと欲す。時に亡母復た來り現す、纔かに眼を舉すれば、即ち隠れ去る。他日深く三昧に入る、恰も海の湛然たるが如し。亡母來りて復た告げて曰く、「吾れ始め冥府に入る、鬼卒皆敬して曰く、是れ出家の母なりと。都べて苦惱なし、豈に思はんや、公の壯なるに及んで、獄卒皆曰ふ、將に謂へり、是れ出家の母なりと、卻つて是れ俗漢の母なりと。鐵棒鐵枷、呵責言ふべからず。其の恨骨に徹す、是の故に先の夜、來つて汝を刺す。然して汝悔いて寺を出でて行脚す。中ごろ來つて公を見る、生滅の念猶ほ未だ盡きず、故に隠れ去る。今定慧殆んど明かなり、吾が苦患亦盡きたり矣。特に天上に生ずることを得たり、故に來つて謝を告ぐるのみ。」

茲を以て之れを觀れば、汝等皆父母あり、兄弟あり、眷屬あり、生々を以て之れを數ふれば、豈に惟だ千萬人のみならんや、悉く皆六道に輪廻して、無量の苦を受く。汝等の成道待つことは、猶ほ大早に雲霓を望むが如くならん者なり。如何ぞ悠悠として坐ながら之を見て大願を發せざらん乎。光陰惜む可し、時人を待たず、旃れを勉めよ、旃れを勉めよ。」

師一日、侍者に示して曰く、「予、侍者を使ふこと數十年、熟々之を見るに、三等の侍者あり、曰く孝、曰く正、曰く平なり。所謂、孝は唯だ事ふるに純業を以てして、能く常に師の意を安んずる者なり。所謂、正は一諾して能く命を須ひて、常に怠らざる者なり。所謂、平は孝正なくして、事ふるに

①特に、ことさらに、おまけに
なり。
②庸常、普通、或は人並と云ふこと。

庸常を以てし、半須ひ半違ふ者なり。其餘は言ふに足らざるのみ焉。在昔、阿難、佛に侍すること三十年、頗る聖意に合へり、佛、總持第一と稱し玉ふ。香林、雲門に侍すること十八年、紙衣に語句を録して、鑿喙の宗を繼ぎ得たりき。天源の柏庵は大應に事へて、生前に自ら肖像を彫つて、師の點眼を受け、滅後常に此の像に奉じて在世に異ならず。入宋の時、但だ晝容を裏んで暫くも身を離さず。吾が先師白隱老漢は、祖翁透鱗に松蔭に侍して、寒夜、被、衾裏に入つて、老軀を抱持して以て之を温む。古人其の師に侍する、槩して此の如し、今人何ぞ之を懷はざるや。」

又示衆に曰く、「夫れ大法の關繫は至つて重し矣。命、懸絲の如し。若し一箇半箇、眞正の種草を打出して、這の的々相承、向上の大事を傳ふるにあらずんば、我れ亦佛法中の罪人のみ。風穴、已に此の嘆あり、況んや其の他をや。我れ熟々舊參の諸子を顧みるに、半箇も亦堪忍するなし。縱令ひ少分得力の者有るも、兩三世に過ぎず、泯然たる而已、豈に痛まざらんや。我が此の正宗は、支竺扶桑、地を掃ふて盡く矣。北鬱東弗亦知んぬ可きのみ。我れ自ら之を證す、我が此の正宗、正に一日の天に在るが如し。汝等何ぞ大勇猛の心を憤起して、之れを明むることを欲せざらん乎。汝等、若し果して此の志なきときは、俱に是れ佛法中の罪人なり。此の日既に没せば、四天下咸暗黒にして、護法の星辰も亦誰に依つてか世に出でん耶。乞ふ各々急に須らく志を起すべし。」言ひ訖つて涙屢々下る。

③の姿、蒲團なり。
④支竺扶桑、支那、天竺、日本なり。

看經榜 第二

眞言門に三密相應の法あり。所謂印相明正なる、是れを身密と爲す。神咒清朗なる、是れを口密と爲す。本尊と自身と不二なりと觀ず、是れを意密と爲す。禪門の誦誦に亦三密あり、正身端坐、根に空缺なき、是れ身密。二には朗聲耳に徹して、能所不二なる、是れ口密。三には眼耳相交へて念正眞なり、是れ意密のみ。若し能く通達して大自在を得ば、動と不動と當體寂滅、語と不語と眞箇圓融、念と無念と究竟平等、是れを納僧門下眞正看經誦咒の法と爲すなり。學者宜しく委悉すべし。

夫れ如法の看經は自他の上に於て、各々四徳を具す。初めに自の四徳とは、一には三昧を助く、音聲、神に入つて、耳根圓通を得るが故に。二には障礙を滅す、善神來り護り、惡鬼怖れ潛むが故に。三には病患を除く、音の四大に徹して、氣血流溢するが故に。四には心願を満す、運命日に改り、天真に隨順するが故に。次に他の四徳とは、一には諸天を歡ばしむ、威神を増長し、階位を升進するが故に。二には幽魂を救ふ、業報を消除して菩提心を發するが故に。三には見聞を益す、惡念を遠離し、信種を成就するが故に。四には畜類を利す、音聲の及ぶ所、普く勝縁を結ぶが故に。

論じて曰く、見性修定は、禪門の正行、看經禮佛は、禪門の助道分のみ。少林九坐、曾て看經の

- ①神咒。陀羅尼等をいふ。
- ②根。六根なり。
- ③四大。地水火風のことにて、全身の意なり。
- ④少林九坐。達磨大師が少林寺に九年間面壁修定せられたるを云ふ。

名なし。曹溪一世、何ぞ禮佛の勞有らん。然りと雖も、消業養道の方便たるに至つては、又先徳必ず之れを破敗すること有るに非ず。是の故に、藥山看經、黃檗禮佛、薦福の弘辨、宣宗の間に答へ、永明の智覺、法華の業を兼ね、汾陽の一榻坐三閻藏、明教の三昧稱福祈懺、趙州三五夜にして、兩蛇口を争ふの相を變じ、古鼎二十年にして、四賤、軀に萃まるの業を改む。舜老夫、日に定課あり、老に垂として益々堅し、即ち一日作さざれば一日食はざるの語あり。呆佛照、深夜修敬して、未だ嘗て少しも懈らす。遂に雪頂丰姿二人、堂に入つて異を顯すことを感す。阿難、盡形壽、佛に事へて未だ究竟を得ず、滅後迦葉の惡手段に逢ふて、哭泣懺謝して、漸く室に入ることを得たり。俱胝三十二年、咒を持して入證なしと雖も、後天龍に見え、一指頭に透脫圓融、始めて験を發するに及ぶ。爰に二義あり、彼の傳へ道ふが如き、關山三年、密に兩宮に祈り、南山毎日恭しく一塔を營むの類、即ち悟後、傳法度生の壽を祈る。又大瘤多歲、馬祖の塔を禮し、乾峯七日、文殊の智を祈る者に至つては、未悟已前哀求懇禱得道の大願なり。茲に由つて之れを見れば、看經禮佛、亦捨つ可からざる底の理ある歟。間々宗匠ありて、之れを斥け之れを呵する者は、初心他佛を求めて、自佛を求めず、或は福壽を求め、或は利養を祈る。佛祖不傳の妙道を以て、何間に掛在せざるときは、皆是れ邪魔の種族に墮す。最も祖師の

- ①一指頭。傳燈卷十一、俱胝の傳に、俱胝、一日實際に勸破せられ、憤慨やる方なく、偶杭州の天龍和尚の來るに會ふ、俱胝依つて問ふに、天龍一指頭を示す、俱胝茲に於て大悟す、之れより以後、他の所問に對し、言語を以て答へず、常に一指頭を豎つ。

眞風を戕害するに堪へたるが故なり。若し亦一等に之れを敗するを以て、是れを爲せば、内外障難、隙を窺ふて日に加はらん焉。我れ恐らくは佛法夫れ久しからざらん歟。故に無因和尙曰く、「我が門の禮樂は佛法久住の相のみ」と。學者宜しく之れを詳かにすべし。」

國譯五家參詳要路門 終

國譯五家參詳要路門に跋す

① 三光老師の五家要路を著述するや、諒に其れ故ある哉。今時、知見解會を以て、正悟と爲すものあり、無事甲裏に坐在して、正修と爲すものあり、昭昭靈靈を認めて、自己と爲すものあり、
② 洪洪寂寂に著して、禪定と稱するものあり、言句上に向つて、死模樣を作すものあり、
③ 古人の糟粕を嘗めて、奇特玄妙と爲すものあり、
④ 一聯の偈頌を綴つて、死活を論ずるものあり、
⑤ 胡喝亂棒を以て、大機大用と爲すものあり、
⑥ 中に就いて下劣なるは、念佛を以て公案と爲し、誦呪を以て定課と爲すものを生ず。看經禮拜して、淨土を願ひ、天堂を樂み、匆匆忙忙として、終日心身を勞役す。皆是れ禪病にして、

- ① 三光老師。東嶺和尙は三光窟又は不能主と號す、師年六十七にしてこの書を述す。
- ② 知見解會。智慧や分別を以てなり。
- ③ 不知不會。知はしりた顔、會はひとりかてんなり。
- ④ 昭々靈々。目のさきにも鼻の先にもぶらついてゐるなど。
- ⑤ 洪々寂々。たゞ靜かに心をすましてゐればなどなり。
- ⑥ 古人精粕。古人の語言文字詩偈等をいふ。
- ⑦ 一聯偈頌。一首の偈や頌をいふ。
- ⑧ 胡喝亂棒。みだりに喝を下しむやみに棒を施すこと。
- ⑨ 大機大用。これが禪宗の極意でござるのとの意。
- ⑩ 定課。日々のきまりのしごとなり。
- ⑪ 禪病。吾が宗では絶後に蘇生せぬ、悟は皆だめなり、病的ではほんたうの佛法の見解ではなしと。
- ⑫ 講說因緣。佛祖向上の要路をとりつままで意。
- ⑬ 晦岩。名は照、越山に住す、

眞正の見解に非ず、豈に是れを五家の宗要と謂はんや。是の故に、三光老師、慈悲箇の痼疾を救はんが爲に、且く各家一二の諸訛の因縁を撮出して、以て釘を抜き楔を抽く底の一方便と爲すのみ。若し或は晦岩眼目あり、希叟讚辭あり、何ぞ者般の杜撰を用ひんやと謂はば、阿呵呵。君に勸む此の一盃の酒を盡せよ、西陽關を出でて故人なけん。咄。今也、松雲主人、五家の要路に徹見するもの、實に今時の指南車と爲し、乃し衣資を喜捨し以て上梓して、之を世に共ふ矣。庶幾はくは鶴林の門風を扶起せんと欲するものか、其の志以て嘉尚すべし焉。且つ附録二門は、初心禪者の座右に供して、以て睡魔を警むるものなり。因つて數語を綴つて、以て之を巻尾に贅すといふ。

時に 文政丁亥の秋九月

阿鼻窟老衲大觀叟

宋の淳熙年中、人天眼目三卷を著す、師承未詳なり。
 ①希叟。名は紹曼、宋の人、無準範に嗣ぐ、理宗の寶祐二年五家正宗贊一篇を編す。
 ②勸君。この詩は古人の詩の末句なり、こゝで己が一べんの舉揚をせすべの意にて、この著語をしるすなり。
 ③松雲主人。攝津國豐島郡池田在中川原松雲禪寺の住持某なり。

り、師の參徒といふ。
 ④文政丁亥。丁亥は十年なり、仁孝天皇の御宇。
 ⑤阿鼻窟。大觀叟は文珠、別號擔雲、又阿鼻窟と號す、東嶺慧に嗣ぐ、丹州法常皇寺十世なり、この書及び宗門無盡燈論をも校訂し、この書の原本の板は師が自ら書せしを刻したるものなり。

五家參詳要路門序

夫五家之宗者、欲傳我宗乘向上大事而已、然只如解世間流布文字、妄解以爲要、故宗祖各各教訓其宗要路、而分門戶、自爲五之一宗風、可知根本只向上大事也、五家即差別要門也、第一臨濟之戰機鋒、亦有全提半提之別、第二雲門之擇言句、亦有全提半提之別、第三曹洞之究心地、亦有全提半提之別、第四潯仰之明作用、亦有全提半提之別、第五法眼之先利濟、亦有全提半提之別、曰全提者、如來正法眼藏、全分荷擔受用之義也、半提者、未及全提、或半或及十之一者也、半提之言類多難分、學者止于半途、爲究竟者、誠可憐愍邪、予三十年前、雖聞先師之命、至于變盡成五之大事、與雲門言句老僧今日徹遊言句中、等之密意、漸聞信受、而尙未徹、參究已經三十餘霜、頗得其要領矣、天明戊申歲、予應八幡圓福之選、結夏之日、告諸子曰、夫此山者、初祖大師與聖德太子、神佛值遇之靈迹、吾邦無比之祖場也、老僧無德、當其選者、時以無人也、古人道、有法有食處、應住、無法無食處、應住、無法有食處、不應住、諸禪德、此山實無食、一夏枉舉揚碧巖一百則、當法食耳、勇于法、不管衣食者、已自十至百、又告衆曰、往日峩山棹公、請予于折衷眼目、提裝五家法要、不果已十年、今再太靈鑑公、逼近左右、責其不果、諸禪德若欲得究明自己、不登五家階位、非我家種子、豈道達磨真孫、是故先得曹洞道體、爲初究雲門宗旨、爲最極焉耳、五月望講智門蓮花話了時、諸子各立五家門戶、激發請

益老僧求間擬往河西西邨柳庵宅，凌晨乘駕下山過河，至道西之濱，途中忽然撞着先師叮囑境界歡踊之餘，打一偈曰：去年今日始爲語，今歲斯時自入門。仲夏過望辰向巳，五家要路是緣緣。于時天明戊申五月既望也，入宅坐臥異前日事。在柳庵宅五日，歸山試諸子，日夜參詳不懈。五家兒孫將獲其人，時有一人問曰：五家宗要是爲何事？予曰：何以然問？曰：微根本事，尙未得其人，而參五家宗要，竝無一箇半箇，然則五家之辯，無所用焉？予曰：不然，汝觀種子結華果，種荆棘則得荆棘，種華果則得華果，是故吾大應老祖參詳異他，虛堂識曰：明明說與虛堂叟，東海兒孫日轉多云。大燈已受佛國印，爲一箇種草，因甚麼還嗣老祖麼？是故關山國師遺誠曰：宿昔吾大應老祖，正元之間，越風波大難地，蚤入宋域，遇著虛堂老禪于淨慈，真參實證，末後徑山盡其蘊奧，是故得路頭再過之稱，受兒孫日多之記。單傳楊岐正脈於吾朝者，老祖之功也。次先師大燈老人，參得老祖于西京，侍者京輩巨峯，其隨從之際，脇不到席者多年，頗有古尊宿之風，卒受老祖淵粹之命，長養者二十年，果彰大應遠大之高德，起佛祖已墜之綱宗，貽真風不地之遺誠，鞭策後昆者，先師之功也。老僧爰受華園先帝敕請，創開此山，先師嚼飯養嬰兒，後昆直饒有忘卻老僧之日，忘卻應燈二祖之深恩，不老僧兒孫，備等請務其本，白雲感百丈之大功，虎丘歎白雲之遺訓，先規如茲，誤而莫摘，葉尋枝好，已上如我關山國師者，越凡超聖，獨出物外底，慧眼這裏無生死句，管老僧屋爲什麼，逐高梨出門等機，吾祖宗大事諄乎諄者也，向上事外，不可擬議之宗風，辛辣難當底國師，又有何妄分別，獨於此佛法不得人之嘆息，兼五家風彩，兒孫無眼之哀憐，何如是遺誠耶？何如是悲傷耶？日多真孫，豈可無。

拋身捨命策勵，請回思再三熟讀，子細觀察，莫作容易之看，至囑至禱。

于昔天明第七歲戊申雨安居之日

前住豆之龍澤東嶺頭陀圓慈撰焉

五家參詳要路門第一

前住豆之龍澤臨濟正宗東嶺圓慈編
前住丹之大梅賜紫比丘大觀文珠校

第一 臨濟宗戰機鋒論親疎爲旨

師初在黃檗會下，行業純一，首座乃歎曰：雖是後生，與衆有異，遂問上座：在此多少時？師曰：三年。首座云：曾參問也無？師曰：不曾參問，不知問箇什麼？首座云：汝何不去問堂頭和尚，如何是佛法的大意？師便去問，聲未絕，黃檗便打。師下來，首座云：問話作麼生？師曰：某甲問聲未絕，和尚便打，某甲不會。首座云：但更去問。師又去問，黃檗又打如是。三度發問，三度被打。師來白首座云：幸蒙慈悲，令某甲問訊和尚，三度發問，三度被打，自恨障緣不領深旨，今且辭去。首座云：汝若去時，須辭和尚去。師禮拜退。首座先到和尚處云：問話底後生，甚是如此法，若來辭時，方便接他，後向穿鑿成一株大樹，與天下人作蔭涼。去在。師去辭，黃檗云：不得往別處去。汝向高安灘頭大愚處去，必爲汝說。師到大愚，大愚問：什麼處來？師云：黃檗處來。大愚云：黃檗有何言？師云：某甲三度問佛法的大意，三度被打，不知某甲有過無過。大愚云：黃檗與麼老婆，爲汝得徹困，更來這裏問有過無過？師於言下大悟云：元來黃檗佛法無多子，大愚搗住言，這尿牀鬼子，適來道有過無過，如今卻道黃檗佛法無多子，偏見箇什麼道理。速道速道。師於大愚

脅下築三拳，大愚托開云：汝師黃檗，非干我事。師辭大愚，卻回黃檗。黃檗見來，便問：這漢來來去去，有什麼了期？師云：祇爲老婆親切，便人事了。侍立黃檗，問：什麼處去來？師云：昨奉慈旨，令參大愚去來。黃檗云：大愚有何言句？師遂舉前話。黃檗云：作麼生得這漢來？待痛與一頓。師云：說什麼待來？即便喫。隨後便掌。黃檗云：這風顛漢，卻來這裏拏虎鬚。師便喝。黃檗云：侍者，引這風顛漢參堂去。後瀉山舉此話，問仰山。臨濟當時得大愚力，得黃檗力。仰山云：非但騎虎頭，亦解把虎尾。

臨濟慧照禪師，最初入處痛快，悟後參禪警脫。雖有五家各立宗旨，初中後事，頭正尾正，中興如來正法眼藏，明了祖師西來密旨者，只此臨濟一宗最爲至當而已。是故古來以本錄稱錄中之王，元帝賜臨濟院現住，以臨濟正宗之印，是乃冠旁之初也。所謂臨濟是正宗基源義也。

師栽松次，黃檗問：深山裏栽許多作什麼？師云：一與山門作境致，二與後人作標榜。道了將鏗頭打地三下。黃檗云：雖然如是，子已喫吾三十棒了也。師又以鏗頭打地三下，作噓噓聲。黃檗云：吾宗到汝大興於世，後瀉山舉此話，問仰山。黃檗當時祇囑臨濟一人，更有入在。仰山云：有祇年代深遠，不欲舉似和尚。瀉山云：雖然如是，吾亦要知汝但舉看。仰山云：一人指南吳越，令行，遇大風即止。

仰山識語，風穴則近而不當。曇橘洲曰：大慧則當而不穩，然以理事總，則風穴爲理，大慧爲事，以大三災應庵之語最爲的當。歟！夫臨濟之一宗，超出他者，所以具五事也。第一，入處痛

快，已詳序門也。第二，悟後明正者，自從大愚證徹，黃檗卻回後師資參詳，甚以明了，加之參瀉山，侍德山，他師所不及。如是著明也。第三，樹德蔭孫者，此栽松一則堪垂兒孫，末後與三聖問答遺偈，遺誠亦不可及。歟！第四，試道待人者，破夏因緣，和百丈再參之則，是又臨濟之外，誰敢恁麼？第五，受用真脫者，佛佛所印，祖祖所證，彼此明照，如見天鑑，雖然先師常謂我徒曰：五家宗要，人人不兼，我宗不全，宜省察爾。

師因半夏上黃檗，見和尚看經，師云：我將謂是箇人，元來是搗黑豆老和尚，住數日乃辭去。黃檗云：汝破夏來，不終夏去。師云：某甲暫來，禮拜和尚，黃檗遂打趁令去。師行數里，疑此事，卻回終夏。師一日辭黃檗，檗問：什麼處去？師云：不是河南，便歸河北。黃檗便打，師約住與一掌。黃檗大笑，乃喚侍者，將百丈先師禪版机案來。師云：侍者，將火來。黃檗云：雖然如是，汝但將去。已後坐卻天下人舌頭去在。後瀉山問仰山：臨濟莫辜負他黃檗也無？仰山云：不然。瀉山云：子又作麼生？仰山云：知恩方解報恩。瀉山云：從上古人，還有相似底也無？仰山云：有。祇是年代深遠，不欲舉似和尚。瀉山云：雖然如是，吾亦要知子但舉看。仰山云：祇如楞嚴會上阿難讚佛云：將此深心奉塵刹，是則名爲報佛恩，豈不是報恩之事？瀉山云：如是如是，見與師齊，滅師半德，見過於師，方堪傳授。

臨濟一宗，古人評論曰：百丈再參，馬祖三日耳聾之大事，與此破夏因緣，古今獨步之榜樣。稍子可依行底之大事，公案爲體，言句爲衣，心地爲宗，體用爲行，利濟爲旨。師上堂小參以是爲宗，合五歸一，可貴歟！

上堂云：赤肉團上，有一無位真人，常從汝等諸人面門出入，未證據者看看，時有僧出問：如何是無位真人？師下禪牀，把住云：道道，其僧擬議，師托開云：無位真人是什麼？乾屎橛，便歸方丈。有定上座到參，問：如何是佛法大意？師下牀，繩擒住，與一掌，便托開，定佇立，傍僧云：定上座，何不禮拜，定方禮拜，忽然大悟。

師初至河北，住院，見普化，克符二上座，乃謂曰：我欲於是建立黃檗宗旨，汝可成視我。二人珍重下去，三日後，普化卻上來，問云：和尚，三日說什麼？師便打。三日後，克符上來，問：和尚，昨日打普化，作甚麼？師亦打。至晚，小參云：有時奪人不奪境，有時奪境不奪人，有時人境俱奪，有時人境俱不奪，如何是奪人不奪境？師云：烈日發生鋪地錦，嬰孩垂髮白如絲，如何是奪境不奪人？師云：王令已行天下徧，將軍塞外絕烟塵，如何是人境俱奪？師云：并汾絕信，獨處一方，如何是人境俱不奪？師云：王登寶殿，野老謳歌。

上堂，兩堂首座相見，同時下喝，僧問師：還有賓主也無？師云：賓主歷然。師云：大眾，要會臨濟賓主句，問取堂中二首座。

師一日示衆云：參學人，大須子細，如賓主相見，便有言論往來，或應物現形，或全體作用，或把機權喜怒，或現半身，或乘獅子，或乘象王，如有真正學人，便喝先拈出一箇膠盆子，善知識不辨是境，便上他境上，做模樣，學人又喝，前人不肯放，此是膏肓之病，不堪醫治，喚作賓看主，或是善知識，不拈出物，隨學人問處，即奪，學人被奪，抵死不放，此是主看賓，或有學人，應一箇清淨境界，出善知識前，善知識辨得是境，把得住，拋向坑裏，學人言：大好善知識，即曰：咄哉，不

識好惡，學人便禮拜，此喚作主看主，或有學人，披枷帶鎖，出善知識前，善知識更與安一重枷鎖，學人歡喜彼此不辨，喚作賓看賓，大德山僧所舉，皆是辨魔揀異，知其邪正。

僧問風穴：如何是賓中賓？穴曰：攢眉坐白雲。如何是賓中主？穴云：入市雙瞳瞽。如何是主中賓？穴云：回鸞兩曜新。如何是主中主？穴云：磨礪三尺劍，待斬不平人。

要會臨濟賓主句，先須參賓主歷然，則四賓主妙處，自然徹底得明了，此風穴問答，豈但四賓主，全提半提大事，自然盡妙矣。

師臨遷化時，據座云：吾滅後，不得滅卻吾正法眼藏。三聖出云：爭敢滅卻？和尚正法眼藏，師云：已後有人問，爾向他道什麼？三聖便喝。師云：誰知吾正法眼藏？向這瞎驢邊滅卻，言訖，端然示寂。

凡師上堂小參等語，舉揚開示，法身為本，脫體現成，似老婆禪，穩密純真，言句為衣，暗號密令，不許他知，見性不交，他物絕影，真實諦當，依法立則，體用如如，不出法界，受行自在，誰敢窺覷，任緣導利，問不容髮，根無錯謬，攝入為貴，如是五家要路自兼，可謂真之宗風也。

五家參詳要路門第二

第二 雲門宗擇言句論親疎爲旨

師初參睦州州旋機電轉直是難湊泊尋常接人纔跨門便搗住云道道擬議不來便推出云秦時轆轤鑽師凡去見至第三回纔敲門州云誰師云文偃纔開門便跳入州搗住云道道師擬議便被推出師一足在門闔內被州急合門撈折師腳師忍痛作聲忽然大悟後來語脈接人一模脫出雲門後於陳操尙書宅住三年睦州指往雪峰處去師至峯莊見僧問上座上山去耶僧云是師云寄一則語問堂頭和尚不得道是別人語僧云諾師云上座到山見和尚上堂衆集便出握腕立地曰者老漢頂上鐵枷何不脫卻其僧依師教峯見者僧與麼道便下座攔胸把住曰速道速道僧無語峯拓開曰不是汝語僧曰是某語峯曰侍者將繩棒來僧曰不是某語是莊上一浙中上座教某來道峯曰大衆去莊上迎取五百人善知識來師次日上山峯一見便曰因甚得到與麼師以手拭目趨出峯奇之師又出衆問如何是佛峯曰莫寐語師便禮拜一住三年峯一日問子見處如何師云某見處與從上諸聖不移易一絲毫許後到陳操尙書尙書與裴休李翱同時凡見一僧來先請齋觀錢三百須是勘辨一日師到相看便問儒書中卽不問三乘十二分教自有座主作麼生是衲僧家行腳事師曰尙書曾問幾人來操云卽今問上座師云卽今且置作麼生是教意操云黃卷赤軸師曰這箇是文字語言作麼生

是教意操曰口欲談而辭喪心欲緣而慮亡師曰口談欲而辭喪爲對有言心欲緣而慮亡爲對妄想作麼生是教意操無語師曰尙書看法華經是否操曰是師曰經中道一切治生產業皆與實相不相違背且道非非想天卽今有幾人退位操又無語師曰尙書且莫草草師僧家拋卻三經五論來入叢林十年二十年尙自不奈何尙書又爭得會操禮拜云某罪過又一日與衆官登樓次望見數僧來一官人云來者總是禪僧操云不是官云焉知不是操云待近來與爾勘過僧至樓前操驀召云上座僧舉頭操謂衆官云不信道

馬大師曰楞伽經以佛語心爲宗無門爲法門又曰凡有言句是提婆宗只以此箇爲主圓悟曰諸人盡是衲僧門下客還會體究得提婆宗麼若道言句是也沒交涉若道言句不是也沒交涉且道馬大師意在什麼處後來雲門拈道馬大師好言語只是無人問有僧便問如何是提婆宗門云九十六種汝是最下一種

舉師以拄杖示衆云拄杖子化爲龍吞卻乾坤了也山河大地甚處得來雪竇頌云拄杖子吞乾坤徒說桃花浪奔燒尾者不在拏雲攫霧腥腮者何必喪膽亡魂拈了也聞不聞直須灑灑落落休更紛紛紆紆七十二棒且輕恕一百五十難放君竇驀拈拄杖下座大衆一時走散舉翠巖夏末示衆云一夏以來爲兄弟說話看翠巖眉毛在麼保福云作賊人心虛長慶云生也師云關雪竇頌曰翠巖示徒千古無對關字相酬失錢遭罪潦倒保福抑揚難得嘵嘵翠巖分明是賊白圭無玷誰辨真假長慶相詰眉毛生也舉乾峯示衆云法身有三種病二種光汝等諸人還委悉麼時師出衆云庵內人爲甚麼不知

庵外事峯呵呵大笑師云猶是學人疑處峯云汝是甚麼心行師云和尚亦要委悉峯云汝恁麼而可始得穩坐地。

先師拈云若人欲見息畊錄先須參此話二大老說話見徹分明許汝親見息畊老人。

三光拈云大凡醫治乾峯三種病有三種法所謂外療與本道也請耆婆爲診脈師請扁鵲爲配劑師卻向仲景傷寒論商量時有僧出曰和尚自病未能除論人病作什麼光曰汝道老僧有何病僧喝云瞎漢鐵枷鐵鎖膿滿滿地光笑曰恰備汝療耶僧曰某甲有公事乞請別人好光擊杖三下曰春山行處與難極春鳥春花唱拍新僧便禮拜光道蒼天蒼天答拜舉乾峯示衆云舉一不得舉二放過一著落在第二師出衆云昨日有一僧從天台來卻往南嶽去乾峯云典座今日不得普請。

先師或時到太平山中平坦處有一座磐石因於石上晏坐數刻忽然舉頭拈起世歌有省曰見舉而觀則鷲頭山見降則亦獅毛鹿濱之釣船先師此時相看雲門大師三十年後於大乘堂中碧巖會復知其骨髓。

舉五祖和尚在太平上堂僧問如何是臨濟下事祖云五逆聞雷僧問如何是雲門下事祖云紅旗閃爍僧問如何是曹洞下事祖云馳書不到家僧問如何是潯仰下事祖云斷碑橫古路僧禮拜祖云何不問法眼下事僧云留與和尚祖云巡人犯夜。

是真實入證者五家共隨之本據也雖然一齊念取無請益意者參到彌勒下生亦不可得也慎哉。

舉五祖和尚住黃梅東山時拈香云此一炷香在舒郡二十七年三所住院諸人總知遂欲燒次復云不得也須說破某十五年行腳初參遷和尚得其毛次於四海參見尊宿得其皮又到浮山圓鑑老處得其骨後在白雲端和尚處得其髓方取承受與人爲師今日燕向爐中從教薰天炙地有耳朵者辨取。

五祖大師始自破頭山栽松以來下山投水行乞路傍面謁四祖黃梅養母赤縣留孫流入東海爲日多識底之消息也。

先師六十九歲寶曆三年癸酉夏於甲府能成禪刹提唱人天眼目開筵示衆云。

瞎卻人天雙眼目波斯夜半落空谷歸來謔語無人量各袒左邊訪背觸夫以人天眼目秘訣佛海狂浪禪苑毒花。

是明作者未盡吾家妙其所出事宜見五宗先師常道古德判云人天眼目卻成盲目又甚有故若以依行恐誤後人。

昔晦巖老人親輯編願孫思子近驚背老漢問註解逐惡隨邪斃疑咒於千載當來揚家醜於五家衰末。

作者只恐兒孫大誤註主又示事實可達而已。

三玄三要淨地上拋土撒扇五位君臣澆末代匡徒導衆開示轉位就功之大事震殺認賊爲子之鈍根。

臨濟所嚴呵者恐認七之無分別識錯爲根本如來藏也曹洞所指示者只恐認七地之有

功用智偏守八地之無功用行，是認賊爲子之鈍根也。

法眼爲殿後，臨濟爲先鋒，豈其容優劣於其際？雲門爲天子，潯仰爲公卿，須知非宗風無高下，爲殿後者，八宗皆以利人爲究竟，五家共導學者，是基本也。雖宗旨以高爲貴，其所教示，自有高下前後之分而已。

常恨顧鑑嘆時人盡錯會，爲報六相義須親切參究。

眼目曰：師每見僧顧之，卽云：鑑，僧擬議，師卽曰：嘆，而錄之者曰：顧鑑嘆，又作頌曰：舉不顧，卽差互，擬思量，何劫悟，先師久參雲門宗大事，始會三字旨，依之三字爲宗，別通格外，六相義，法眼宗第一表法，見本書註，茲爲易解，別設一譬，如是男是女，是總相，如六根在，是別相，如依辨用，是同相，眼見耳聞，是異相，如聚成身，是成相，如四大分死，是壞相，通宗而後參訣。

從頭五派秘訣，盡可究明至要也。澆季末代，法滅盡之効驗，諸方盡言，不參話頭，不知文字，唯一向無念無心去，是向上禪，爾不知麼？佛言：法門無量誓願學，佛道無上誓願成。

依此示衆，先師之意，尊重五家，如是明著，若至無其事者，搜索不足，參詳不及之所致也。臨濟上堂，僧問：如何是第一句？濟云：三要印開朱點側，未容擬議主賓分，問：如何是第二句？濟云：妙解豈容無著問，瀝和爭負截流機，問：如何是第三句？濟云：看取棚頭弄傀儡，抽牽都來裏有人，濟又云：一句語須具三玄門，一玄門須具三要，有權有實，汝等諸人作麼生會？下座。

先師曰：於此三句，甚有深理，可盡參詳，如彼函蓋乾坤等句，非真宗旨，至此上堂，始知雲門臨濟同一三昧，若復不知此旨，底卽非虛堂日多真孫，必也。

五家參詳要路門 第三

第三 曹洞宗究心地論親疎爲旨

師諱良价，嗣雲巖，越州諸暨人，姓俞氏，初謁忠國師，問無情說法，不契，後到潯山，山問：聞闍黎曾問國師無情說法，是否？師云：是，潯云：試舉看，師舉了，潯云：我者裏也有些子，只是罕遇其人，師云：便請潯以拂子點一點，師云：請和尚爲某甲說，潯云：父母所生口，終不爲子說，師云：此間莫有同時慕道者麼？潯令見雲巖，師辭直造雲巖，請益前話，巖云：不見彌陀經云：水鳥樹林，悉皆念佛念法，師因有省，作偈云：也太奇，也太奇，無情說法不思議，若將耳聽，終難會，眼處聞聲方得知，一日問巖：某甲有餘習，未盡，巖云：汝曾作甚麼來？云：聖諦亦不爲，曰：還得歡喜地也未？云：歡喜卽不無，如糞堆頭拾得一顆明珠，師辭巖問：百年後忽有人，問還遷得和尚真，如何祇對巖良久云：只者是，師沈吟，巖云：价闍黎，承當箇事，大須審細，師猶涉疑，後因過水觀影，方得頓悟，作偈云：切忌從他覓，迢迢與我疎，我今獨自往，處處得逢渠，渠今正是我，我今不是渠，應須恁麼會，方得契，如如，示衆云：末法時代，人多乾慧，若要辨驗真僞，有三種滲漏，一見滲漏，機不離位，墮在毒海，二情滲漏，智常向背，見處偏枯，三語滲漏，體妙失宗，機昧終始，曹山辭次，師授山先雲巖所付寶鏡三昧五位顯訣畢，山再拜而去。

正中偏，三更初夜月明前，莫怪相逢不相識，隱隱猶懷舊日嫌。

偏中正，失曉老婆逢古鏡，分明覩面更無真，休更迷頭還認影。
正中來，無中有路出塵埃，但能不觸當今諱，也勝前朝斷舌才。
兼中至，兩及交鋒不須避，好手還同火裏蓮，宛然自有衝天氣。
兼中到，不落有無誰敢和，人人盡欲出常流，折合還歸炭裏坐。

寶鏡三昧

如是之法，佛祖密付，汝今得之，宜善保護。銀盤盛雪，明月藏鷺，類之弗齊，混則知處。意不在言，來機亦赴。動成窠臼，差落顧佇。背觸俱非，如大火聚。但形文彩，即屬染污。夜半正明，天曉不露。為物作則，用拔諸苦。雖非有為，不是無語。如臨寶鏡，形影相覩。汝不是渠，渠正是汝。如世嬰兒，五相完具。不去不來，不起不住。婆婆和和，有句無句。終不得物，語未正故。重離六爻，偏正回互。疊而為三，變盡成五。如荳草味，如金剛杵。正中妙挾，敲唱雙舉。通宗通塗，挾帶挾路。錯然則吉，不可犯忤。天真而妙，不屬迷悟。因緣時節，寂然昭著。細入無間，大絕方所。毫忽之差，不應律呂。今有頓漸，緣立宗趣。宗趣分矣，即是規矩。宗通趣極，異常流注。外寂內搖，繫駒伏鼠。先聖悲之，為法檀度。隨其顛倒，以緇為素。顛倒想滅，肯心自許。要合古轍，請觀前古。佛道垂成，十劫觀樹。如虎之缺，如馬之弱。以有下劣，寶几珍御。以有驚異，狸奴白牯。羿以巧力，射中百步。箭鋒相直，巧力何預。木人方歌，石女起舞。非情識到，寧容思量。臣奉於君，子順於父。不順非孝，不奉非輔。潛行密用，如愚若魯。但能相續，名主中主。

寬延庚午之春，先師在駿州庵原大乘，提唱碧巖集會中一朝，召予曰：夫法隨入益深，昔日在正受室參詳，尤久矣。雖究變盡成五之大事於格師兄，行住不穩，凡三十餘年也。至于今日，始徹底盡其蘊奧，比前所得，如影響，是故書以與諸子。

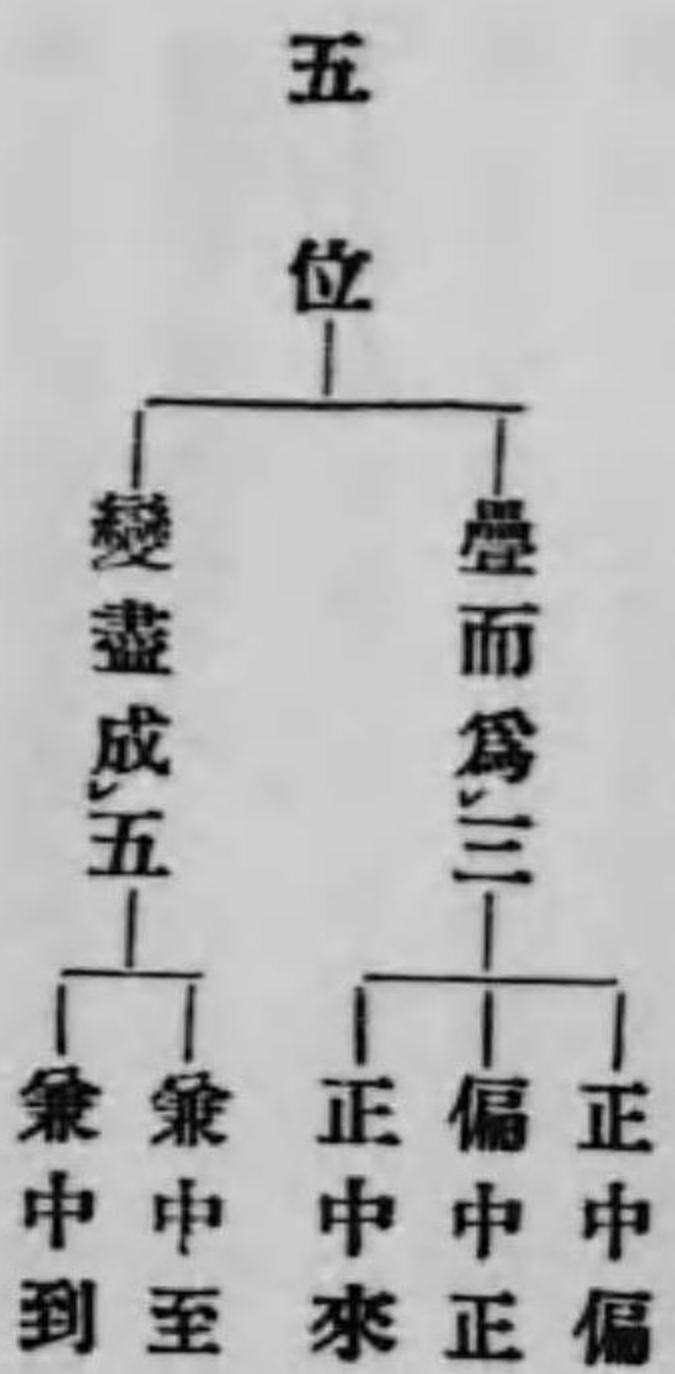
洞上五位偏正口訣

寶鏡三昧曰：重離六爻，偏正回互，疊而為三，變盡成五。

重離 ䷥ 六爻

回互疊變之義者，衆說繁絮，今不記之。

- 一 正也，空也，真也，黑也，暗也，理也，陰也。
- 二 偏也，色也，俗也，白也，明也，事也，陽也。



蓋寶鏡三昧者，不知誰人之所述。石頭和尚、樂山和尚及雲巖和尚、祖祖相傳，密室相承，無容易漏泄。傳到洞山和尚，著五位階漸，每位安著一偈，以提佛道大綱，可謂夜途玉炬，迷津船筏。悲哉！近代禪苑荒蕪，以無智昏愚，稱向上直指禪，以寶鏡三昧五位偏正等無上大法財為老。

屋裏破古器，總不顧，恰似瞽者拋擲杖子，言閑具，殊不知自躡墜小果見泥裏，到死不得出離，何計五位是驀過正位，雜毒海之舟航，輾破二空，堅牢獄之寶輪，往往不知進修要路，不諳者般秘訣，故陷溺辟支小果，死水裏，蹠沒焦芽，敗種黑暗坑，終到佛手難救，是故四十年前，在正受室內，所信受大略，以當法施，得真正參玄大死一番底上士，宜須密付，非所以爲中下機設者，謹勿輕忽矣。

大凡教海浩渺，法門無量，其中間有秘授有口訣，未曾見如五位紛煩者，重離煩評，疊變鑿說，枝上添枝，蔓上結蔓，不知畢竟五位者，所以爲胡爲法理，施設者矣，非無小補於法門，令學者轉增迷悶，似縱鶯子慶喜，大智難了別者，予謂祖師豈留得無用煩語，勞役後昆者乎，我怪之久矣，及入正受室，從上疑咒乍斃矣，學者若依之進修，大有利益，莫爲非洞上知識口授疑惑，須知正受專參，究洞山頌，而後判斷將來，勿爲非洞上知識口授輕忽，正受老人曰：祖師初施設五位大意者，令學者證得四智之大悲善巧也，大凡佛有四智，所謂大圓鏡智，平等性智，妙觀察智，成所作智是也，道流直饒三學精鍊，經多劫，未證得四智，不許稱真佛子，須知道流真正參究，打破八識，賴耶暗窟時，大圓鏡智，寶光立地煥發，卻怪大圓鏡光黑如漆，此道正中偏一位，於此入偏中正一位，修寶鏡三昧多時，果證得平等性智，初入理事，無礙法境界，致行者以此不爲足，親入正中來一位，依兼中至真修，獲得妙觀察智，成所作智等四智，最後到兼中到一位，折合還歸炭裏坐，不知何謂精金萬鍛，不再鑛，唯恐得小爲足，可貴依五位偏正功勳，非但證四智，三身亦體中圓焉，不見大乘莊嚴論曰：轉八識成四智，束四智具三身，是故曹溪

大師有偈曰：自性具三身，發明成四智，又曰：清淨法身，備之性，圓滿報身，備之智，百億化身，備之行。

洞山良价和尚五位偏正頌

正中偏，三更初夜月明前，莫怪相逢不相識，隱隱猶懷舊日嫌。

夫正中偏一位者，指大死一番，因地一下，見道入理之正位者也，若其有真正參玄上士，密參功積，潛修力充，忽然打發，則虛空消隕，鐵山摧上，無片瓦蓋頭，下無寸土卓足，無煩惱，無菩提，無生死，無涅槃，一片虛凝如澄潭，無底似大虛，絕痕，往往認得此一位，以爲大事了畢，以謂佛道成辦，死守無放，其此之道，死水裏禪，爲棺木裏守屍鬼，任使耽著經三四十年，不能出獨覺，自了小窠窟，所以言機不離位，墮在毒海，此是法華所謂正位取證，底大癡人也，假設有明了平等無差別真智，不能煥發，萬法差別妙智，是故在寂靜無爲空閑陰處，雖內外玲瓏，了了分明，觀照纔涉動搖，騷鬧憎愛差別塵緣，則無半點氣力，衆苦逼迫，爲救此重病，假且設偏中正一位。

偏中正，失曉老婆逢古鏡，分明覩面更無真，休更迷頭還認影。

行者若住著彼正中偏，則智常向背，見處偏枯也，是故參玄上士，常坐臥動中種種差別塵境上，悉把目前老幼尊卑，堂閣廊廡，草木山川等之萬法，以爲我自己本來具足，真正清淨面目，如對明鏡，見自面目，於一切處，如是觀照，重歲月，則自然彼此爲我家一枚寶鏡，於此如兩鏡相照，中心無一點影像，心境一如，物我不二，白馬入蘆花，銀盃盛雪，此謂寶鏡三昧。

涅槃經所謂如來目見佛性，是之謂也。入得此三昧時，大白牛兒推不去，立地證得，真俗不二，唯有一乘，中道實相，第一義諦，平等性智，運出目前，學者若到此田地，以爲足，則亦是依舊墮二乘小果深坑，何故？不知菩薩威儀，不了佛國土因緣，故祖師爲救此患難，重假設正中來一位。

正中來，無中有路出塵埃，但能不觸當今諱，也勝前朝斷舌才。

此一位者，明上乘菩薩，不正位取證，菩薩既不以如上所證爲足，轉進不退，無功用海中，煥發無緣大悲，依四弘清淨大誓，願上求菩提，下化衆生，願輪所謂向去中卻來，卻來中向去者乎？爲令知明暗雙雙底受用，且設兼中至一位。

兼中至，兩及交鋒，不須避，好手還同火裏蓮，宛然自有衝天氣。

此一位，菩薩撥轉明暗不二法輪，紅塵堆裏灰頭土面，聲色隊中七狂八顛，如火裏蓮華，逢火色香轉鮮明，入廊垂手他受用，所謂在途中不離家舍，離家舍不在途中，是凡是聖，魔外不能辨，佛祖不能挾手，擬舉心向，兔角龜毛過別山者，裏猶是，非他穩坐地，是故謂宛然自有衝天氣，畢竟如何，須知猶有兼中到一位。

兼中到，不落有無誰敢和，人人盡欲出常流，折合還歸炭裏坐。

鶴林著語曰：德雲閑古錐，幾下妙峯頂，備他癡聖人，擔雪共填井，學者若欲透得洞山兼中到一位，先須參此頌。寬延第三庚午天林鐘吉祥辰，沙羅樹下白隱老衲述。

或時先師語予曰：洞山五位頌，各各盡美矣，於中兼中到一頌，似不盡善乎？予思：奈如予曰：

然矣，若以雲門臨濟宗旨而言，則此一頌大劣，似非洞山作也。彼宗風審細論義，是故此頌如是指示而全無一字子之失，若以東山下事頌之，雪竇德雲閑古錐之偈，誠可謂盡善盡美歟，尊意如何？先師應諾諾曰：誠然也，因以此偈代別洞山著于茲而已。

五家參詳要路門第四

第四 僞仰宗明作用論親疎爲旨

師諱靈祐嗣百丈福州趙氏子初參百丈侍立次夜深丈曰看爐中有火否師撥之曰無丈起身深撥得少火舉而示之曰汝道無者箇禪師大悟禮謝陳所見丈曰此是暫時岐路耳經云欲識佛性義當觀時節因緣時節既至如迷忽悟如忘忽憶方省己物不從他得故祖師曰悟了同未悟無心亦無法只是無虛妄凡聖等心本來心法元自具足汝今既然善自護持

仰山諱慧寂嗣馮山韶州葉氏子仰辭親遊方日人有戲之者於仰扇上題曰寂子去行腳諸魔使誰滅仰續曰龍生蛇腹中借他十箇月人皆異之蓋仰出屠門諸魔或曰猪毛初參耽源已悟玄旨源謂仰曰國師當時傳得六代祖師圓相共九十六箇授與老僧曰吾滅後三十年南方有一沙彌到來大興此教次第傳授毋令斷絕我今付汝汝當奉持遂將其本付仰仰一覽便火卻源一日問仰前來諸相甚宜秘惜曰當時看了便燒卻也源曰吾此法門無人能會唯先師及諸祖諸大聖人方可委悉子何得燒之仰曰某甲一覽便知其意但用得不可執本也源曰雖然如此於子即得後人信之不及仰曰和尚若要重錄不難即重集一本上呈且無遺失源曰然

香嚴智閑禪師參馮山山問我聞汝在百丈先師處問一答十問十答百此是汝聰明靈利意

解識想生死根本父母未生時試道一句看嚴被一問直得茫然歸寮將平日看過底文字從頭要尋一句酬對竟不能得乃自嘆曰晝餅不可充饑屢乞馮山說破山曰我若說似汝汝已後罵我去我說底是我底終不干汝事嚴遂將平昔看過底文字燒卻曰此生不學佛法也且作箇長行粥飯僧免役心神乃泣辭馮山直過南陽觀忠國師遺跡遂憩止焉一日爰除草木偶拋瓦礫擊竹作聲忽然省悟遽歸沐浴焚香遙禮馮山讚曰和尚大慈恩逾父母當時若爲我說破何有今日之事

馮仰宗風審細雖似老婆臭乳宗旨之峻過于他師者以爲香嚴不與一言他所不存堪可依行也後人以是可通宗極耶

馮山摘茶次謂仰山曰終日摘茶只聞子聲不見子形仰撼茶樹馮曰子只得其用不得其體仰曰未審和尚如何馮良久仰曰和尚只得其體不得其用馮曰放子三十棒仰曰和尚棒某甲喫某甲棒教誰喫馮曰放子三十棒

馮山睡次見仰山來馮便面壁仰曰和尚何得如此馮起曰我適來得一夢爾試爲我原看仰度一盆水馮便洗面少頃香嚴至馮曰我適來得一夢寂子爲我原了汝更爲原看嚴點一盞茶來馮曰二子神通過於鶖子目連

馮山因問仰山寂子心識微細流注無來得幾年仰山不敢答卻云和尚無來幾年矣馮曰老僧無來已七年馮又問寂子如何仰曰惠寂正鬧虛堂拈曰古人及盡玄微猶恐走作今人只嘗孟八郎道總是五逆人聞雷

瀉山問仰山云：寂子如何？仰云：和尚問他見解，問他行解，若問他行解，某甲不知，若是見解，如一瓶水注一瓶水，雲門云：某甲見處與從上諸聖不移易一絲毫許。

仰山問瀉山曰：百千萬境，一時來時如何？瀉山云：青不是黃，長不是短，諸法各住自位，非干汝事，仰山則作禮。

中邑洪恩禪師，每見僧來，拍手作和聲，仰山謝戒，邑見來於禪牀上拍口曰：和和，仰山即從西過東，邑又拍口作和聲，仰山又從東過西，邑拍口作和聲，仰山又於中心立，然後謝戒了，卻退後立，邑云：什麼處得此三昧來？仰山云：於曹溪印子上脫將來，邑云：汝道曹溪用此三昧，接什麼人？仰云：接一宿覺，仰又復問中邑云：和尚什麼處得此三昧來？邑云：我於馬祖處得此三昧來。

此中邑之一則，可爲瀉仰宗之所據歟。

舉王太傅入招慶煎茶，時朗上座與明招把鉢，朗翻卻茶鉢，太傅見問上座：茶爐下是什麼？朗云：捧爐神，太傅云：既是捧爐神，爲什麼翻卻茶鉢？朗云：仕官平日失在一朝，太傅拂袖便去，明招云：朗上座喫卻招慶飯了，卻去江外打野煙，朗云：和尚作麼生？招云：非人得其便，雪竇云：當時但踏倒茶爐。

碧巖集第四十八則，明茶道亦有向上出身作用，茶道有本末中之三節，本者成人也，人各皆散亂蠢動器耳，故以恒事自然教定，誠我爲戒，不亂爲定，徹物爲慧，是以約點茶論親疎焉耳，主有五事：一掃室，二居物，三改具，四點茶，五接客，作客有五：一進室，二著座，三改衣，四

喫茶，五接客，作客有五：一進室，二著座，三改衣，四喫茶，五徹物，夫人精鍊平生作用自清，是曰成，本參詳宗旨，至瀉仰理，是曰成，末通達事理，物物無惑，是曰得，中道之理，凡得三義，通十道，則可謂究盡茶道之要，如此問答，三義眼睛，堪可笑爾，雪竇拈語，蘇活茶道，請高著眼。

五家參詳要路門第五

第五 法眼宗先利濟論親疎爲旨

師諱文益，餘杭魯氏子，祝髮詣開元寺覺律師，受具戒，及覺盛化，四明師往習毘尼，工文章，覺奇之，目爲吾門之游夏也。師以玄機一發，雜務俱捐，振錫南邁，抵福州，初見長慶，無所契悟，與進修輩擬之湖外，既發，值雨，少憩城西地藏，入堂見藏坐地爐，問師此行何之，曰：行腳去，曰：行腳事作麼生，曰：不知，曰：不知最親，三人附火，因舉肇論，至天地與我同根之處，藏又曰：山河大地與自己是同是別，修曰：同，藏豎兩指熟視之，兩箇便起去，雨霽辭行，藏送之，問曰：上座尋常說三界唯心，乃指庭下石，曰：且道此石在心內，在外，師曰：在心內，曰：行腳人著甚來由，安塊石在心頭耶，師窘無以對，遂放包俱求決擇，近月餘，呈見解，說道理，藏曰：佛法不是恁麼，曰：某甲到此辭窮理絕也，藏曰：若論佛法，一切見成，師大悟，出世臨川崇壽。

僧問師：慧超咨和尚，如何是佛，師云：汝是慧超，如則監院，在師會中，也不會參請入室，一日師問云：則監院何不來入室，則云：和尚豈不知某甲於青林處有箇入頭，師云：汝試爲我舉看，則云：某甲問，如何是佛，林云：丙丁童子來求火，師云：好語，恐爾錯會，可更說看，則云：丙丁屬火，以火求火，如某甲是佛，更去覓佛，師云：監院果然錯會了也，則不憤便起單，渡江去，師云：此人若回可救，若不回救不得也，則到中路自忖云：他是五百人善知識，豈可賺我耶，遂回再參，師云：

爾但問我，我爲爾答，則便問，如何是佛，師云：丙丁童子來求火，則於言下大悟，如今有者，只管瞪眼作解會，所謂彼既無瘡，勿傷之也，這般公案，久參者一舉便知落處，法眼下謂之箭鋒相拄，更不用五位君臣四料簡，直論箭鋒相拄，是他家風如此，一句下便見，當陽便透，若向句下尋思，卒摸索不着，師出世有五百衆，是時佛法大興，時詔國師久依疎山，自謂得旨，乃集疎山平生文字頂相，領衆行腳，至師會下，他亦不去入室，只令參徒隨衆入室，一日師陞座，有僧問：如何是曹源一滴水，師云：是曹源一滴水，其僧惘然而退，詔在衆聞之，忽然大悟，後出世承嗣師，有頌呈云：通玄峯頂，不是人間，心外無法，滿目青山，師印云：只這一頌，可繼吾宗，子後有王侯敬重，吾不如汝，師圓成實性頌云：理窮忘情謂，如何有喻齊，到頭霜夜月，任運落前溪，菓熟兼猿重，山長似路迷，舉頭殘照在，元是住居西。

舉陸亘大夫與南泉語話次，陸云：肇法師道：天地與我同根，萬物與我一體也，甚奇怪，南泉指庭前花，召大夫曰：時人見此一枝花，如夢相似。

石頭因閱肇論，至會此萬物爲自己處，豁然大悟，後作一本參同契，亦不出此意，看他恁麼問，且道：同什麼根，同那箇體，到這裏，也不妨奇特，豈同他常人不知天之高地之厚，豈有恁麼事，陸亘大夫恁麼問，奇則甚奇，只是不出教意，若道教意是極則，世尊何故更拈花，祖師更西來作麼，南泉答處，用拈僧鼻孔，與他拈出痛處，破他窠窟，遂指庭前花，召大夫云：時人見此一枝花，如夢相似，如引人向萬丈懸崖上，打一推，令他命根斷，巖頭道：此是向上人活計，只露目前些子，如同電拂，南泉大意如是，有擒虎咒，定龍蛇，底手腳，到這裏，也須是自會。

始得，不見道，向上一路，千聖不傳，學者勞形如猿捉影，看他雪竇頌出，曰：聞見覺知非一一，山河不在鏡中觀，霜天月落夜將半，誰共澄潭照影寒。

南泉一株花話，是宗門之骨髓，如先師與雲山老宿商量，夫雲門法眼二宗，大概如詩之通韻，叶韻本出自巖頭雪峯下，巖頭出瑞巖主人公，遊化三昧，受用確乎，故出馮仰作用高貴，尊勝之風，雪峰即出玄沙雲門，玄沙一轉得地藏，又一轉得法眼宗，故雲門法眼二宗，言句易迷。

五祖弘忍大師，深乘願輪，再來為法演，弄得雲門臨濟受用，如車兩輪，是道東山下暗號密令，圓覺佛光國師在大宋，往虛堂室中，參詳許多次，卒得言句三昧，雲門大師心不賺然，再作大燈國師，扶起我宗，別示有生涯，又關山一休等，專教喻五家有來由，祖師加助兒孫，如是親切也。

真淨文禪師有頌，曰：雲門臨濟百花春，一一靈機總有神，總有神，祖庭不復春耶。

五家參詳要路門附錄 二門

臘八示衆第一

朔日夜示衆曰：夫修禪定者，先須厚敷蒲團，結跏趺坐，寬繫衣帶，豎起脊梁，骨令身體齊整，而始為數息觀，無量三昧中，以數息為最上，令氣滿丹田，而後拈一則公案，直須要斷命根，若如是積歲月不怠，縱打大地，有失見性，決定不錯，豈不努力乎？豈不努力乎？

第二夜示衆曰：楞嚴經曰：一人成道歸真，十方虛空悉消殞，凡修道處，必有護法神，有魔障神，譬如城市人多聚，則賊盜亦隨聚，心願強，則護法神得力，心魔動，則障神得力，是故學道者，先須要發大誓願，專辭讓謙遜，置心於一切衆生下，咸皆度脫，佛祖大道，無有無願力而能徹底者，譬如學射者，一箭一箭，欲中鵠，始雖不中，久而不已，必得其妙，參學亦復然，一念一念，起大憤志，抖擻精神，須要做大道淵源，如是念念不退，一切法理，無不現前，無上菩提，猶如俯拾地芥焉也。

第三夜示衆曰：如來正法眼藏，的的相承，是謂傳燈菩薩，如來正法眼藏，能護持，是謂護法菩薩，傳燈護法，猶如師家與檀越，師檀不合，大法獨不行，而護法為最上，昔弘法大師嘗祈請大日如來，曰：誰是護法最上耶？如來告曰：無如辯才天，是雖傳燈為第一，若無護法之力，則所以佛法只獨不行也，是故護法為最上也，又坐禪通一切諸道，若以神道言之，則身即天地小者

也。天地卽身大者也。天神七代。地神五代。並八百萬神。悉皆身中鎮坐矣。如此欲祭祀鎮坐諸神者。神史所謂非靈宗神祭。則不能祭之。靈宗神祭者。非禪定。則不能祭之也。豎起脊梁骨。充氣丹田。正身端坐。眼見耳聞。不雜一點妄想。獲六根清淨。則是祭天神地祇也。雖一炷坐。其功德不爲鮮矣。是故道元禪師曰。可勤之一日。可貴之一日也。不動之百年。可恨之百年也。嗚呼。可恐可慎。

第四夜示衆曰。數息觀有六妙門。所謂數隨止觀。還淨也。數息入三昧。是謂數。數息漸熟。唯任出入息入三昧。是謂隨。十六特勝等。以要言之。歸數隨二字。故初祖大師曰。外息諸緣。內心無喘。心如牆壁。可以入道。內心無喘者。不依根本也。心如牆壁者。直向進前也。此偈甚深。汝等請試取本參話頭。如牆壁直進去。使令以土擊大地。有失見性決定無不徹。努力乎。努力乎。

第五夜示衆曰。所謂接心。長期百二十日。中期九十日。下期八十日也。尅期決定。欲明大事。故一衆不出戶外。況雜談乎。參禪只但勇猛一機而已。汝等不聞乎。近頃庵原有平四郎者。彫刻不動尊石像。以安置吉原山中瀑布處。忽覽瀑水漲落。水泡跳珠。前泡後泡。或流一尺。消去。或二尺三尺。消去。乃至二間三間。消盡。宿緣所感。竟覺知世間無常。都如水泡。殆逼一身。不堪安處。偶聽人讀澤水法語。曰。爲勇猛衆生。成佛在一念。爲懈怠衆生。亘涅槃三祇。因忽發大憤志。獨入浴室。堅鎖戶牖。豎起脊梁骨。握兩拳。瞪雙眼。純一坐禪。妄想魔境。蜂午紛起。法戰一場。終得斷命根。深入無相定。及天明。聞鳥雀繞舍啼。自求全身。終不可得。唯看兩眼。脫出在地上。須臾忽覺爪際痛。而兩眼歸位。四支獲起。如是三夜。坐起一如前。及第三日朝。洗面而視庭樹。大

異於平日所見。甚爲奇異。仍問隣僧。總不辨。因欲見鶴林。昇轎踰薩埵嶺。眺望子浦風景。始知先所得草木國土。悉皆成佛底端的。徑見鶴林。屢入爐轡。透過數段因緣。彼是一個凡夫。未曾知參學事。然纔兩三夜。而證如是事。唯勇猛一機。與妄想相戰得勝者也。汝等何不發起勇猛憤志乎。

第六夜示衆曰。于時侍者行茶。建仁開山千光祖師。入宋時。偶中暑患瘴。有一老翁。爲飲茶。瘴速治。因齋茶實來。貢禁廷。種之於宇治縣。又贈明惠上人。上人亦種之於梅尾。故以千光明惠爲茶之祖矣。夫茶之爲能。以苦爲體。故能養心。心誠治則四臟自平也。明惠上人曰。茶能除睡眠。修道人可喫者也。又外論之。則養心。苦修爲第一。專著精彩。苦修徹骨。則神氣朗然。故慈明曰。古人刻苦。光明必盛大也。禪關策進曰。役心不已。得果證。果證決定義也。是故汝等宜貴苦修也。近頃與州有文溟和尚者。欲見予。百計六年。遂來求掛搭。予曰。縱賜紫大和尚。法眼未明。於予爲小僧。呵罵猶未足。若身存世儀。意抱尊大。見予何益之有哉。曰。某誠爲大法。乍入叢林。一沙彌也。請和尚不惜慈悲。接得焉。喝雷棒。雨豈敢惜命哉。因許入室。一夏九旬之間。刻苦精鍊。喫予手中棒。舉不可計。果契證我宗。向上大事。隨行長約。取弟子禮。然則勇猛一機。竟至法成就。可不慎哉。

第七夜示衆曰。一子出家。九族生天。夫出家。須要真出家。所謂真出家者。憤起大誓願。勇猛精進。直斷命根。豁然法性現前。是謂真出家。九族生天。亦真實不虛矣。昔播州有一女人。當懷胎之夜。自發願曰。此兒若男子。必當令出家。其夜夢有一老人。來告曰。吾此家九代已前祖也。死

而墮冥府受無量苦而今依恃汝勝願力永得脫地獄苦矣又甲州有良山和尚者匡徒領衆臘八依例與衆禪坐一夜其亡母携刀來直刺腋下大叫一聲吐血悶絕矣山良久蘇次日俄與衆別行脚一鉢三衣風喰露宿尋師訪道經年禪定頗熟欲入三昧時亡母復來現纒舉眼卽隱去他日深入三昧恰如海湛然亡母來復告曰吾始入冥府鬼卒皆敬曰是出家母也都無苦惱豈思及公壯獄卒皆曰將謂是出家母也卻是俗漢母也鐵棒鐵枷呵責不可言也其恨徹骨是故先夜來刺汝然而汝悔出寺行脚中來見公生滅念猶未盡故隱去今定慧殆明吾苦患亦盡矣特得生天上故來告謝而已以茲觀之汝等咸皆有父母有兄弟有眷屬以生數之則豈惟千萬人哉悉皆輪廻六道受無量苦待汝等成道者猶如大旱望雲霓者也如何悠悠坐見之而不發大願乎光陰可惜時不待人勉旃勉旃

師一日示侍者曰予使侍者數十年而熟見之則有三等侍者曰孝曰正曰平也所謂孝唯事以純素而能常安師意者也所謂正一諾而能須命常不怠者也所謂平無孝正而事以庸常半須半違者也其餘不足言耳焉在昔阿難侍佛三十年頗合聖意佛稱總持第一香林侍雲門十八年紙衣錄語句繼得鑿啖宗天源柏庵事大應生前自彫肖像受師之點眼滅後常奉此像不異在世入宋時但裏畫容不暫離身吾先師白隱老漢侍祖翁透鱗于松蔭寒夜入被衾裏抱住老軀以溫之古人侍其師槩而如此今人何不懷之哉

又示衆曰夫大法關繫至重矣命如懸絲若不打出一箇半箇真正種草傳這的的相承向上大事我亦佛法中罪人而已風穴已有此嘆況其他乎我熟願舊參諸子半箇亦無堪忍縱令

有少分得力者不過兩三世泯然而已豈不痛乎我此正宗支竺扶桑掃地盡矣北鬱東弗亦可知耳我自證之我此正宗正如一日在天汝等何不憤起大勇猛心而欲明之乎汝等若果無此志則俱是佛法中罪人也此日既沒四天下咸暗黑護法星辰亦依誰出於世耶乞各各急須起志言訖淚屢下

看經榜第二

真言門有三密相應之法所謂印相明正是爲身密神咒清明是爲口密觀本尊與自身不二、是爲意密禪門諷誦亦有三密正身端坐根無空缺是身密二者朗聲徹耳能所不二、是口密三者眼耳相交念念正真是意密而已若能通達得大自在動與不動當體寂滅語與不語真箇圓融念與無念究竟平等是爲禪僧門下真正看經諷咒之法也學者宜委悉

夫如法看經者於自上各具四德初自四德者一助三昧音聲入神得耳根圓通故二滅障礙善神來護惡鬼怖潛故三除病患音徹四大氣血流溢故四滿心願運命日改隨順天真故次他四德者一歡諸天增長威神升進階位故二救幽魂消除業報發菩提心故三益見聞遠離惡念成就信種故四利畜類音聲所及普結勝緣故

論曰見性修定者禪門之正行看經禮佛者禪門之助道分而已少林九坐曾無看經之名曹溪一世何有禮佛之勞雖然至爲消業養道之方便者又非先德必有破敗之是故藥山看經黃檗禮佛薦福弘辨答宣宗問永明智覺兼法華業汾陽一榻坐三閱藏明教三昧稱萬祈懺趙州三五夜而變兩蛇爭口之相古鼎二十年而改四賤羣軀之業舜老夫日有定課垂老益

堅，卽有一日不作，一日不食之語，呆佛照深夜修敬，未嘗少懈，遂感雪頂丰姿，二人入堂顯異，阿難盡形壽，事佛未得究竟，滅後逢迦葉惡手段，哭泣懺謝，漸得入室，俱抵三十年，持咒雖無入證，後見天龍，一指頭透脫圓融，始及發驗，爰有二義，如彼傳道，關山三年密祈，兩宮，南山每日恭營一塔之類，卽悟後所傳法度生之壽，又至大瘤多歲，禮馬祖塔，乾峰七日祈文殊智者，未悟已前，哀求懇禱，得道之大願也，由茲見之，看經禮佛，亦有不可捨底理，歟，間有宗匠，斥之呵之者，初心求他佛，不求自佛，或求福壽，或祈利養，不以佛祖不傳妙道，而掛在智問，則皆是墮邪魔種族，最堪哉，害祖師真風，故也，若亦一等以敗之爲是，內外障難，窺隙日加焉，我恐佛法夫不久歟，故無因和尙曰：我門禮樂者，佛法久住之相而已，學者宜詳之。

五家參詳要路門 終

跋五家參詳要路門

三光老師之著述五家要路也，諒其有故哉，今時有以知見解會而爲正悟者，有坐在無事甲裏而爲正修者，有不知不會是爲向上禪者，有認昭昭靈靈而爲自己者，有著湛湛寂寂而稱禪定者，有向言句上而作死模樣者，有管古人糟粕而爲奇特玄妙者，有綴一聯偈頌而論死活者，以胡喝亂棒而爲大機大用者，就中生下劣以念佛爲公案，以誦呪爲定課，看經禮拜願淨土樂天堂，匆匆忙忙終日勞役心身，皆是禪病而非真正見解，豈謂是五家之宗要邪，是故三光老師慈悲爲救箇痼疾，且撮出各家一二語訛之因緣，而以爲拔釘抽楔底之一方便而已，若或謂晦岩有眼目希叟有讚辭，何用者，般杜撰邪，阿呵呵，勸君盡此一盃酒，西出陽關無故人，咄，今也松雲主人，徹見五家要路者，實爲今時之指南車，乃喜捨衣資，以上梓共之於世矣，庶幾欲扶起鶴林門風者歟，其志可嘉尙焉，且附錄二門者，供初心禪者之座右，而以警睡魔者也，因綴數語以贊之，卷尾云。

于時文政丁亥之秋九月

阿鼻窟老禿大觀叟

黄檗はもと山名にして、支那福建福州福清縣の黄檗を指す。日本黄檗宗開祖隱元大師、諱は隆琦、支那福建福州府福清縣東林の人なり。臨濟正宗第三十一世費隱通容和尚に嗣法す。福州黄檗山萬福寺に再住し、承應三年日本に渡來し、寛文元年山城宇治に一寺を開創し、舊名を採りて、之を黄檗山萬福寺と號し、臨濟宗と別立して、黄檗宗を開立す。黄檗和尚は、即ちその開祖隱元大師をいふなり。太和は黄檗山所在の地名にして、京都府宇治郡宇治村大字五箇庄の字太和田をいふなり。編者は南源性派、高泉性激の二人にして、その合同の編纂に係れり。南源は支那福建福州府福清縣井得里の人、隱元の門人にして、隱元に從ひて渡來し、大阪の國分寺を開き、その寺に寂す。高泉は同縣東閣の人にして、隱元の法嗣慧門如沛の門人なり。寛文元年隱元に招かれて渡來し、直に黄檗に到りて隱元に侍す、黄檗第五代の席を董し、本山に寂す。隱元大師の撰述は、明の崇禎十五年(日本寛永十九年)に黄檗語録二冊を刻したるを始とし、承應四年孟春隱元禪師語録十六卷を重刊せり。蓋し是より先、黄檗語録に次いで、刊行せられたるものなら

國譯黄檗和尚太和集

解題

黄檗はもと山名にして、支那福建福州福清縣の黄檗を指す。日本黄檗宗開祖隱元大師、諱は隆琦、支那福建福州府福清縣東林の人なり。臨濟正宗第三十一世費隱通容和尚に嗣法す。福州黄檗山萬福寺に再住し、承應三年日本に渡來し、寛文元年山城宇治に一寺を開創し、舊名を採りて、之を黄檗山萬福寺と號し、臨濟宗と別立して、黄檗宗を開立す。黄檗和尚は、即ちその開祖隱元大師をいふなり。太和は黄檗山所在の地名にして、京都府宇治郡宇治村大字五箇庄の字太和田をいふなり。編者は南源性派、高泉性激の二人にして、その合同の編纂に係れり。南源は支那福建福州府福清縣井得里の人、隱元の門人にして、隱元に從ひて渡來し、大阪の國分寺を開き、その寺に寂す。高泉は同縣東閣の人にして、隱元の法嗣慧門如沛の門人なり。寛文元年隱元に招かれて渡來し、直に黄檗に到りて隱元に侍す、黄檗第五代の席を董し、本山に寂す。隱元大師の撰述は、明の崇禎十五年(日本寛永十九年)に黄檗語録二冊を刻したるを始とし、承應四年孟春隱元禪師語録十六卷を重刊せり。蓋し是より先、黄檗語録に次いで、刊行せられたるものなら

ん。次いで明暦元年孟冬、同續録二卷を重刊し、崇禎十五年以後東渡の年に至るまでの、在支中の語を編録せり。以上は、支那に於ける述作の語録なるが、萬治三年十月扶桑三會録を刊せらる。三會は長崎の興福、崇福、攝津の普門の三會を指すなり。是は東渡以後黃檗晉山の年に至るまでの語録なり。今此の太和集は、寛文二年鐵眼道光の刻する所にして、正しく寛文元年八月黃檗晉山より同二年に至る語録なり。初め晉山の法語より詩偈、書問、題讚、法語、序文、祭文、銘等を襍然纂蒐し、終りに歌を編次す、一卷一冊にして合計五十四紙あり。其の奥書に、左の如く見えたり。

弟子道光捐資敬刻

黃檗和尚太和集壹冊流行伏願般若智

人ノ現前金剛眼個個開證者

壬寅年歲月初四日識

隱元大師東渡以來、他宗の誹謗、幕府監視の中にあり、寧ろ逆境に處したるもの七年、寛文元年は、黃檗山開創の許可を得て、晉山せられし年なれば、一宗開山の盛譽を擔ひたる一代の中、得意の時と謂はざるべからず。本集はその時期に於ける著作を編輯せるものなれば、その中にも亦者般の消息の流露せられたるものなしといふべからず。今その胸襟を窺ふに足るもの二首を抄出せんか、當に左の如くなるべし。

偶成

自愧無能老倒翁。 飄飄一葦任西東。 杖頭撥出秋波眼。 不覺毫端雜祖風。

睡起戲筆

老來聊展小神通。 夜返三家山盡在東。 夢筆花開新燦爛。 一圓桃李舊春風。

本集と同名にして、木菴性瑠の編次に係るものあり、寛文四年正月の刊行にして、四卷一冊七十紙あり、猶ほ同續集ありといへど、本書を譯するに當り、是等と比較して、その關係を明かにするを得ざりしを遺憾とす。されど本文中に明かなるが如く、廣録とは一々之を對照し、廣録に收められたるは、その卷數を示したれば、詳しくその異同を知らんとするの諸君は、その卷について、親しく之を點檢せらるべし、亦興味深からん。師は明の萬曆二十年十一月四日を以て生れ、延寶元年四月三日宇治の黃檗山に寂す、壽八十二、法臘五十四、著述若干卷、今猶ほ世に傳ふ。

國譯黃檗和尚太集

侍者 性性 激派 全編

萬治三年庚子十二月十八日、

上の令旨を承けて、賜ふ所の太和田を黄檗山萬福禪寺と爲し、

寛文元年八月二十九日に於て、山門に進んで云く、「一錫筵に臨んで、千山稽首し、法法誠を獻じ

て、拈じ來つて手に信す。黄檗名を安じて、本有を忘れず、聊か一念無縁

の慈を興して、永く千秋不請の友と爲る。老僧這裡に到つて、法幢を

建立することは且く止む、只だ進門の一句の如きんば、作廢生か道はん。

萬福門開いて日日新に、時豊かに道泰うして長く悠久。便ち進んで、

佛殿の基に至つて云く、「乾坤蓋載、萬古在ますが如し。日月昭臨、光明

廣大、一片坦平、縦横無礙、個の中に卓立して、山靈待つこと有り、諸人

還つて見る麼。一莖草上に瓊樓を現じて、三世の如來俱に頂戴す。」

方丈に至つて云く、「六塵明淨、一室虛玄、個の中に撈入して、一會儼

①不請の友とは衆人の招請を受
けざれども、その友となつて
能く之を利濟するをいふ。易
に「速(まじ)かざるの客三人
あつて來る、之を敬する終に
吉」と見え、又請はずして自
ら來る、之を速かざるの客と
謂ふと見えたり。維摩經佛國
品第一に「衆人請せざれども、
友として之を安んず」とあり。
②法幢を建立すとは、大法を舉
揚するに譬ふ。碧巖第二十一

然たり。轟轟烈烈、白日青天、凡を轉じて聖と成し、愚を轉じて賢と作し、
① 隻眼を迸開して、後を耀かし、前を光す。犄鼻盧都不二を談じ、流轉燥
辣風顛を起す。風顛を起すことは且く止む、今日新開又作麼生か道はん。
一棒荒を破つて千古に振ひ、磔山瑞を現す。萬斯年。」

初めて磔山に到る 偶成

新に黄藥を開いて禪基を壯んにす、正脈流傳海外奇なり。有志の英靈須
らく眼を著くべし、苦心の道義共に撐持す。法身礙へず莊嚴の相、勝跡何
ぞ妨げん出現の時。① 勇剛たる峰頭慧日を觀、一莖草上須彌を柱ふ。岐路
險崖の句を掀翻し、② 希常過量の機を縱奪す。大道坦然として正果を成す、
孤かす塵世の好男兒。

又

聊か 隻手を伸べて天荒を破る、莖草拈じ來つて法幢に當つ。一片の
太和 道義を温め、千秋の黄藥宗綱を振ふ。掀翻すれば陸地に波濤湧き、
收放すれば紅爐饌上の霜。盡く謂ふ通身影像無しと、誰か知らん徧界曾て
藏さざることを。偶々來つて卓立す高峯の頂、笑つて看る大千の空しく自

則の垂示に「法幢を處て宗旨を立す」と。

① 一莖草上に須彌を現すとば、法王の自在を明すなり。犄鼻第四則の評に、「一莖草を將つて丈六の全身となして用ふ」と見え、華嚴經第十七、初發心功德品第十七に、「一毛端に於て衆刹を現す」とあり、首楞嚴經第四にも、「一毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉す」と見えたり。

② 六聽は六根即ち眼、耳、鼻、舌、身、意に譬ふ。一室とは一心の體性をいふ、皆譬喩の詞なり。

③ 隻眼とは片目のことにして、第一義諦即ち眞諦を明めたる眼目をいふ。

④ 萬斯年は萬年に同じ、斯は句調を助くるに用ふる字なり。⑤ 勇剛とは、山の高く速る貌。

ら忙はしきことを。

雙鶴亭に題す 引有り

歲 庚子の仲冬、上の令を承けて太和田を受け、黄藥萬福禪寺の基
と爲す。越えて明年の春、再び遊んで取向し、仰いで松際を望めば、
雙白鶴の焉に翹つ有り。更に上ること二十餘武、其の鶴、次嶺の松頂
に翔り鳴いて立つ。仍つて高峯の絶頂に陟つて、勝槩を大觀し、時を
逾えて下るに、鶴猶ほ松に在り。嘆じて曰く、「奇なる哉奇なる哉、此
の日我が前導を爲し、其の勝跡を點す。倘し刹を建つる時は、當に此
を以て驗と爲すべし」と。即ち遊を紀して近衛大納言公に贈る。「鶴、
松頂に鳴いて賢侶を招く」といふの句有り、嗣後龍溪回り、僧をし
て仲秋念日に起工し、閏八月二十九日に於て進山せしむ。次の早、
亭に登つて遠眺すれば、大いに胸襟を暢ぶ、江山萬頃、翠靄千祥、盡く
當人の一瞬に在り。謂つ可し千古の風光殊勝の事、一天の靈彩印文の中と。侍僧謂く、「前に白鶴
の瑞を現するは即ち此の處、當に之を雙鶴亭と顔して可なり」と。余唯唯として善しと稱す、仍
つて 偈を説いて以て識す。

⑥ 希常は異常、又は非常の意、稀なること。

⑦ 隻手とは片手なり、力を用ひ寸輕なる義。

⑧ 太和とは萬物の元氣、又は至正太中の道なをいふ。易上經乾の卦に、「各性命を正しうし、太和を保合す」と見えたり。

⑨ 道義とは道徳義利なり、鳥獸辭上傳に、「成性存存、道義の門」と。

⑩ 雙鶴亭は黄藥山西方丈の右にあり、後華藏院となりしが、今はその舊趾を存するのみなり。

⑪ 庚子は萬治三年なり。

⑫ 嶺は山なり。

⑬ 偈は梵語伽陀の略なり。

空亭未だ現せず復た何をか知らん、白鶴松に翹つて悟期を示す。老眼豁開す雙翠壁、孤筇卓立す片
靈芝。天然の雅趣風光別なり、曠世の達觀格外奇なり。此の日功成つて聊
か錫を憩ふ、曾に秀氣を羅む正當の時。

又

亭開けて微見す。歳寒の心、霜雪滿頭亦吟を喜ぶ。老い得て古梅共に友
とするに堪へたり、静に思ふ白鶴也。知音。峰高うして忽ち吐く。寥天
の月、葉落ちて平鋪す徧地の金。閒に藤條を把つて聊か卓朔すれば、萬縁
放下して追尋を絶す。

瑞光院に示す

勞生幻世轉た飄蓬す、百歳渾べて一夢の中と成る。金玉。到頭將ち去
らす、兒孫滿眼孰れか終を同じうす。情關打破して異常樂しく、慧性圓明
にして業頓に空す。倏忽として心花開けて爛熳、何ぞ愁へん結果功を全う
せざることを。

出山の釋迦の讚

頭を雪嶺に埋む豈に尋常ならんや、道の爲に軀を忘る世量ること莫し。

是れ一番徹骨の後にあらずんば、如何ぞ法中の王と做り得ん。

松浦肥前守に與ふる書

夫れ半偈法界を撐持して、永劫にも窮り無し。成住壞空、安んぞ比
す可き耳。一心宗門を護惜して、千生にも味さず、幻花露影、豈に能く惑
はさん哉。是を以て金剛の種子、百煉すれば愈々光輝、藥汞銀の禪、一
煖に便ち返漏す。驗當人に在つて至鑑を逃れ難し。老僧憶ふに二十年前、
唐に在つて黃檗を重興する。昔、首疏に云く、「海に跨るは常木に非ず、天
を撐ふ必ず大材。東君如し意有らば、我が門に吹き入り來れ」と。嗣後工
竣り、扶桑の請に應じ、今に迄んで又八春秋を閱せり矣。茲に上令を蒙
つて開山し、この地に草創す、仍つて黃檗と名く。始めて覺ゆ前偈、此の
日に應驗することを。倘し數萬里の木を來して、梁と爲し棟と爲すといは
ば、豈に思議す可けん耶。又居士の護送して此に到ることを得たり、謂つ可
し、天工人力、兩ながら其の美を全うすと。今古罕に聞き、舉世希に有り、
誠に不可思議の境、凡小庸庸の知る所に非ざるなり。然らば則ち不思議の
大材は、必ず不思議の大用有り、以て不思議の大功を顯はし、不思議の大

① 歳寒の心とは、論語に「子曰く、歳寒うして然る後に松柏の影むに後るゝとを知る」と見えたり。利害に臨み事變に遇うて君子の守る所の變ぜざるに譬ふるなり。

② 知音とは親友の義、周の伯牙、琴を鼓す、鍾子期善く聽く、伯牙、志、高山に在れば、子期曰く、巍々乎たる高山の若し、志、流水に在れば、子期曰く、泮々乎たる流水の若しと、子期死す、伯牙以て世に知音無しと爲して遂に絃を絶つて復た琴を鼓せざりきと。

③ 寥天とはしづかなる所ら。④ 勞生とは塵勞の衆生の義なり。⑤ 到頭とは畢竟の義なり。⑥ 讚は人の美を稱するなり」と既文に見ゆ。

⑦ 法中の王とは釋迦牟尼佛を指すなり。法華經譬喻品第三に「我れは法王爲り、法に於て自在」と見ゆ。

⑧ 半偈とは華嚴經第十九、夜摩宮中偈讚品第二十の「若し人三世一切佛を知らんと欲せば、應に法界性を觀すべし、一切惟心造」といへる破地獄の文を指すものなり。

⑨ 法界とは萬有の實體現象二界の總稱なり。劫とは梵語長時と譯す。⑩ 藥汞銀とは水銀をいふ、水銀の熱に逢へば直に溶解するが如く、虛偽の禪に譬ふ。⑪ 昔は時の古文字。⑫ 龍象とは沙門の優秀なるもの稱なり、中阿含經に見ゆ。⑬ 日域とは日本國をいふ。⑭ 拄杖の異稱。支那天台山に出づといふ、杖の材に適せる一種の

事を成す。功浪りに施さず、福歸するに地有り、他日奏成し、廣く龍象を聚め、正法流通、普く日域を利すれば、則ち護送の功得る所有り矣。老僧德妙く福微なり、但だ一偈を説いて兩ながら黄檗を全うせん。柳栗を單提して、西没東涌、思議す可き耶、思議す可からざる耶。或は試みに黄檗に問ふ、黄檗亦自ら知らず。適々管城子傍に在り、忍俊不禁にして、聊か半偈を答へて、勝事を圓滿すと云ふ。二十年前用ふれども盡さず、海島に飄り來つて復た何をか疑はん。毫端逗漏して多子無し、突出す和山の第一枝。

性印信士 獨健、劉通事と同じく西國の大木を捨て、至る、書して示す

大材は必ず大用、美器も亦常に非ず。一たび空王殿を柱へて、功動量る可きこと莫し。因縁出現の處、木石自ら鏗鏘たり。相去ること幾萬里ぞ、何ぞ期せん此の方に到ることを。夙願力に非ずといふこと莫し、共に寶蓮坊を堅つ。有爲の福を著けず、常人只だ自ら強うす。世間盛徳の業、事事已に全く彰はる。葉軸靈彩を添ふ、千秋詎ぞ忘る可けん。

又

靈山鎮すこと無うして夢雲開く、放出して天を撐へ地を柱へ來る、一たび空門を堅て、千古振ふ、孤かす格外棟梁の才。

又

昔年筆底に夢花開き、點醒す鷲峯出格の才、此の際聊か舒ぶ 正法眼、儼然たる一會也た奇なる哉。

洛中九十翁の慶會

九十の翁翁古稀を慶す、相看る盡く是れ白頭兒、頓に壽相を忘れて増減無し、千載同風一峯に會す。

文殊普賢同 釋の讚

妙道を對談して、獅象を忘卻す。行解相應、天下の榜樣。利己利人、一合相を成す。乾坤を舒卷して二致無し、如意を單提して福量り難し。

龐居士靈照女の讚

一法空する皆萬法空す、家珍盡く急流の中に付す、靈女の生活を營むに因らすんば、龐老如何ぞ上風に立たん。

木なり。

②西没東涌とは十八神變の二にして、禪秘要法經中巻に見ゆ。
③管城子とは筆の異名、史記毛顛傳に「毛顛管城に封ぜられ、管城子と號す」とあり。
④忍俊不禁とは恰利にして、こらへの義なり。

⑤獨健、姓は陳氏、初め九官と稱し、我が國に歸化して潁川官兵衛と稱す、獨健はその號なり。遠祖は支那安徽鳳陽府潁川縣に住し、後南京に移る。寛文九年通事となり、十一年六月八日卒す、年七十六。

⑥劉通事は姓は劉氏、名は宣義、道詮と號す。國の劉魯庵の從弟なり、夙に東渡して長崎に在り、隱元大師の渡來に及びその通譯をなせり。隱元大師は常に我が拄杖子なりと呼べりといふ。
⑦空王とは釋迦牟尼佛を指す、

空王殿はその本堂なり。

⑧鏗鏘とは金石の聲に用ふる語なり。

⑨有爲とは因縁所成の義、爲は造作の義なり、無爲に對す。

⑩靈山とは靈鷲山の略稱、梵語に耆闍崛山といふ、釋迦牟尼佛の住處なり。

⑪空門とは諸法皆空と説く佛法なり、又禪宗に用ふ。

⑫正法眼とは一切諸の實相を看破する活眼なり。

⑬儼然たる一會とは靈山の一會儼然未散の義なり。

⑭釋は頓に同じ、畫繪をいふなり。

⑮一合相とは法界同一平等の體性なるをいふ、金剛經に見ゆ。但し支婁譯には一合執に作れり。六祖曰く「心に所得あらば即ち一合相にあらず、心に所得なければ即ち一合相なり」と。

觀音の讚

大悲苦を度して全身を現す、世上何人を見得して親しき、惟だ當機のみ有り高く眼を著けよ、一回瞻禮すれば一たび天真。

雙鶴亭にて松平若州守に示す

點塵飛んで到らず、雙鶴機先を占む、格外聊か眼を舒ぶれば、胸流大千に徧し。

井上信士 考心覺、妣妙春を薦せんことを求む

一言大道に合ひ、心覺して便ち超昇す。行藏聖蹟無し、何れの處か通津ならざらん。孝道天地に感じ、心花妙春を發く。清淨眼を點開し、本來人を味さず。直指 回互無く、悄然此の辰よりす。覺靈厥の旨を悟らば、妙天真に徹證せん。

觀音の讚

垂楊の下に獨坐して、自觀 觀世音。慈心能く樂を與へ、悲願迷津を渡す。一瞻一禮一回顧、徹見す本來無二の人。

達磨の讚

不識梁王に對し、凄凄として暗に江を渡る。去來聖塚無く、面壁亦何ぞ妨げん。直に神光斷臂の後に至つて、浪りに 五葉を傳へて諸方に徧し。

又

嘴臉を突出し、半身を流露す。端無く西沒東湧、知んぬ他は是れ假是れ真なることを。眼を 眨得し來る千萬里、 回光返照獨り神を全うす。

洛中の信士、古梅樹を送り至る

稍老いて巖隈に倚り、骨瘦せて寒梅の若し。纖塵渾べて染ます、曾て占む百花の魁。微笑殘雪に驚き、吟風獨り 腮を露す。清幽法界に徧し、脱俗也た奇なる哉。

申景禪人、 菩提樹を送り至る

菩提既に樹有り、的的西より來る。五葉中土に蔓り、歸根共に一枚。苟も原不二なることを知らば、詎ぞ栽培せざる可けんや。花發いて 三春麗かに、香は飄る 九品臺。丈夫須らく猛省すべし、那ぞ更に又疑猜せんや。苦口唯だ黃檗、端無く吼ゆること雷に似たり。知音如し 錯過せば、我れをして時なる哉を嘆せしむ。

① 廬居士とは姓は廬、名は蘊、字は道玄、襄州居士と號す。支那蘄州蘄陽縣の人なり。馬祖道一禪師の法を嗣ぐ、靈照女は蘊の一女にして亦禪門の達者なり、父に隨つて竹瀝庵を製し、之を驚いで生活せりといふ。

② 考は先父、妣は先母の稱なり、古事理林第三に「父死す何ぞ考と謂ふ、考は成すなり、已に事業を成すなり、母死す、何ぞと妣と謂ふ、妣は懐くるなり、克く父の美を懐くるなり」と見えたり。

③ 清淨眼とは正法眼に同じ。
④ 回互とは彼此交互に涉入する義なり、洞山の夢同契に見ゆ。
⑤ 悄然とは惘は憂なり、念なり、景德傳燈錄第十一香嚴智閑の傳に、擊竹投機の偈を掲げて云く、「一擊所知を忘る、更に修治を假らず、動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せず」と。蓋し今は大悟の意に用ひたるが。

⑥ 觀世音とは世の音聲を觀じて解脱せしむる義なり、新譯には觀自在といふ、觀は觀照の智慧、自在は解脱の境界なり。

⑦ 五葉とは臨濟、曹洞、沩仰、雲門、法眼の五宗をいふ。一華五葉を開くの譬喩より來る。
⑧ 眨は目の動くこと、まじろぐなり。

⑨ 回光返照とは自己に反省して道を修むる義なり、石頭希遷の草庵歌に、「回光返照して便ち歸り來る、靈根に廓達して向背にあらず」と。

⑩ 腮は俗の頰の字、あざとなり、菩提樹は道樹と譯す、釋迦牟尼佛此の樹下に坐して成道し給へり、今黃檗山境内にあるもの即ち此の時の樹なるべし。

雙鶴亭に登る 四首

一度亭に登れば一たび懷を解く、乾坤何の意ぞ西來を待つ、寒梅雪鶴
應眉の叟、偶爾として團圓すれば、擲すれども開かず。
一度亭に登れば一たび眉を展ぶ、江山萬頃布いて希奇なり、淡濃
情狀し難し、筆を擧して三思すれども題し易からず。

一度亭に登れば一たび破顔、陰晴顯煥剎那の間、杖頭眼豁かなり幻花
の夢、萬竅の怒號也た等間。
一度亭に登れば一度新なり、眸を凝せば何れの處か天真ならざる、山
環り水遶る村村の供、併せて太和萬劫の春と作す。

妻木彦右衛門の江戸に回るに贈別す
道義圓明にして日月よりも昭かに、世情の濃淡空華に等し。本有を
返觀すれば多子無し、生死岸頭路差はず。此の日重光萬福に臨む、聊か半
偈を吟じて杯茶に當つ。

門頭の晚眺

庭前に閒坐して晚山を見る、半ば落日を啣んで江間に映す、空しく餘す

返照の天徳を光かすことを、彩氣門に臨んで老顔を壯んにす。

惟大禪者に示す

禪者調羹に善し、頗る能く老情に愜ふ。二時候を失すること無く、一
味卻つて精盈。日用如法を事とし、心華至誠を發す。行門八萬を開き、
福足つて自ら圓明。

道榮信士に示す

乾坤幻化の夢、業海浪滔滔たり。六趣輪息むこと無く、悲しい哉若を
奈何せん。幸に西方の聖有り、一心汝が曹を念す。長年隻手を垂れ、
直に苦娑婆を接す。智者は本を三思し、翻身して愛河を出づ。狂愚は癡
莽鹵、浪を逐ひ又波に隨ふ。一たび利名の酒に酔うては、酣酣として自他
を味ます。一たび繁華の室に落ちては、我山萬丈高し。福縁日を逐うて滅
じ、業累轉た増々多し。縦ひ披山の力有るも、曷ぞ能く一毫を動さんや。
丈夫亟に猛省せよ、豈に自ら蹉跎たる可けんや。本來青白の眼、那ぞ
更に塵勞に混せんや。須らく金剛の劍を秉つて、蘊中の魔を割出すべ
し。德澤格外に馨しく、眞風太和に扇ぐ。珍重す道榮子、此の行甚麼の爲

- ① 三春とは初春、仲春、晚春をいふ。
- ② 九品臺とは上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生の九重の託生する蓮臺をいふ、觀經に見ゆ。
- ③ 錯はあやまる、錯過はあやまりすぎるなり。
- ④ 麗眉とはおほいなる眉なり。
- ⑤ 擲とは返る貌。
- ⑥ 隱約とはしかと取り定めて見えざること。
- ⑦ 疾は孔穴なり。
- ⑧ 眸はひとみなり。
- ⑨ 空華とは空中の幻華なり。
- ⑩ 本有とは本来の面目、即ち自己固有の本性をいふ。
- ⑪ 二時とは早粥と晝飯との二時なり。
- ⑫ 行門八萬とは沙門の儀式の多きをいふ、六祖曰く、夫れ沙

- 門は三千の威儀、八萬の細行を具す」と、禮記に「禮儀三千、威儀八百」とあり。
- ⑬ 六趣とは地獄、餓鬼、畜生、人間、天上、修羅をいふ、趣は所往の義、又は到るの義とす、諸の有情の往き到る處なるが故に名づく、又六道ともいふ。
- ⑭ 隻手とは力を用ひず、輕々にいふ義。
- ⑮ 娑婆は梵語、譯して忍土といふ、諸の有情能く一切の苦を忍ぶが故に名づく。
- ⑯ 我山とは我見我慢の高き山に譬へていふなり。
- ⑰ 蹉跎はつまづくこと。
- ⑱ 金剛の劍とは極めて堅利なる智慧に譬へたる語。
- ⑲ 蘊とは色受想行識の五蘊をいふ、即ち自己の身心をいふなり。
- ⑳ 頤頤とは期頤の倒文なり、百年をいふ。

ぞ。寵辱三更の夢、願期一刹那。虚名世界に漫り、若個か烟蘿を挂く。返照せよ娘生の面、老雪陀に孤かす。無孔笛を吹く可く、拍拍として應に狂歌すべし。眞個に能く是の如くならば、千秋磨す可からず。

妻木彦右衛門、考朴英居士、妣梅室妙薫。孺人を薦せんことを求む

三界一夢の宅、業識浪休むこと無し。福大なれば天府に昇り、業多ければ下流に汨む。杖頭正眼を開かば、直指蓮舟に上る。淳風萬古に亘り、朴道千秋に振ふ。梅室虚しうして白を生じ、靈然として祖猷を壯んにす。

雪を觀る

由來眼廓にして塵に沾はず、獨り占む閻浮の第一貧、閑に空亭に臥して赤洒酒たり、身を醜せば覺えず萬山の銀。

梅を栽う

老來無事天真に任す、一鑊の生涯利塵に混ず、纔に梅花を種ゑて又雪を惹く、然も骨瘦すと雖も也た精神。

林元實信士に示す

萬卷の書を搜羅することは容易に、源頭に打徹して放下することは難し。得失窮通皆造化、榮枯夢幻相干らず。風波歴盡して心平坦、歲月推移して性地安し。海外の青山山外の海、羨む君が一片の鐵心肝。

七旬の誕日の自適

白雪頭に堆うして兩鬢、絲なり、峰高うして、煦日上ること遅遅たり。渾天の理氣運つて息むこと無く、蹈海の心眞移す可からず。鐵幹霜を凌いで志節を堅うし、老松甲を帯びて威儀を長す。孤光閃爍として龍蛇動き、葉葉濤呼して此の時を慶す。

其の二

中華咸く慶す古來稀なりと、蓬島の古稀未だ奇とするに足らず。百歳にして知ること無くんば猶ほ赤子の如し、朝に聞き夕に死すとも願期に勝れり。一心淨潔にして塵刹を超え、片念圓明にして悟迷に徹す。春秋幻化の夢に涉らずんば、撞頭磕額盡く、龐眉。

其の三

未だ娘胎を出でずして全體現す、降晨獨露す半邊の腮。人天相を見て咸く

①刹那とは時の極めて短きないふ、一念の中に九十刹那ありともいひ、一彈指頃に六十刹那ありともいふ、俱舍論に依るに一晝夜の六百七十二萬分の一に當る。

②娘生の面とは少女の面目にして、本來の面目に譬ふ。

③老雪陀とは雪山の老頭陀の意にして、釋迦牟尼佛を指せるものなるべし。

④無孔笛とは本分に譬ふ。

⑤孺人とは大夫の妻の稱なり、禮記に「大夫の妻を孺人といふ」と見えたり。

⑥三界は欲界、色界、無色界ないふ、界は分段の義なり。

⑦業識とは八識を總稱す、彼の識善惡の業を造り、及びその習氣を保ち、又はその種子を含有する作因あるが故なり。

⑧天府とは天上昇をいふ。

⑨梅室白を生ずとは梅花發いて

室の明かなるをいふなり、本來の光明を生ずるに譬ふ。

⑩鐵は道なり、祖猷とは祖道といふに同じ。

⑪閻浮とは閻浮提、又は瞻部洲ともいふ、大地の總名なり、閻浮、又は瞻部は樹名にして阿耨池の南に此の樹あるに因りて名づくといふ。

⑫鑊は大なるくば、臨濟と黃檗とに鑊頭の商量あり。

⑬七旬とは七十なり。

⑭絲とは細き白ききぬいとの如しといふ意なり。

⑮煦日とは煖き日なり、日の出でて温かなるなり。

⑯中華とは支那人の自らの國を尊んで稱する名なり。

⑰蓬島は日本を指す。

⑱撞はうつなり、つくなり。磕は兩つの石の相撃つ聲にいふ字、撞頭磕額は相集まれるも

歸敬し、龍象機を知つて俱に嘆ずる哉。七旬幻化の夢を歴盡して、重ねて萬福、面門の開くことを増す、拈花の一會斯の日に逢ふ、奕葉香飄つて九垓に徧し。

其の四

天然の一會也た奇なる哉、特地に全く彰す格外の材。眼は三千の光日月を燦かし、舌は一片の猛風雷を翻す。東西坐斷して回互無し、今古頓に空じて去來を絶す。此れを以て人を祝し兼ねて自ら祝す、大家共に住す碧蓮臺。

獨健徒に復する書

老僧太和に入つてより以來、面門高峯と、其の突兀を同じうし、鼻孔愈々更に遼天、而も人情世務遺ることを待たずして忘れたり矣。忽然として峰頂に開睡し、願いで西方を望めば、又覺えず倏ち唐國故舊の思を起し、人をして之の事を聞くに忍びざらしむ。感愧懷に交はる、抑も已むこと能はざるなり。嗟嗟、此の末運に生るゝこと、宿業の成す所に非ずといふこと莫し、逆順の境縁、消して自己に歸すれば、則ち怨尤の嘆無し。公等安

① 廬眉とは大なる眉にて老年のこと。
② 面門とは單に口門を指す場合と六根門を指す場合との二義あり、是れは廣く六根門を指す。

③ 九垓とは、九は數の極、垓は界なり、故に九垓とは國界のはてをいふなり。

④ 東西坐斷とは東西に拘らず東西の表に超脱して東西に自在なるをいふ。

⑤ 大家とは人を尊敬していふ語なり。

⑥ 鼻孔遼天とは昂ぎ視るの義なり。遠は遙かなり、遠きなり。一に遠は當に據に作るべし、據は取るなりと見えたり。

⑦ 彌當とは彌は遮るなり、當は蔽するなり。

⑧ 鼻孔とは無言説の義を表する語にして、本分の大道をいふなり。

間の地に獨居す、自ら當に努力して斯道に造り證することを急務と爲すべし。餘は盡く是れ夢幻空花、何ぞ眷戀することを須ひんや。切に時光を錯過し、本來の面目を埋卻す可からず、是れ老僧の望む所なり。果して是れ丈夫の漢子ならば、直下に便ち行け、孰れか敢て 擱當せんや。他日老僧の鼻孔を摸著せば、愈々通風を見ん、其の慶快當に何如がすべきや。草草布謝不盡。

號楚何信士に復する書

蹈海の老漢、人情の濃淡、早く已に之を東流に付す。具眼の禪和、窺覷するに門無し。而も況んや塵勞の中、業識の茫茫たる、豈に能く擬議する者ならん哉。邇者妄りに一念を動し、杖を携へ太和高峯の頂に卓立す。四表具に觀て、鶴鹿瑞を獻じ、人天仰ぎ祝し、雲の如く雨の如く、風の如く雷の如く、星の如く月の如く、稻麻粟菴の如く、轟轟烈烈、山川を震動し、讚する者祝する者、笑ふ者吒る者、吟する者呵する者、聲、九重に噴しきことを惹き得たり。正眼に看來れば逗漏少からず。面門の醜を添ふるに似たり、羞を遮ふに地無し。正に躊躇の間、忽ち來翰を報ず、之を讀むに、覺えず舊時の面目を翻轉し、抑も昔日の一會儼然たること故の如くなることを見ると。其の慶快思議す可き者ならん哉、端ら此に布復す。

① 具眼とは正法眼を具する義。
② 禪和は禪僧の義なるべし、和は和合の意にして僧の譯語に當れり。碧巖第六十三則の頌に「杜禪和」の語見えたり。
③ 四表とは四外といふに同じ、四方の義なり。
④ 九重とは極めて高き天をいひ、上帝の居處を指し、轉じて天子の宮闈を稱す。

長崎の雙道婆を薦す

崎中の雙道婆、千里頭陀に謁す。淨念餘欠無く、誠心磨す可からず。別來將に七白ならんとす、道況意ふに如何。近く聞く西歸の信、人をして輓歌を動かさしむ。靈彼岸に超ゆることを知る、決して塵勞に墮せず。我れ偈を説くこと是の如し、功は成る一刹那。

馬淵性益、母妙仁を薦せんことを求む

人生幻化の夢、夢裡轉た留連す。福大にして諸有を超え、業盈ちて九淵に墮す。昇沈幾萬劫ぞ、何れの時か悄然を得ん。孝誠なれば大地を撼し、念正しければ理偏すること無し。直に入る太和の室、拜し求む萬福の前。法を乞うて慈氏を薦す、救拔急なること絃の如し。孝眞薦すること必ず克し、定めて九品の蓮に超えん。此れを以て慈德に報せば、即刻金仙に契はん。然も仁に敵無しと雖も、也た須らく腦後に鞭つべし。

尼性蓮に示す

心淨潔にして蓮の如く、性明圓にして鏡に似たり。本來の人を味さずんば、觀體凡聖を超えん。死生の關を看破せば、何ぞ曾て欠剩有らん。善

人返焔を解せば、邪を摧いて正に入る。佛祖汝を欺かず、天人咸く歸敬す。

道詮劉信士に復する書

意者に今歲初めて太和に入つて、事事未だ備はらず。則ち大いに誕なりと雖も、如何若何を必とせず。但だ境に入つては俗に隨ふ、安然を慶と爲す。忽ち聖壽、興福、福濟兼ねて信士等、人に著けて殷殷として祝を致す。舊に仍つて昔時の面門を突出す、一任す擦抹一上するに。所謂、通身影象無し、徧界曾て藏さず。花を添へ彩を獻じて不可無きなり。前者には西國の太木を舍つることを蒙り、嘆誦未だ已まず。今慶祝の誠を承く、其の功德重重易ぞ思議す可き者ならん哉。蓋し此の時此の際、頗る物に利する者有り、爲す可くんば則ち爲せ。切に勝縁を錯過し、徒に丈夫の名を稱す可からず。吾れ亦老いたり、風燭定まらず、毎に思ふ放生を急務と爲すと。慧命と生命と永壽疆り無からんことを意欲す。乃ち本懐に稱ふ、苟も能く吾が意を體し吾が事を行はゞ、生生盡きず、放放窮り無からん。則ち國を祝し民を福にし、恩に報い福を植うる、盡く斯に在り。布謝何如何如を盡さず。

性堅信士に示す

①頭陀は梵語又杜多に作る、食欲を淘汰し淨心を修治する義なり、轉じて沙門の別稱となる。

②七白とは七歳の義。

③輓歌とは死者を送る歌なり、輓は或は挽に作る、車を前より引く義なり。

④留連とは留りて歸らざることなり。

⑤諸有とは三界二十五有をいふ、又欲有、色有、無色有を三有ともいふ、有とは三界皆有漏法なるが故に名づくるなり。

⑥九淵とは極めて深きふちなり、三界九地に譬ふる。

⑦金仙とは釋迦牟尼佛を稱す。

⑧腦後に鞭つとは一應表面は道理なれども、背面に缺陷あれば、一鞭を加へて悟らしめよといふなり。

⑨觀體とは現體の意、即ち現身の義なり。

の義なり。

⑩聖壽は長崎市高野平町の聖壽山崇福寺、興福は長崎縣伊賀

林郷の東明山興福寺、福濟は長崎市岩原町の分業山福濟寺

なり、之を三福寺と合稱す。

⑪通身とはからだ中、内外に亘りて餘す所なきの義なり、碧巖第八十九則に「通身是れ手眼」と見ゆ。

⑫徧界曾て藏さずとは全體覆はるゝ意なり、碧巖第五十五則の垂示に「徧界藏さず、全體獨露す」と見えたり。

繁華世を蓋ふも摠べて空と成る、若個の丈夫か。被蒙ならざる。花落ち花開く夢眼の裏、香飄り香盡く幻光の中。一絲掛けす塵網を離れ、萬事干ること無く梵籠を出づ。聲色堆頭看得破す、是れを格外の主人翁と名く。

松平土佐守に與ふる書

草を採して利と爲るは、手眼親切なるに非ずんば能はざるなり。法門を撑持するは材用弘大なるに非ずんば支へ難し。是を以て大人は法器を成じ、大機は大用を得。今此の日に見るときは、則ち速かに成るの功期す可し。春間芽を峯頂に蓋うて、風に吟じ月に嘯いて、自ら娛んで以て輪地の徳に酬いんと意欲する而已。後諸居士の樂んで結屋の資を助くることを蒙つて、誠に敢て虚しく費さず。則ち方丈を建つるの舉有り、又功を全うすること能はざることを慮る。正に躊躇の間、忽ち華翰に接す、良材美木有つて惠まる。竊に喜ぶ、方丈の舉成る可しと、其の功德莫大、無相の福、思議す可からず。所謂謀らざれども而も自ら至り、介せざれども而も自ら親しと。天然に合ふ、豈に人情の能く議する所ならん哉。茲に使回るに因つて、勸して此に布謝す、依依を盡さず。

王振鵬が畫く所の五百尊者の觀音に朝する圖の序

- ①被蒙とは羽毛を破る義にして、禽獸の異稱なり。
- ②脚を撐して利とするとは法に於て自在なるをいふなり。
- ③手眼とは師家手段眼識なり。
- ④輪地とは黃樂山は將軍より賜はりたる土地なる故にいふなり。
- ⑤方丈は今の西方丈を指す。
- ⑥依依とは餘情の多き貌なり。
- ⑦五百尊者とは五百の阿羅漢なり。

詳にするに、夫れ梵語には阿羅漢、華には殺賊と云ふ。無明の賊を殺し盡して、以て不生不滅の果を證し、遊戲三昧、天上人間、各々神異を展べて、誠に測る可きこと莫し。亦代佛揚化の一助なり。忽ち振鵬王公に遇うて、一筆に收盡して、卷いて之を藏む。縦ひ無量の神通有りとも、易ぞ能く爲さん哉。信なる乎、振鵬の妙用、猶ほ五百尊者に勝る者多きが如し矣。是を以て仁宗皇帝孤雲の號を錫ふこと良に以有るなり。然るに天子の重んずる所は、孤雲の筆を重んずるに非ず、誠に尊者の妙道を貴ぶなり。我が明の太祖、天下を一匡するに至つて、臊々頓に除いて、胡人守を失ひ、此の卷、田舍翁の手に落つ。一日持ち出して糧に易ふ、柱史張公斗粟を以て之を得たり。嗟嗟其の時に遇はざれば賤しきこと固に是の如し。賤しき時孤雲の筆の賤しむに非ず、誠に五百尊者を帶累すること少からざるなり。後遊宦の點破するに値うて張公乃ち之を寶とす。寶とする時孤雲の名を寶とするに非ず、誠に尊者の妙道を寶とするなり。吾れ觀するに、開關より以來、佛祖聖賢、天地萬物、榮枯得失、理素よりの是の如し、豈に獨り孤雲尊者而已ならん哉。然らば則ち奇驥鹽車に困められしも、伯樂一顧して、日に千里に馳す。大道勢利に屈せらるゝも、聖王一たび遇うて天子之を師とすれども、以

- ①三昧とは詳しくは三摩地、又は三摩鉢底といふ、等持とも正定とも譯す。心の散亂消沈なく一盤に安住定立するをいふ。
- ②仁宗皇帝は宋の第四代の天子なり。
- ③柱史とは柱下史の略なるべし、柱下史は侍御史の別稱なり。
- ④斗粟とは一斗の粟。
- ⑤驥は千里の馬、即ち駿足の馬なり。
- ⑥伯樂は古の善く馬を相せしもの。

て貴しと爲す。茲に大明守を失して、胡虜縱横、此の春又亂兵の手に落つ、其の貴賤尊卑、又何如ぞや。今に迄んで三百餘載、東西の得失幾幾なるかを知らず、幸とする所の者は、水火に没せず、尊者の神通の驗有るに非ざる莫き歟。余扶桑に遊んで意はざりき之を海外に得んとは、其の神遇道合、法屬相關し、古今揆を一にする、偶然に非ざるなり。一たび卷を展ぶれば神異萬狀、以て名言し難し。始めて知る、孤雲の名虚しからずして、而も尊者の道測り匡きことを。尊者に非ずんば孤雲の大名を顯すこと莫く孤雲に非ずんば孰れか尊者の妙道を知らんや。尊者孤雲、名實並び稱ふ。其の貴賤尊卑、豈に能く擬議せん哉。眞に格外の美器、法門の大寶、觀音大士、圓通の境に入る可く、夫の 大光明藏と并に永永に傳へて、而も窮り無き者宜なり矣。

病中即心即佛の因縁を頌す

即心即佛死太急なり、非心非佛藥を下すこと遅し。大梅中毒す三十餘載、病膏肓に入つて醫す可からず。嘆するに堪へたり昔日路に迷ふ者、又個の裡に來つて唇皮を弄す、浪りに藥病を談する人無數、累殺す江西の

馬箠箕

又二偈を占す

偶々病魔に中つて素神を滅す、面門覺えず又塵に沾ふ、誠に破漏の 郎當の屋の如し、争か風光舊日の新なるを得ん。

又

病を得て始めて知る幻化の身、豁然として 觀破す 本元辰、 瞿曇會て説く病を藥と爲すと、今日翻じ來つて調更に新なり。

辛丑の十一月二十日、本師 福嚴老和尚の訃音至る。眞を掛けて云く、

「此れは便ち是れ支那國杭州府崇德縣福嚴堂上傳曹溪の正脈三十五世費和尚の全眞なり。卷起する也纖塵立せず、展開する也大地全く彰る。曾て十大寶刹に坐し、説法三十餘年、爲人一片、直心直行、紆曲を挽回すること良に多し。一條惡辣の 鉗鎚、鱗龍を收拾すること少からず。道四海に満ちて、龍の如く虎の若し、大いに江西の馬老師、天下の人を踏殺すること無數なるに似たり。餘風直に海門の東に到つて、泥牛を驚かし得て、俱に起舞盪出せしむ。金烏海門を出で、光前耀後、今古を超ゆ。茲を以て

①圓通とは感として應ぜずといふことなき、之を圓と名づけ、物として感ぜずといふことなき、之を通と名づく。

②大光明藏とは法身所依の土にして、法性土とも常寂光土とも稱するもの、特に圓覺の説處に名づくるなり。大光明とは心性本具の大智慧光明なり、百千の神通光明皆之れより起る、故に之を藏といふなり。圓覺經第一に詳かなり。

③此の頌は馬祖道一と其の法嗣の大梅法常とに關する即心即佛非心非佛の因縁を頌するものなり。初め大梅、馬祖に參じて即心即佛の語を聞き、大悟して住山せり、後一僧より馬祖近日非心非佛と説けりときいて、大梅云く、「這の老漢、人を惑亂すること未だ了日あらず、任運あれ汝は非心非佛、我は只管即心即佛」と。馬祖

之を聞いて云く、「大衆梅子熟せり」と、景德傳燈錄第七に詳なり。

④馬箠箕は馬祖を稱するなり、箠箕は米を揚げ糠を去るに用ふる具にしてみなり、馬祖の手段能く人をして轉迷開悟せしむる故に譬へたるなり。

⑤郎當とは老倒、潦倒に同じく老羸なり。

⑥觀破とはひそかに伺ひ視るなり。

⑦本元辰とは本命元辰にして、天の賦與せる人の性道なをいふ。

⑧瞿曇とは釋迦氏の本性にして、釋迦牟尼佛を指す。

⑨福嚴老和尚とは本師費隱通容和尚を指す、福嚴寺に住する故なり。

⑩十大寶刹に坐すとは、福州の黃粟山萬福禪寺、建寧の蓮峰院、温州の法通寺、嘉興の金

用つて我が師恩に報ゆるも、究竟未だ一棒の痕に答へず、虚空忽ち聽いて
涙雨の如し。白浪滔天自ら吐吞し、娘生眞の面目を打濕す。眞誠徹骨の
逆兒孫、諸人還つて見る麼。山僧是の如く擧揚す、還つて酬恩の一句に當り
得る麼。復た云く、「大道存して今師益々尊し、法輪常に轉す一乾坤、正脈
長へに流る四大海、光明 亘赫として師恩を見る。」便ち哀を擧ぐ。

首七の祭文

維れ寛文元年、歲辛丑に旅る十一月庚子二十日、不肖徒某、日本國山城
州黃檗山萬福禪寺に寓し、爲に前一日の申刻、支那國杭州府崇德縣福嚴堂
上本師費老和尚の遺囑并に末後の事定一封を郵到す。焚香跪讀して、乃ち
知る、本師是の年三月念九日未の時を以て示寂したまふことを。越えて七
日、念有五日、謹んで瓣香盃茗を以て奠を丈室に致し、昭かに告ぐるに文
を以てして曰く、「於戲、我が老和尚は、大明神宗正盛の世に生れ、玉融
何氏の巨族に係る。早歳にして本邑鎮東の三寶巖に脱白す。年十九、
便ち宗門中の事有ることを知り、遍く知識に參すること二十餘秋、宗
教の二説、該通せずといふこと莫し。末後、密師翁に謁して、惡辣の鉗

栗山廣慧禪寺、寧波の天童山
景德禪寺、松江の超果寺、杭
州の福嚴寺、同じく徑山興聖
萬壽禪寺、同維摩寺、同覺峰
院なり。最後福嚴寺に再住し
て寂を示す、清の順治十八年
三月二十九日にして、世壽六
十九なり。

⑤ 鉗とは鉗ははさみ、鏈はつ
ち、鍛冶の道具なり、師家の
手段、學者を美器にするに喩
へたり。

⑥ 巨勝は盛んなる貌、亘は恒に
同じ、いさましと訓す。

⑦ 明の神宗萬曆二十一年五月二
十四日、福州福清縣江陰里に
生る。

⑧ 十四歳、鎮東の三寶寺慧山老
師に依つて剃度す。

⑨ 十九歳、參禪遊方の志を起し
て、初め壽昌慧經に參じ、次
いで博山元來に參す。

⑩ 宗教とは神宗と教相との二説

鉗を受け、乃ち了手を得て、大事已に畢り、生平を慶快す。其の受用安

樂、餘蘊無し矣。後師翁金粟に應じ、再び上つて省觀す、乃ち西堂の職に

就く。翁の黃檗に應ずるに速んで、亦從つて服勤す。一日當堂 正法眼

藏を付囑す、嗣後浦城の馬峯院に隱る。乙酉の冬、黃檗に應じて、首め

て爐鑪を開く。鉗鏈惡辣、凡を鎔し聖を煨へ、一鉗の下良に本有るなり。

某や不肖、首め其の毒に中り、今に迄んで三十餘載、幾處にか 申雪

すれども、其の懷を釋し難し。然らば則ち毒に中るの深うして而して之を

解くの易からざるなり。昨、計の至るを聞く、且喜すらくは天下太平な

ることを。昔日の冤、雪ぐを待たずして而も自ら解けり、更に歎ざる所の

者は、召し回すを承くること二書、教誡諄諄、最親最切、婆心畢く露

るゝことを徹見して、未だ觀面以て師資の命を快くすることを得ざりしこ

とを、罪焉より大なるは莫し。今也已に眞常の果を證して、聲も無く臭も

無し、聖賢佛祖と雖も知らざる所有り、況んや區區たる某小子をや。茲に

首七の期に値ひ、敬んで 純陀の供を設けて、靈前に獻じ奉り、少しく萬

德に酬ゆ。伏して惟るに老和尚、大寂光中、某が微忱を鑑みたまへ、

なり。

⑪ 密師翁とは密雲圓悟なり。

⑫ 大事とは佛祖の大道を指す語

なり、法華方便品第二に、「世

尊は唯だ一大事の因縁を以て

の故に世に出現し給ふ」と見

え、臨濟錄開卷第一に「若し

祖宗門下に約して大事を稱揚

せば、直に是れ開口不得」と

見え、又「此の日法筵一大事の

爲の故なり」とも見ゆ。

⑬ 三十九歳、七月十五日密雲の

付囑を受く。

⑭ 正法眼藏とは眞正眼目の法門

なり、臨濟錄の行録に出づ。

⑮ 明の崇禎六年癸酉十月十五日

黃檗山に入院す。乙酉は隠り

なり、時に隱元西堂となる。

⑯ 申雪とは冤をのべ辱をすゝぐ

をいふ、法門を宣揚するに譬

へたるなり。

⑰ 且喜とは一往隨順して之を許

す辭なり、まあよかつたと喜

尙はくは其れ之を娶けたまへ。」

福唐黃檗の因事を聞いて感有り、外護の居士に寄せ、并に本山の僧衆を警む。

藥山千古、法幢聲實、徧く諸方を覆ふ。正幹の開闢、始祖の鴻休、屬賊の名揚り、斷際の道滿つ。天下軒かに知る、源遠ければ流長し。邇來、天童、重ねて濟道を振ひ、豁然として光あり。吾れ師席を継ぎ、三載井井たり、條有り章有り、愧づ余が莽鹵、門頭を相續し、戸底開張し、力めて撐ふること十七春秋、兩鬢霜の如くなることを惹き得たり。一旦因縁別離し、杯渡して直に扶桑に至る。大いに慧公の鼎首を擔ひ、慈悲一片、柔腸頑蠢、無知無頼、群を成し黨を成し殃を爲す。道義を尊ばず、法化利圖し、業識茫茫たり。愚者は由來、自ら用ひて焉んぞ知らんや。勢を審にして行藏せば、浪費斷じて無し、結局禍來るも蒼蒼を怨むこと莫し。江淺ければ魚蝦も掬す可く、林深ければ虎豹も當り難し。我れ是の如きの不軌を聞いて、五内煮るが如く傷るが如し。水遠くして炎火を濟はず、天遙かにして豈に狐狼を拒がんや。全く始終の法護を借つて、正眼

を圓明にし、金湯極力、妖氣を掃除せば、大道萬古全く彰れん。

本師福嚴費老和尚を哭す

獅絃響を絶つて中華に在り、餘音を抄し得て海涯に到らしむ。老大の願王法界を超え、廣長の舌相恒沙を巻く。雲收つて碧漢空覺を生じ、葉落ちて寒林玉花を吐く。愁殺す杖藜、倚靠無きことを、一雙の白眼西霞に對す。

又

吾が師傑出して最も英華、奕葉芬芳海涯に徧し。手を撒して歸源道果を成じ、吉祥にして逝し金沙を體す。粲然たる舍利僧中の寶、巨赫たる名言錦上の花。一片の婆心碧漢に澄む、千秋の道義煙霞に挂く。

如何なるか是れ佛、渾身の骨を突出して、一飽す乳香の糜、圓明の相満月。

如何なるか是れ法、動着すれば活潑潑、拈じ來れば多子無し、一生用ひて乏しからず。

如何なるか是れ僧、白雪兩眉に横ふ、老來思算無し、日午三更を喚ぶ。

お意。

① 召し回すとは慶元大師を費隆和尚が支那へ還らしめんと懇切に勧められたるをいふ。

② 純陀は釋迦牟尼佛に最後の供養を捧げし治工なり。

③ 正幹は福州黃檗の開山正幹禪師なり、姓は吳氏、福建興化府莆田縣の人なり、六祖慧能の法を得て歸り、唐の貞元年間福唐の黃檗山に庵を結ぶ、是れ黃檗の始めなり。

④ 始祖は法脈の始祖にして希運禪師をいふなり。

⑤ 鴻休とは大いなる慶びなり。

⑥ 斷際とは希運禪師の勳證號なり。

⑦ 華嚴疏第一に「根深ければ果實り、源遠ければ流長し」と見えたり。

⑧ 天童は雲雲和尚を指す。井井は秩序正しきをいふ。

⑨ 濟道とは臨濟の遺風なり。

⑩ 杯渡とは劉宋元嘉中に杯渡なるものあり、常に木杯を浮べて水を渡る、因つて名を得たり、慶元大師その東渡に假り用ふ。

⑪ 五内とは五臟に同じ、心、肝、腎、脾、肺の五つを總べて五臟と稱す。

⑫ 金湯とは金城湯池にして城郭の堅固なるに似、轉じて護法の堅固なるに譬ふ。

⑬ 倚靠とはよるの義なり。

⑭ 撒は放つなり。

⑮ 舍利とは梵語、正しくは設利羅といふ、身骨と譯す。

⑯ 釋迦牟尼佛成道の前、一牧牛の女難陀より乳糜の供養を受けられしをいふ。

⑰ 初度とは人の生日をいふ、古に云く、日行三百六十日なれば初度に復するなり」と。

⑱ 玉融とは玉の如く溫和なること。

如何なるか是れ道、日光浩浩、十字縱横に任す、足下甚麼をか缺く。如何なるか是れ禪、口を開けば半邊に落つ、一念未生の時、全く彰れて大千に徧し。

董太宰の軸の韻を次す

錫高峯に寄せて日上ること遅し、臥雲深き處敲詩を夢じ、牧童歌舞して啼鳥を驚かし、豁然す南窓の梅一枝。

參議乾菴陳檀越七十の 初度を壽す

天賦玉融の叟、文章世家を起す。一朝宦夢破れて、歸隱す舊桑麻。五桂常に膝に薫じ、齊眉王花を繋る。人天咸く仰ぎ祝し、道義唯だ嘉なりと嘆す。大なる哉、乾徳備つて、妙用廣うして涯無し。一軸蓬島を壽し、三山彩霞に映す。理明かにして日月を昭し、筆老いて龍蛇を化す。海屋籌を添ふる日、瑤光寶華を篆す。從心兩ながら互に炤し、稀有淨うして瑕無し。聊か東溟の水を捧げて、爛熳す。趙老の茶。懷を開く三五盞、福履恒沙に滿つ。載庭花の甲に上り、江干返。查を待つ。來時歲月を空じうす、歸也定めて差ふこと無からん。

文殊の讚

雲中に身を現して、妙徳神の如し。文點を加へず、分外に天真なり。一巻の心經常に離れず、未だ知らず等待して何人にか付せん。

終七に再び祭る

維れ寛文元年歳辛丑に次る臘月晦日、不肖徒某、謹んで純陀の供を以て、再び本師費老和尚覺靈の前に奠つて、而も告げて曰く、「嗚乎、我が老和尚、首め黄檗の爐軸を開いて、濟北の道の中興す。耀後光前、何ぞ其れ偉なる歟。末後手を福嚴に撤して、千差を坐斷す。寂然として解脱す。よつて來ること有り。世壽六十有九、法臘五十餘春、開法三十年、十大利を恢擴にす。師法森嚴、人を接して倦まず、往を繼ぎ來を開き、功勳固より極り無し矣。其の正眼圓明、青天白日、胸開けて四達し、了に城府無し。人天に號令して、著著法る可し。棒頭に旨を得る者、轟轟烈烈、句下に脱落する者、迥迥巍巍。乃至名公鉅卿、兒童、灶婦も、服膺染指せずといふこと靡し。宗門の鼎盛、師道炳如たり。嚴察たる宗統、千古の龜鑑、禪林の禮樂、全く斯に備はれり矣。蓋し禮は節に中るを貴ぶ、之を行ふに方有り、情切正真にして、幽顯に感通す。正真の情を以て、師靈の前に割露せば、必ず也俯鑒したまへ、中節の禮を以て、常寂の堂に行はば、斷じて格らざること無し。中誠は君子の貴ぶ所、常寂は衲僧の歸する所、其の源を得れば則ち、孟浪の弊無

② 世家とは世々忠貞を盡し、王家に勤勞して、功績あるものをいふ。桑麻は田夫。
③ 五桂とは五子の美稱、五代の費禹鈞、五子あり、皆登第して齊しく榮ゆ、人、燕山の五桂と稱せり。
④ 乾は健なり、陽の性なり、馬上經乾の卦の象に曰く、「大なる哉乾元、萬物資つて始め、乃ち天を統ぶ」と見えたり。
⑤ 三山とは南京の四南に在る山、大江に臨み三峰排列せり、故に名づく。李白の金陵の鳳凰臺に登るの詩に「三山半は落つ青天の外」と。
⑥ 從心とは七十のこと、孔子七十にして心の欲する所に從へども矩を踰えずと是れなり、是の歳隱元大師も亦七十なり、稀有も七十のこと、人生七十古來稀なりより出づ。
⑦ 趙老の茶とは趙州從諗禪師の

喫茶去より來る、甲は花のさやなり。

① 查は様と同じ、いひだ。
② 終七とは四十九日なり。
③ 迥迥とは光り輝く貌。
④ 灶は俗の龍の字なり。
⑤ 孟浪は精要ならざる、ことにて、おろそかなることなり。

し。貴ぶらくは其の本誠を獲て超俗の方有ることを。吾が師兼ねて之を有す、行は以て天下を濟ふ可く、言は以て萬世に垂る可し。我が明より以來、名寔中正、獨脱無二なる者は、吾が師に非ずして而も誰そ歟。未後吉祥にして逝す、^⑤雙林の遺旨を體す。茶毘の後、舍利燦然として二百餘顆あり、緇素區分して供養す。則ち當年の天上人間に流布する者、今日に異ならざるに似たり。不肖某、縁に海外に應じて、已に入歳を経たり、最後の音容を視ること莫く、涅槃の遺訓を聞かず、恨を終身に抱き、羞を含むに地無し。茲に終七の期に當つて、敬んで伊蒲の供を陳ねて、聊か寸忱を表す。伏して惟れば尙饗せよ。」

臘月念九日、本師和尚圓七、即日安座に云く、「濟道中興して興未だ闕ならず、如何ぞ手を撒して也た端無し。打翻す花甲春三月、嚼碎す紅爐鐵一團、位草堂に設けて田地穩かに、名海國に垂れて杖頭寛し。圓通應感す天真佛、神を安するを用ひすして神自ら安し。神既に安し、且く道へ、即今甚麼の處にか在る。」拂を擧して云く、「還つて見る麼、常光瑞現して靈機發し、一會拈花又破顔す。還つて當機の者有り麼、老倒兒を憐んで醜きことを覺えず、^⑥盤に和して托出す大家看よ。群を成して別踏す春光の裡、若個の當機か自ら瞞せざる。」遂に吉服を披し、禮拜して方丈に歸る。

⑤ 雙林とは釋迦牟尼佛入涅槃の娑羅樹林、一榮一枯相一雙をなすに因りて名づけらる。

⑥ 茶毘とは梵語火葬の義なり。

⑦ 緇素とは緇は僧、素は俗なり。

⑧ 伊蒲とは佛僧に供する香飯をいふ、伊は伊蒲、蒲は菖蒲、清淨の供養なり。

⑨ 盤に和して托出すとは、盤と共に出す義なるべし、釋林句集下に「盤に和して托出す夜明珠」と見え、註に「盤明珠を走らしめ、珠盤を走らしむ」とあり。

⑩ 吉服とはめでたき服なり、喪服に對す。

本師過七 金剛經を誦す

① 電光泡影夢端無し、師恩を報せんことを圖つて再び展看す、道ふことを怪しむ口門に個の齒無しと、金剛嚼碎して又團圓。

又 法華經を誦す

七軸の蓮經一法華、心印を剖開して淨うして瑕無し、盤に和して托出して師德に酬ゆ、狼藉たる香風海涯に遍し。

辛丑の辭年

乾坤我れに負く古猶ほ今、我れ乾坤に負く空しく自ら吟す。七十愚の如く歳月に渾ず、多生の習氣轉た浮沈す。者回坐斷す孤峯の頂、那ぞ更に端無く外に向つて尋ねん。最も喜ぶ松濤晚節を、鏗することを、共に彈す一曲歳寒の心。

壬寅の元旦

① 洪鈞運轉して歳華新なり、惟だ心香を薫いて至仁を祝す。丈室乍ち開いて萬福泰く、衡門減せず四時の春。喜ぶ車馬の靈谷に喧しきこと無きことを、却つて江山の法身を繞る有り。年去り年來る幻化の裡、日常

② 金剛經は大般若經第五百七十七卷第九能斷金剛分と稱するものなり、鳩摩羅什三藏より支婁三藏に至るまで凡そ六譯あり、羅什三藏の譯古來普く行はる。

③ 金剛經に「一切有爲の法は夢幻泡影の如く、露の如く亦電の如し、應に是の如きの觀を作すべし」と見ゆ。

④ 法華經は西晉の竺法護の正法華より隋の闍那笈多に至るまで凡そ三譯あり、就中鳩摩羅什の譯せる妙法蓮華經古來普く行はる。

⑤ 辛丑は寛文元年なり、臘元大師七十歳の時。

⑥ 習氣とは習慣性をいふ。

⑦ 鏗は鏗々の義、聲音に用ふる語なり。

⑧ 壬寅は寛文二年なり。

⑨ 洪鈞は大鈞に同じ、造化のこ

終に天真を味さす。

又

蒼蒼に愧づること無し是れ我が家、乾坤運泰うして年華を慶す。際限
① 淨潔にして聊か主と爲り、眼目圓明にして豈に邪を逐はんや。梅南枝に發
いて正氣を含み、日東海に昇つて朝霞を擁す。微風吹き醒す堂前の柳、鶯
の滿院の花に啼くことを待ち得たり。

春日に懷を寄す

一氣の和風榮臉を開く、翻身すれば鼻孔愈々遼天、江山懸隔して徒に夢
を懷く、惟だ梅花に對して共に悄然たり。

又

列祖の功勳誰にか寄向す、海天空廓たり笑をか爲さんと欲す、神頭鬼臉
消磨し盡く、① 十二峯巒又眉を展ぶ。

又

世界未だ寧からざるは家國の慮、禪心一ならざるは法門の憂、事難う
して方に見る金湯の力、險を挽き危を扶けて秋を計らす。

となり、杜甫の詩に「一氣洪
鈞を轉す」と。

① 至仁とは天子なり、徳を以て
仁を行ふ者は王なりとも、徳
の仁に合ふ者は之を王と謂ふ
とも見えたり。

② 衙門とは衙木を以て造りたる
門にて、賤者の門なり、詩經
に「衙門の下以て棲遲すべし」
と見ゆ。

③ 蒼蒼とは天なり、詩經に「彼
の蒼たる者は天」と見ゆ。

④ 十二峯巒とは支那黃巖山に十
二峰あり、之を指す、十二峰
は、寶峰、屏峰、紫巖、獅子、
香爐、佛座、羅漢、鉢盂、天
柱、五雲、報雨、吉祥の十二
峰是れなり、日本黃檗にも十
二景あり、此の十二峰に換し
たるものなるべし。

⑤ 杜田とは杜は塞ぐなり、田を
杜ぎなす事なきの意なるべ
し。

又

新に黄檗を開いて今猶ほ古、舊く青松を種ゑて古より今に到る、兩點無
私の閒日月、炤臨す千載歲寒の心。

自叙

少時學ばざれば術無し、一味杜田にして老に到る。幸に内に雜毒無き
ことを得て、身心空淨掃ふが如し。等閑に皮囊を抖擻すれば、衣中の至寶
を狼藉にす。手に信せて拈じ來つて人に示す、聲光蓬島に落落たり。寒山
手を拍つて呵呵、拾得幾乎絶倒。苟も能く直下に承當せば、便ち是れ風
顛の種草。否らざれば則ち此の生を錯過し、驢年にも夢にも斯の道を見
んや。

観音の讚

磐石に獨坐して、慈念永く眞なり。一甌の甘露、遍く刹塵に洒ぐ。
楊柳枝頭悲願切に、却つて大地をして盡く春を回さしむ。

彌勒小兒を負ふて水を過ぐる圖

新春筆を擧して、事事克くするに堪へたり。偶々布袋上人に逢ふ、必

① 風顛の種草とは臨濟の兒孫の
意なり、黄檗、臨濟を稱して
道の風顛漢といひしこと再三
あり。

② 驢年とは曆中に建つることな
き年なれば、未來際に到るも
竟にその年に遇ふことなき意
なり、永劫といふが如し。

③ 甘露とは梵語阿耨多羅三藐三
菩提、不死の義。初めは蘇摩
と稱する花の汁をいひ、之を
飲めば靈力を回復すとせり。
佛教には之を解脱の法門に譬
へ、法華化城喻品第七に「能
く甘露の門を開いて、廣く一
切を度し給へ」と見え、支那
にては長生不死の藥として道
教に用ひらる。老子第三十二
章に「天地相合し、以て甘露
を降す」とあり。

④ 刹塵とは塵刹に同じく無量の
國土を云ふ。

⑤ 彌勒は當來成佛の菩薩なり。

竟何の所得か有る。背に少小の孩兒を負うて、覺えず脚跟の打濕すること
を。兜率の路頭を忘るゝこと勿れ、便ち是れ真正の彌勒。

列祖の圖の序

西乾の四七、眼横鼻直、中華の二三、寐語喃喃たり。天下を惑亂して、
了期有ること無し。正眼に看來れば、電影空花、奚ぞ珍と爲るに足らんや。
其の本源を詰れば、蓋し靈山の老子、關頭の密ならざるに因る。聊か枝
花を露して、以て頭陀の咲破を致す。端無く虚を承け、响を接し、訛を
以て訛に傳ふ。相襲うて風を成し、直に如今に至つて、人の截斷する無し。
深く慨く可きなり、那ぞ更に様に依つて猫兒を畫き、持し來つて余に示し、
忤心をして惡發せしむることを致さんや。未だ呵叱糊塗一上することを免
れず、累東土西方諸老の面門に及び、愈々醜態を増す。我れを罪するも奚
ぞ辭せん。然も是の如くなりと雖も、返つて憶ふ、雲門老漢、一棒に打
殺して、狗子に餓はして吃せしめ、貴ぶらくは天下太平を圖るといふこ
とを。源頭を掃潔して、恩を知るに地有り、余の逗漏、奚ぞ云爲するに足
らんや。但だ願はくは、智者斯の圖を達觀して、頓に其の本を悟らば、則

①布袋和尚、名は契此、彌勒の分身と稱せらる。その遺偈に「彌勒真彌勒、分身千百億、時時人示す、時人自ら識らす」と。

②兜率は具には瑞兜率陀、又は彌都史多ともいふ。知足、又は妙足とも譯す。欲界六天の中の第四天に位す、彌勒の淨土とする所なり。

③靈山の老子とは釋迦牟尼佛なり。

④頭陀とは金色の頭陀摩訶迦葉をいふなり。

⑤响は响の誤りならん、响は漢音と、吳音づ、虚言妄語なり。

⑥雲門文偃、釋尊の下生を評して曰く、我れ當時若し見ば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめん、貴ぶらくは天下太平を圖らんことを」と、之を引けり。

ち圓明亘赫として、淨潔餘すこと無く、樂しみ焉れより大なるは莫し。以て丈夫の志を遂げ、終に隨波逐浪せず。他日條白棒を拈じて、雲門を打殺して、釋迦老子の爲に、屈を雪ぐこと一番せば、敢保す佛日重ねて光り、道風益々熾んならんことを。列祖常寂光中、掌を拍つて呵呵すれば、則ち圖を按じて馬を得るの功に孤かざるなり。

一山寧禪師の贊 相國寺の愚溪禪人の請

頑極に祖承して、愈々偏僵を添ふ。法の人の爲にするもの無く、觸著すれば便ち棒す。放有り收有り、偏無く黨無し。宗、祖印を開き、白華遍り來る。隨波逐浪、褒貶黜陟、原兩様に非ず。末後端無く聖顔を動かす、古今の標榜と爲す可し。

固信心士に示す

仁智は山水を樂しみ、祖師は未萌に契ふ。頓に諸の色相を空せば、心月自ら圓明。物に遇うては則ち靈鑑し、縁に隨つて有情を利す。凡夫能く本に返れば、天下汝を輕んせず。本來二致無し、何ぞ壞し復た何ぞ成せん。之を視るに見る可からず、之に名くるに豈に能く名けんや。唯だ餘す

⑦の吃は喫に同じ、くらふなり。

⑧一山一寧は支那浙江台州の人、正安元年日本に渡來し、鎌倉の建長、圓覺、京都の南禪に歷住し、深く後字多天皇の歸崇を受く、頑極行彌は攝岐宗第十世、虎丘派第六世に當り、一山の師なり。

⑨論語に「子曰く、知者は水に樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動く、仁者は靜なり。知者は樂しむ、仁者は壽し」と。

⑩無生とは法の本體生滅の相を離れ、如々不動なるをいふ。

⑪沙界とは恒沙界にして、無量無邊無數の世界をいふなり。

⑫纏懸とは郷は鄙俗の意、懸は善良の意、世俗に善しと稱せらるゝ者をいふ。孔子深くその似て非にして反つて徳を亂るを惡む、故に論語に「纏懸は徳の賊なり」とあり。

深造の者、歩歩無生を證す。珍重す固心子、日常須らく力行すべし。本の有の路を忘るゝこと勿れ、沙界縦横に任す。

啓文林居士に示す

道を奉じて道を知らず、奉ずるもの甚麼ぞといふことを知らず。禪に參じて禪を會せず、莽鹵更に憐むに堪へたり。儒を學んで儒を識らず、郷愿の賊何如。三教既に漏返、人をして長く嘆吁せしむ。九流去つて返らず、何れの日か渠に逢ふことを得ん。半瓢東海を測り、一棒虚空に遶なり。千差の路を截斷して、圓明夜珠に徹す。天は開く太和の臉、法界一に吾が廬。坐臥風雅に乘じ、行藏缺餘無し。東西皆夢幻、夢破れて虞無きことを樂しむ。一段還郷の曲、吹き來つて道軀を慰す。蒼蒼如し眼有らば、終に區區に負かず。

日昌劉信士に示す

本來一字無し、筆舌虚空に闊く。機に對して縫罅無し、何れの處にか風を通す可き。有語干渉に非ず、無言大夢の中。有無俱に坐斷して、八面盡く玲瓏。塵說熾然說、心通すれば道も亦通す。揚眉語默を超え、

- ② 三教とは儒、道、佛を總稱す。
- ③ 九流とは儒流(儒教)、道流(道教)、陰陽流(數術)、法流(律法)、名流(正名)、墨流(墨翟)、縱橫流(算法)、雜流(餘の八を兼ぬるなり)、農流(播種)是れなり。
- ④ 八面盡く玲瓏とは十方に應現すること無礙なるに譬ふ。碧巖第九十一則の垂示に見えたり。
- ⑤ 塵說熾然說とは一塵一法皆悉く熾然として説法すとの義なり。
- ⑥ 揚眉とは迦葉尊者の揚眉瞬目、破顔微笑を指す。
- ⑦ 直指とは達磨大師の直指人心、見性成佛を指す。
- ⑧ 三際とは過去、現在、未來を總稱す。
- ⑨ 須伽島は具には伽陵頻伽島といふ、譯して好聲鳥、美音鳥、妙聲鳥といふ。

直指迷蒙を醒す。言前の路を觀破せば、譯傳始めて功を見、格外の句を掀翻せば、本來の翁に負かず。

青木民部、罷山成休信士を薦せんことを求む

心心二念無く、念念二心無し。心念渾べて一致、圓明古より今に到る。正因正果を該ね、終に外に向つて尋ねず。花は發く蓮池の會、香は飄る碧玉林。茲を以て靈德を薦す、剖出す罷山の金。聊か偈を述べて證と爲す、名は標す上品の箴。

靈雲院信女を薦す

本寂 三際を超え、返觀自他無し。蓮は開く方寸の裡、香は熟す偏娑婆。道を助く、頻伽の鳥、心を安す極樂の窩。一彈す無生の曲、慶快意如何。

辛丑の仲冬、樂山の慧首座の專使慶誕し、兼ねて駕の山に歸らんことを請ふて果さず、偈を作つて之を慰す。

洪荒として萬里一乾坤、獨り羨む薰風の海門を撼すことを。奕葉芬芳として法座を擁し、氤氳たる瑞氣祇園を壯んにす。無私撥轉す、天鈞の令、有力消し難し鐵棒の痕。昧さず、九潭雲孕の種、海嶽を掀翻して始めて恩を知る。

自叙

老倒たる杖藜海東に跨る、忘れず名質舊家風。尋常運用して事別無く、坐臥圓明なり方寸の中。園透せる人天萬福を増し、大いに手眼を開いて虚空を廓かにす。蓬島に逍遙して奚ぞ拘碍せられん、徹見す西來。功を宰せざることを。

深尾庄兵衛、考了喜信士を薦せんことを求む

生死由來幻なり、昇沈す曉復た昏。善い哉能く業を了すること、葉落ちて自ら根に歸す。八十六春の夢、空しく一法の存する無し。唯心常に味さす、炤徹す本來の源。此を以て靈福を薦む、頓超詎ぞ論ず可けんや。心花開いて馥郁たり、果證是れ知恩。

性公尼、嚴石見太守清閑居士を薦せんことを求む

佛日輝を流す四海の濱、杖頭指す處纖塵を絶す。死生燦破して烏何ぞ有らんや、來去分明に假眞を分つ。三十三春孝行滿つ、這回提起して愈々尖新。蓮花會上風光美なり、盡く是れ清閑無事の人。

御史津田平左衛門を薦す 孝子平六求む

正氣天命を奉じ、代巡帝畿を壯んにす。生民俱に草に偃し、德化風の馳するよりも迅なり。啓手留戀すること無く、歸途春正に肥えたり。恰も彼岸に届るに逢ふ、徹證夫れ何ぞ疑はんや。偈を説いて

て靈性に通じ、頓に超ゆ淨者の機。圓明萬古に亘る、一會碧蓮の池。

仲春念五日方丈の上梁

莖草を拈じ來つて鋒芒を御く、到る處爲に標す。水月場。徹底大機、大用に堪へたり、果然として棟を成し又梁を成す。門不二を開いて千差攝し、法無多を演べて量る可きこと莫し。此の日太和。風雅振ふ、礫山の正脈永く流長。

方丈の上梁、旦時陰翳す。侍僧雨り時に及んで便ならざるを恐れ、亟かに拜梁を催さしむ。老僧謂く、「時至らば自然に光輝ならん」と、稍々停む。果して驗あり、遂に偈を説いて之を誦す。

新に丈室を開いて鋒芒を迅にす、御苑翻じ成す。選佛場、道ふこと莫れ太和手眼無しと、遼天の一撈愈々風光。

小川又左衛門に示す

正信。三思の本、平心自佗を一にす。檀門。六度を開き、慈海波を揚げす。浩氣眞主を衛り、脩身蘊魔を驅る。百年幻化の夢、豈に自ら蹉跎す可けんや。曾て西來の叟に謁し、胸開けて太和を滿たしむ。礫山翠を添へて

功を宰せずとは、功を主宰せざることを、大功は宰せずといへる義なり。老子に「功成つて居らず」とあり。
啓手とは死のことなり、曾子の臨終に「吾が手を啓け、吾が足を啓け」といへる故事より来る。

水月場とは菩薩應現の道場をいふ。證道歌に「一月普く現す一切の水、一切の水月は一月に攝す」と見え、華嚴經第二十三兜率偈讚品に「譬へば淨滿月の普く一切の水に現するが如し、影像無量なり」と雖も、本月未だ曾て二ならずと見えたり。
門不二を開くとは維摩經の不二法門をいふ。一切の法二にして二ならざるを不二といふなり、維摩の一默は此の當體を明すなり。
風雅とは詩の國風と二雅とを總べいふものにして、正しくして後世の法となすべきものの義なり。
選佛場とは成佛を選定する所の道場をいふ。景德傳燈錄第十四丹蓋天然の傳に「今江西に馬大師出世したまふ、是れ選佛の場なり」と見えたり。

茂く、福德轉た増々高し。四海玄化を誦し、功は一刹那に歸す。日常能く是の如くならば、必ずしも如何を問はず。

三月三日 華嚴經を誦して畢る

華嚴を讀み罷んで春未だ閑ならず、白毫光耀す兩眉の間、悲心片片知識に承け、願海重重老顔を壯んにす。百城幻化の境を歴盡して、頓に三昧を忘れて空に徹して還る。門開けて樓閣風光甚だし、忙忙として萬山を走らしむるに勝似たり。

水野源太夫に示す

仁者は善事を興し、愚人は惡道を行ふ。惡極つて自ら身を滅す、幾人か能く老に到る。至善天下に優る、古今皆可しと曰ふ。黑白兩ながら分明、善擇是れ實とする所。之を得れば用ひて窮らず、諸を藏すれば分外に好し。福德日に彌々新に、慧光圓にして杲杲たり。決定信じて疑無し、超群の種草。

鹿橋禪德過訪す

老衲心開く解脱の花、時時増長して福涯無し。薰風五度玄策に臨み、和

- ① 三思とは審思、決定、動發の心的三作用をいふなり。
- ② 六度は布施、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若をいふ。度は波羅密の譯、生死を度脱する意なり。
- ③ 華嚴經に六十、八十、四十の三本あり、隱元大師の閱覽せられしは孰れか詳かならざれども、恐らくは八十華嚴なるべし。
- ④ 彌勒の樓閣門、彌勒の一彈指によりて忽ち開けるをいふ。
- ⑤ 鹿橋、名は了麻、妙心寺第二百十九代の住持なり、後、廣島の禪林寺に住せり。隱元大師の長崎より攝津の普門寺に上りし時、豫め道中宿泊等の便宜を計れり。
- ⑥ 潦倒は時勢に適せざる貌。
- ⑦ 五欲は色、聲、香、味、觸の欲なり。

氣三春紫霞に間はる。潦倒として迷はず正法眼、英賢豈に塵沙に混す可けんや。香飄り果熟して人天慶す、便ち是れ靈山の一會家。

復た卓石信士に示す

人豪富の室に生る、多くは五欲の籠罩する所を被つて、丈夫の志を活埋し、一も出離すること無きも、眞に慨く可きなり。信士の如き、茂年に便ち無常の迅速を覺り、此の道を正信して、孜孜として退かず。唯だ此の精進力に依つて、頻りに佛知見を開かんことを願ふを急務と爲し、塵勞に汨されざるは、萬が中唯だ一二のみ。甚だ羨む甚だ羨む。但だ信得及して、晝參夜究、間忙を間つること無く、忽然として因地一聲せば、佛知見現前して、外より得ず。了了として自知せん、生死去來、千魔百怪も、搖動すること能はず。始めて自證の驗を知り、夫の龐老子と手を把つて並び行いて、便ち日用の事別無きことを信ずるときは、則ち虚しく此の生を度らす、否らざるときは則ち盡く是れ流俗の隊中に算し將ち去り、佛知見と奚ぞ雷に懸隔すること霄壤のみならんや。如何。

語石禪人、故考宗順信士を薦せんことを求む

子力めて參禪する有らば、薦超而も必ず克す。何ぞ須ひん余が言を乞うて、而る後に明德を成することを。本來心を觀破せば、了然として空即ち色。死生夢幻の中、夢破れて便ち超格せん。一拶せ

ば鼻天に遶に、圓明にして礙塞無し。觸處是れ 菩提、靈然として得ざることを無し。

季春望日、關梅巖居士過調す

梅巖誠信の士、來り調す太和の翁。花柳春將に暮れんとし、江山日正に紅なり。善遊俱に趣に適ひ、到る處盡く同風。個の中の旨を會得せば、歸家路路通せん。

新山仁左衛門、故考昭心性月信士を薦せんことを求む

世途見別にして各々 蟬燥、直指西來路坦平。托出せば昭心常に味さず、推開せば性月獨り圓明。三千の塵夢即時に斷じ、六五の春秋手を 撒して行く。此の日更に末後の句を求む、靈然として一拶せば無生を證す。

老子の讚 高力左近大夫求む

大隱は 無知にして闇間に混ず、如何ぞ驢に騎つて二函關を過ぎん、誰人か一拶す 五千の語、面門を玷汚して只だ自ら謾す。

松前志摩守に示す

正氣邊疆に鎮し、洪波海揚らす。功成つて宰せず、徳業始めて全く彰る。本來の物を返照せば、頓に空して量る可き莫し。死生事感無く、萬慮盡く消忘す。天中の月を突出して、人を照して肝胆涼

①菩提とは佛道と譯す。
②蟬燥とは高峻なる貌。
③撒は放つなり。
④老子第十八章に「智慧出でて大偽あり」と「聖を絶ち智を棄て、民利百倍す」と見ゆ。
⑤函關は函谷關なり、老子周末に青牛に騎つて函谷關を出つと傳ふ。
⑥五千の語とは、老子關令尹喜の請を受け、書上下篇を著し、道徳の意を言ふ、五千餘言にして去る、史記列傳に見えたり。

し。仁風四野を偃し、草木俱に香を生ず。格外に玄旨を求め、玉毫聊か放光す。淨く東海の畔に臨む、地久と天長と。

老唐張振甫に示す

孤岩頂上の峯を踏斷して、看來れば異無く亦同無し、眼開けて著けず繁花の夢、當人を撼醒す一瞬の中。

僧一紙を呈す、師目訖つて云く、「未だ祖師の關を透らす、謾に險崖の路を行く。」僧云く、「某甲、三十棒を喫するに分有り。」師云く、「棒有れども這の無血氣の死漢を打せず。」

僧云く、「和尚、掌中に向つて死蛇を弄すること莫くんば好し。」師、大棒に打出して云く、「且く道へ、是れ死か是れ活か。」

①老子第七章に「天長地久の謂見ゆ。
②小祥忌とは一周忌なり。

福嚴先大和尚 小祥忌の拈香に云く、「吾が師徳量虚空に廓かに、乾坤を包裹して功を宰せず。直截人の爲にす三痛の棒、無私物を照す一輪の紅。滔滔たる法海洪流の柱、兀兀たる宗門大雅の風。此の日涅槃初忌の諱、又滴涙を添ふ梁山の中。諸人還つて會す麼。福嚴堂上春光盡き、太嶽峯前正脈通ず。忤逆横に擔ふ鐵榔栗、觸翻すれば鼻孔盡く相同じ。此れを以て恩に酬ゆるに猶ほ未だ足らず、分身利利無窮に答ふ。」便ち焼香禮拜す。

一峯居士に示す

乾坤を統攝するの力、大いに孔徳の容を開く。生を衝ることは一子の如く、國を護ることは雲の從ふが若し。中天の日を捧げ出して、祿は億萬の鐘を増す。英風八表に彌り、一劍先鋒を定む。生死回互無く、獨り蓋代の功を超ゆ。果して能く是の如く信せば、直截勝ること猶ほ龍の如し。

津田道茂信士に示す

前に云ふ、「一念一行ならば、成就せずといふこと無し」と。所謂之を一處に置けば、事として辨せずといふこと無し。今人の工夫を作す、心境雜亂、一に歸すること能はず、生死岸頭、擲に用不着。正に謂へり、路多ければ草を踏めども死せずと、豈に能く本來の面目を徹見せん耶。又問ふ、「自今何を得てか行じ去らん」と。老僧云く、「一念圓明ならば萬古に亘る、涅槃生死空花に等し。苟も能く圓明の本體に徹證せば、中に於て涅槃生死の相を覓むるに、了に不可得、豈に歡喜憂憾の事有らん乎。故に古に云く、「流に隨つて性を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。」之の本體豈に他人の擬議す可き者ならん哉。」是を以て末に又答へて云く、「一念萬年終に改めず、任他あれ滄海桑田に變ずることを。始終一貫、無二無別、詎ぞ生死

①老子第二十一章に「孔徳の容、惟道是れ從ふ」と見ゆ、而して孔は大なり、盛なりと注せられ、又空しきなりとも解せらる。

②雲從とは雲の如くにつきしたかふをいふ。

③鐘は景の名にして、六斛四斗を稱す、一説に八斛、又一説に十斛ともいふ。

④遺教經に、「之を一處に制せば、事として辨せずといふこと無し」と見えたり。此の心の放逸を誡めたるなり。

⑤景德傳燈錄第二、第二十二祖摩訶羅尊者の傳法の偈に、「心は萬境に隨つて轉ず、轉ずる處實に能く圓なり、流に隨つて性を認得すれば、喜も無く復た憂も無し」と見えたり。

⑥一念萬年とは三祖の信心銘に出づる語なり、一念を以て萬年を一貫するの意なり。

去來の遷變す可けん。謂つ可し、活潑自由、罣無礙無しと。便ち是れ月明かにして簾外轉身の時、荆棘林中脚を下すの處。否らざれば則ち流俗の漢子に算し將ち去るに非ざる無し。一念圓明と奚ぞ曾に霄壤のみならん矣。道茂善人、諸を勉めよ、諸を勉めよ。」

性海夫人、法華經を寫すに示す

圓明眞の性海、心妙蓮華を發く。手眼淨きこと鏡の如く、揮毫彩霞に映す。三乗黙して稽首し、諸子牛車を共にす。七軸心膽を昭し、萬言爪牙を露す。靈山會上の客、俱に法王家を證す。

張敬泉信士に示す

生平の造就只だ是の如し、百歳の風光一瞬に過ぐ。未だ源頭の活潑を得ず、那ぞ忙裡に唉呵呵たるに堪へん。眼は開く濃淡三更の夢、心は着す榮膺五蘊の魔。珍重す老人の亟かに猛省することを、聖賢の舊路蹉跎たること莫れ。

圓硯の銘

覆蓋の渾淪、至徳を涵容す。一氣元眞、靈然測り回し。盤古端無く、

①禪林句集に、「夜明簾外の主、偏正の方に落ちず」と見え、

又同書に圓悟心要を引き、「生死の關を跳出して、荆棘林を驚過す」と見えたり。

②三乗は聲聞、緣覺、菩薩の三聖なり。

③牛車は羊、鹿、牛の三車を以て三乗に譬へ、大白牛車を以て一佛乘に譬へたるものにして、法華の譬喻品に詳なり。

④法王家とは法華に佛を破有法王とも稱せり。

⑤銘は志すなりと説文に見ゆ。渾淪とは一氣の未だ分離せざる鏡にいふ語。

⑥盤古氏は支那開闢の首君にして、天地人三才を始め、日月を分ちし人なり。天池とは海の異名なり、莊子逍遙遊に出づ。

⑦没絃琴とは絃のなき琴なり、自分の妙音を彈出せしめんと

黑白を平分す。天池浪濺ぎ、乾坤色有り。風雲に際會せば、文章乃ち克す。三才を應用す、萬古の規則。

穎川藤左衛門に示す

人生幻夢自ら浮沈、若個か幻中に寸陰を惜む。塵勞を爍破す淨圓鏡、漆桶を打翻す吼雷音。出世丈夫の志を虚しうせず、豈に靈山大士の心を味さんや。一味人に涼しうして間斷無し、格外の沒絃琴を彈するに好し。

佛誕日

因地一聲全體現す、周回指顧更に吒吵。人天龍象希有と嘆じ、草木林鬱瑞嘉を獻す。煦日忽ち臨む師子窟、薰風乍ち長ず法王家。團團として拶入す娘生の會、特地に心開く。優鉢花。

偶成 三首

芽を把つて頂を蓋へば便ち心休す、那ぞ更に端無く強ひて出頭せん。事干差を別つても都べて坐斷、理一決を明かにするも獨り全く周し。機暗室に生じて風席を翻し、寂として澄潭を照して月。勾を放つ。自得安閑舊習を消し、空花濃淡復た何をか求めん。

也た曾て特地に奇哉と嘆す、直に今に至るまで點埃を絶す。紅日自ら昇つて還た自ら落ち、白雲

飛び去つて又飛び來る。無明の草は長す菩提の路、荆棘の花は敷く般若の臺。死生幻化の夢を觀破すれば、千門萬戸一齊に開く。

牛頭没し也た佛頭彰る、聖字凡名量る可き莫し。草木無心にして格外に薰じ、乾坤何の意ぞ山堂に映す。自ら憐む一味。靜方の好きことを、嘆するに堪へたり。兩丸太殺だ忙はしきことを。但だ松梅素志を同じうするを得て、渾身の霜雪も也た風光。

某禪德に示す

正法眼を豁開して、徹見す太和の人。出入回互無く、去來始めて切親。

仁に當つて能く譲らず、正氣自ら高く昇る。末後須らく深く造るべし、機に臨んで轉身を貴ぶ。善藏縫罽無く、妙用自然の神。萬法本に收歸し、風光剎座に偏し。果然として是の如く證せば、當體是れ能仁。

松平伊豆守の世を謝するを聞いて感有り

九年壁觀追尋を絶す、勞生に孤負して直に今に至る。意はざりき洪鈞線脈を轉することを、豁然として大地檀林と作る。三思の德澤千古に垂れ、一願の太和萬金よりも重し。是の如く助揚す正法眼、靈明獨脫始めて知音。

ていへる語なり。

①周回指顧とは周行七步左右を顧視し、右手天を指し左手は地を指し給ふを云ふ。吒吵はしかり又は嘲る聲なり、天上天下惟我獨尊と唱へ給ふをいふなり。

②優鉢花とは優曇鉢羅花の略なり、祥瑞靈異、又は希有とも譯す、花無くして子を結ぶ、故に佛經中希有に喩ふるなり。③勾は句に同じ、屈曲するの意なり。

④靜方は上方に同じく寺院のことなり。

⑤兩丸は日月のことなり。

⑥論語に「子曰く、仁に當つて師に譲らず」と見ゆ。

⑦能仁とは釋迦の譯名なり。⑧勞生とは塵勞の衆生の義なり。

⑨論語公冶長第五に「季文子三たび思つて而る後行ふ、子之を聞いて曰く、再びせば斯れ可なり」と、蓋し季文子事を慮ることの詳審なるをいふなり。

⑩願はかへりみるなり。

參禪の偈 十首

參禪の人は真心を發せよ、心真なれば念念纏塵を絶す、觸著すれば一毫光燦爛、驢頭馬臉も也た天真。

參禪の人は直截を貴ぶ、一念圓明ならば常に亘赫、死生夢幻の花を樂破して、拈じ來れば手に信せて何ぞ奇特なる。

參禪の人は自ら酌斟せよ、空花濃淡追尋すること勿れ、本有 多子無きことを返觀せば、徹骨の風騒 忍不禁。

參禪の人は亟かに返覺せよ、返覺すれば 現成彫琢無し、自家の應用自ら收藏せよ、何ぞ必ずしも蓮臺千葉に托せん。

參禪の人は難を辭すること勿れ、黄金鑄就す一心肝、紅爐百煉更色無し、徹見す丈夫自ら護せざることを。

參禪の人は草草なることを休めよ、閒忙動靜亟かに鞭考せよ、假如言行相應せずんば、一たび人身を失するも何れの處にか討ねん。

參禪の人は真高なることを休めよ、真高の念積れば便ち魔と成る、恐らくは 修羅窟に摺入せしめて、百劫千生奈若何せん。

●臨濟行錄に「元來黃檗の佛法多子無し」と見えたり。

●忍不禁とは忍後不禁の略語なり。

●現成とは現前成就の意にして、現象差別界を表す、之に對して本體平等界を表する語を本分といふ。

●禪林句集に禪林類聚を引き、「大治の精金變色無し」と見ゆ。

●修羅とは詳しくは阿修羅、又は阿素羅といふ、非天と譯す、六道の一にして鬼と天との中間に位す、常に三十三天と闘ひ勝負を争ふ。

●十聖は十地の菩薩、三賢は十住、十行、十回向の菩薩なり。

●端的とは眞實の義なり。

●眞空とは眞實際なり、空有の中道を指していふ。

●一勻とは物の分量の少き義なり。

參禪の人は綿密密、十聖三賢見れども及ばず、須彌を撞倒して兩眼を開かば、死生の大事始めて 端的。

參禪の人は執著することを休めよ、執著すれば 眞空 一勻と成る、小見は誠に井底の蛙の如し、驢年にも夢にだも金剛脚を見んや。

參禪の人は自ら疑を決せよ、一念未だ萌さず正に好し追ふに、追ふて無生 無住の處に到らば、豁然として因地吾れを欺かず。

淺野玄蕃に示す

天然無事の福を自得するも、猶ほ憐む芥鹵に漚花を覓むることを。漚花濃淡三春の夢、無事天然片月の查。水漲り船高うして上派を分ち、雲開け江靜かにして無涯に徹す。苟も能く眼底空しうして洗ふが如くならば、不二門中共に一家。

雨窓の懷舊

劫江山を焼いて盡く愁を帯ぶ、愧づらくは妙法の心髮を解く無きことを、空しく餘す幾點寒巖の涙并せて雲濤と作して舊差を洗はん。

三瑞相を感ずることを賦す

奇なる哉三瑞林間に應ず、果して希常を感ず証ぞ等閑ならん。華土の風光俱に掃地、扶桑の彩氣正

●無住とは眞空の當體住著すべからざるをいふ。金剛經に「應に住する所無うして其の心を生ずべし」と見えたり。

●三瑞相とは蓋し牛頭栴檀瑞像、三平瑞像、列祖圓の寶槩山に到れるをいふものならん、後に詳なり。

①爛斑。群英濟濟眞主を衞り、正信依依として素顔を壯んにす。但願はくは東西盡く極樂、②擊撃たる社舞塵寰に滿つ。

黃檗の自如。監寺に寄せ示す

法門千古に重く、徳業植うることを涯無し。海外風語を聞く、吹き來つて善芽を長せしむ。③直心祖道を衞り、正氣群邪を伏す。返炤す中天の日、胸開いて點瑕を絶す。始終能く若し一ならば、道果嗟することを須ひす。

大村因幡守に示す

④人我の相空して、冤親致を一にす。⑤解脱の門に入り、般若の智を成す。福を植ふる生を放つ、存亡兩ながら利す。正信に歸依し、⑥歡喜地に超ゆ。⑦世諦空花争ふ可からず、心開けば便ち是れ安身の處。

毓楚何信士、長崎より至り觀す、此を占して之に示す

倏ち崎江に別るること ⑧八載餘、今朝重ねて晤す意何如。微に眼孔を開いて三際を洞にし、聊か襟懷を展べて太虚を卷く。道義頻りに増す黃檗の室、塵勞迥に脱す白牛の車。去來着せず人天の福、一塵の清風 晴驢を壯んにす。

①爛斑とはまだらなり。
②擊撃とは鼓の聲にいふなり。
③監寺とは一寺を監督し、衆僧を總領する役名なり。
④直心とは維摩經菩薩品第四に「直心は是れ道場、虚假無きが故に」と見えたり。
⑤人我の相とは我相人相なり、金剛經に見ゆ。
⑥解脱とは榮障より免るゝ義なり、法華方便品第二に「佛は一解脱の義を説き給ふ」と見えたり。
⑦歡喜地とは十地の位の第一位に當る、此の位にて始めて一分の中道を證するなり。
⑧世諦とは俗諦の義、差別門をいふなり、眞諦に對す。
⑨八載餘とは隱元大師、明暦元年長崎崇福寺より攝津普門寺に到り、今寛文二年に至りて八載餘となる。

⑩晴驢とは、晴字に盲驢と正驢の別あり。盲驢は一向に既していひ、正驢は抑下して托上するなり。凡そ晴驢晴漢の意に此の二様の使用あり、此の語は臨濟の三聖を許して「吾が正法眼藏道の晴驢邊に向つて滅却す」といひしより來る、當に正驢に當れり。
⑪黃檗山十二景の第一を妙高峰といふ、寺の背後に在りて衆峰に抜出せり。
⑫不言の天とは本分に譬ふ。論語陽貨第十七に「子曰く、予言ふことながらんと欲す、子貢曰く、子如し言はずんば、小子何をか述べん、子曰く、天何をか言はんや、四時行はれ百物生ず、天何をか言はんや」とあるより來る。
⑬一大年とは五穀の豐熟せるをいふ、左傳に「大いに年有り」といふ、轉じて佛果の熟せるに用ひしならん。

善遇禪人に示す

霜顔の一老叟、海外に風顛を掣く。太和の境に撞入し、①高峯頂上に眠る。頓に舊時の路を忘れて、塞殺す ②不言の天。一息夢雲の裡、滄桑幾變遷ぞ。子來つて法窟を探り、兼ねて以て華筵を祝す。孝義蓬島を撼かし、文名昔賢に契ふ。儒を知らば佛に入るに堪へたり、善く遇すれば金仙を體す。出格の志を虚しうせず、法王の前に觀すべし。日用能く是の如くならば、同じく ③一大年に登らん。

宇津木治部右衛門に示す

大心淨信の士、④善積峻きこと山の如し。有爲の福に著せず、人天就れと與に班せん。能く清淨の眼を開かば、本來の顔を徹見せん。一念圓明にして向背無し、始めて知る生死相關らざることを。

髻輝 典座の 瑜伽を演するに示す

曾に一片の白 芙蕖を藏して、聊か毫端を吐いて太虚を淨うす、獨り幽冥の法喜に沾ふのみにあらず、人天の樂樂意ふに何如。

達磨の讚

東土西天眼底に空す、三千法界一蒲團。鉢盂口開く、黃梁の夢、兀坐古今孰れと與に班せん。是れ神光敗關を納るゝにあらずんば、更に何れの處に於て心安を付せん。

鉢盂を掲ぐる圖に題す

一萬の鬼子、神通盡くること有り。没量の真人、道力窮り無し。劍戟雷轟き電掣き、機に臨んで虚空を斬るが若し。百千の伎倆を逞盡して、勝たんと欲して轉た更に迷蒙。瞿曇蔀面に點化し、鬼母前功を醒悟す。卒急に三歸淨戒し、豁然として兒童に親見す。始めて信す。四生皆一子なることを。舌根吐き出す妙蓮紅。愛情盡くる處道情現す、子母相將りて樊籠を出づ。

季夏の偶占

火雲影裡枯腸に逼る、何れの處か飄り來る滿院の香、是れ蓮池初めて破綻すること莫しや、人の煩惱を解いて清凉と作す。

又

人間半點の塵を惹かず、小亭聊か憩ふ也た天真、愧づらくは一物の山色

を壯んにする無きことを、滿頭の白髮を剃し得て新なり。

又

心に城府無く行に踪無し、塵内幾か能く此の偈を識らん、何れの處か雲を敲いて午夢を醒す、一雙の白眼青松に對す。

江州木保守安信士、十六、應眞の圖を送つて爲に黃檗に鎮す、遂に偈を占して之を識す。

新に葉軸を開いて初禪を廓かにし、閒雲の碧天に映することを掃盡す。十六の應眞勝侶を探り、千秋の道誼高賢を蔭ふ。太和の風雅東方の瑞、萬福の門庭特地に妍なり。微笑の法輪此れより振ひ、拈花の一會永く綿綿。

魏爾潛居士に復する書

何居士至り來翰に接す、種種の過褒、當に之れ殊に愧づべきなり。聞く足下、崎に在つて、徳を養ひ以て身心を遂ぐと、是れ最も清福なり。然れども此の時、唐土の正君子、道消するの際、賢達豪邁の士、盡く溝壑に付す。惟だ吾が輩、桴に海外に乘じ、殘喘を全うすることを得たり、是れを至幸と爲す。惟だ冀はくは足下、三寶を正信するを根本と爲よ。根本既

善積とは積善の倒語。

典座とは粥飯を典る役名なり、初め鉢座等の九事を典知せしにより名づく。

⑤ 瑜伽とは瑜伽焰口經をいふ、瑜伽は梵語、相應の義なり、心口意の三業一境に相應するをいふ、黃檗宗の施餓鬼に用ふる經文なり。

⑥ 芙蓉は蓮花なり。

⑦ 黃檗とは暫時の夢のことなり、黃檗は粟の一種にして支那人の常食に供せらる、昔盧生、呂翁に邯鄲の邸中に遇ひ、自ら貧困を言ふ、方に呂翁黃檗を蒸す、一枕を盧生に與へて曰く、此れに枕せば富貴なるべしと、生、之に枕し、將相となりて五十餘年なりしを夢む、寤むるに及んで黃檗尙ほ未だ熱せざりきと云ふ。

⑧ 心安とは二祖安心のことなり、景德傳燈錄第三、菩提達

磨の傳に「光曰く、我が心未だ寧からず、乞ふ師與に安んぜよ、師曰く心を將ち來れ、汝が與に安んぜん、曰く、心を覓むるに了に不可得なり、師曰く、我れ汝が與に安心し竟んぬ」と見えたり。神光とは二祖慧可大師の名なり。

⑨ 鬼母とは鬼子母神なり、是れ鬼子母神の因縁を頌す。

⑩ 四生とは胎卵濕化なり。

⑪ 應眞とは阿羅漢の譯語なり、又は真人或は應儀ともいふ、煩惱の賊を殺し、智斷の功徳を具し、人天の福田となるに堪へたり、此の三義を具すと云ふ。

⑫ 論語泰伯第八に「天下道有れば見れ、道無ければ隠る」と見ゆ。

⑬ 論語公冶長第五に「子曰く、道行はれず、桴に乗つて海に浮ばん、我に従はん者は其れ

に固ければ、生生枝葉必ず茂らん矣。原ぬるに夫れ世間の事、水月空花、目を寓すれば便ち休せよ、久しく戀ふ可からず。中に於て恐らくは丈夫の志を埋めんことを、誰か之れ過ちを歎。更に冀はくは、時時に自己の身心を返照せよ。畢竟這の一點の靈光、何れの處にか棲泊せんと。錯つて此の生を過す可からず、到頭の一著、誰人が替り代らん。縦ひ金玉山の如く、子女堂に滿つる有れども、總に用不着、慎しまざる可けん歎。囑囑。

観音の識

大なる哉。観自在、悲願永く休むこと無し。物我原同體、流に隨ひ又流を入す。一枝甘露酒いで、法界已に全く周し。業識茫茫の者、盡く自ら點頭せしむ。

松平隼人正の令女に示す

菩提心發し玉蓮開く、返照すれば原半點の埃無し、娘生の眞面目を徹見せば、本有の個の如來に孤かす。

土土呂木勘兵衛に示す

死生夢幻の若し、何れの處にか追尋す可けん。一念返つて觀照せば、圓明古より今に至る。人情輕きこと片葉、道義重きこと千金。大地蕨草の如し、幾か能く此の心に徹せん。善來法旨を求む、直

示南針を定む。

大野主税助に示す

丈夫世間を出づ、日用自ら開闢。正氣千古に彌り、真心八還を照す。死生能く看破せば、逆順豈に相關せんや。一念明かなること日の如く、風光老顔を壯んにす。

惟明禪人に示す

汝の所問をみるに、端無く又一種の疑心を生じて、却つて兩物と成り、其の中を雜亂して、一に歸すること能はず。終日般若を持すと雖も、般若を轉すること能はず、却つて般若に迷はざる。則ち起滅の惑無きにあらず、愈々持すれば愈々相應せず、轉た念すれば轉た親切ならず。正に隱隱淨沈の中に在つて、一刀兩斷すること能はず、更に來つて示を請ふ者宜なる乎。然れども老僧終に頭上に頭を安じ、節外に節を生じ、人をして顛倒休むこと無からしめざるなり。但だ願はくは汝一信永信、一持永持、一決永決、一斷永斷、第二念無く、第二人無く、萬年一念、一念萬年ならば、那ぞ覺裡に

① 八還とは八方、又は八面といふに同じ、還は環に同じく、圍繞の意に用ひらる。
② 乎は詠歌に用ふ。
③ 兼は兼に同じ、「すつぼん」、「どろむめ」なり。
④ 龐公。此の語は石頭希運に于老僧に見えてよりこのかた、日用の事作麼生と問はれて、一偈を呈したる、その初二句なり。偶體とは適合調和の意なり。滑稽詼諧の意にあらず。

にして、斧劈けども開かず、刀研れども入らず、安んぞ日用相應せざる者有らん哉。

五四

觀音 圓光の鏡銘

慈悲行願の輪、刹刹常に清淨。衆生の心に照徹せば、本來明かなること鏡の若し。眼空點埃を絶し、觀體眞性を見る。十界一圓通、達觀せば説法し竟んぬ。

黃檗の耆舊默公の像贊

彼の耆宿を相るに、居諸黃檗。人に頭地を出して、唯唯として一默す。四代の知識を轉請して、風清く月白きことを惹き得たり。兒孫烈烈轟轟として、蓬萊の片舌を托出す。海屋滔滔として賛すれども窮らず、看來れば也た是れ 白拈賊。

張振哲等、母周榮妙信心女を薦せんことを求む

重恩鞠育を惟ひ、報徳空王を禮す。半偈靈福を薦め、紅爐雪光を點す。愛根消して淨盡す、般若獨り全く彰る。三十六春の夢、回りに看れば一咲場。孝誠投念切に、衆徳復た宣揚す。業海重重に竭き、妙心片片香し。以て解脱の路を資く、直下に便ち超方す。

高泉孫に示す

濁劫龍象希に、縦横 跋躑多し。遠聞惟だ額を盛め、觀面意何にか居る。知る子は超群の萃、能く 天馬駒を扶く。正法眼を擴充して、終に區區を昧さす。一片澄潭の月、圓明徹夜の珠。任従あれ滄海は變ずとも、萬古自ら如如たり。粟岫靈彩を添へ、蓬萊眉轉た舒ぶ。微笑の旨に孤かす、祖席永く 虞 無し。

中元の嘆

搖落の空林本根に歸す、忽ち聞いて特地に深恩を懷ふ。江山限り有り情限り無し、草木存すと雖も誼も亦存す。劬勞に報ゆる莫く空しく自ら嘆す、號天極り罔し誰に向つてか言はん。聊か半偈を宣べて悲愴を含む、字字淋漓として血痕を帯ぶ。

空印老居士を輓す

百歲朝暮の如く、浮雲一瞬目。人生古來稀なり、而も況んや又六を加ふるをや。蘭桂庭中に滿ち、福壽雨ながら俱に足る。歸道一に坦平、行藏拘束無し。生きては國に珍とせられ、去つては幽冥の福と爲る。法護厥の心を盡し、慧炤唯だ吾れ獨りす。再び晤言を期せんと欲す、云に歸ること

①圓光とは熾盛の火焰の形状をなせる後光なり、鏡はその中心にある鏡をいふ。

②十界とは六道四聖の總稱なり。

③居諸は日月をいふ語の助辭、詩經鄭風に出づ。

④白拈賊とは白日に他の物を奪却し持ち來る底の義、白晝の盜賊なり。

⑤碧巖第六十九則の垂示に、稱僧家、紅爐上一點の雪の如し」と見えたり。

⑥跋躑とは「ちんばのうさぎうま」にて、役に立たぬかたはの學人をいふ。

⑦天馬駒とは、駿快不羈なるもの義、碧巖第二十六則の頌に見ゆ。史記大宛傳の注に「大宛國に高山あり、其の上に馬あり、得べからず、因つて五色の母馬を取つて其の下に置く、與に交つて駒を生む、汗血なり、因つて號して天馬子と曰ふ」と見えたり。

⑧續傳燈錄第二十五、彌摩觀成の傳に「任従あれ滄海は變ずとも、終に君が爲に通ぜず」と見えたり。

⑨中元とは七月十五日をいふ。

⑩劬勞とは力を盡すことなり、詩に「哀々たる父母、我を生んで劬勞す」とあり。

胡ぞ太だ速かなる。世事夢中の花、道情空谷に傳ふ。何れの處か搖落の聲、
悲凄林麓を動かす。聊か以て ① 伽陀を説く、唯だ君是れ祝する所 蓮は開
く千百葉、葉葉車輪の如し。上品化生に任す、俯仰眞金の屋。師友閑淨に
満つ、於君唯りトす可し。手を撒つて ② 歸去來、誰か ③ 於穩を嘆せざる。
又爲に拈香する偈
虚空を印破して背面無し、翻身すれば鼻孔愈々遶天、眞香一瓣君が福を
資く、特地に心開く九品蓮。

自證禪人に示す

歸家慕直の路、擬議せば三千を隔つ。一氣回互無し、行藏自ら悄然。丈
夫の志決烈、豈に更に鞭を加へざらんや。生死輪回の事、夢聞亦憐む可
し。中途如し錯脚せば、出を求むることは驢年を待て。

大坂喜齋、大塚ト齋信士を薦せんことを求む

伽陀義味無し、④ 水を飲んで自ら源を知る。草木春に逢うて發し、禽
魚氣を得て原む。孝誠業累を回し、道重乾坤に震ふ。手を撒す十年の外、
今開く解脱の門。靈能く覺悟すること有らば、徹證始めて恩を知らん。

松平隼人正の江戸に回るに贈別す

⑤ 蓬然たる肅氣林丘を動かし、杯茗殷勤別愁を解く。御世全く憑る三尺
の法、安禪打徹す一毫頭。知んぬ君が明月を邀ふるに意有ることを、愧づ
我が無能にして碧流に赴くことを。問道らく徳風皆草を偃すことを、歸り
來れば聲價の瀛洲に満たん。

贈別

舊時の路を味すこと勿れ、歸家獨り悄然。愁ひ聞く別曲を歌ふことを、
作るに懶し歸籍を賦すことを。意氣 ⑥ 冲霄の外、行藏 ⑦ 帝象の先。一聲幻
夢破れ、足下三千に徧し。

酒井内記に示す

惟だ金剛の劍を秉つて、幻花夢自ら消す、眼空しうして一物無し、何
れの處か逍遙せざらん。

酒井主膳に示す

塵勞の夢を放下して、大千一に坦平、頭を擧げて天外に看る、⑧ 日午正
に三更。

の徳を報いんと欲するに、吳
天極り問し」と。

① 空印は酒井讚岐守忠勝の道號
なり、忠勝は若狹小濱の城主
にして、寛永四年家を繼ぎ、
十五年大老職に補す、明暦二
年五月致仕し、萬治三年四月
入道して空印と號し、寛文二
年七月十二日に卒す、年七十
六。普照國師年譜寛文二年の
條に、「七月空印閣下捐館、曉
するに偈を以てす、黄金千圓
を遺し送つて、以て地に布く
に充つ、蓋し閣下當日師に參
する時、契證する所あり、誠
に表休の斷際に於けるに亞が
ざるなり」と見えたり。

② 關桂とは子孫の發達せるを稱
す、願榮曰く、「桂子蘭孫、家
の寶と爲す」と。

③ 伽陀は梵語、略して偈といふ、
頌と譯す。

④ 歸去來とは陶潛の語なり、來

は助字にして、三字二句の法
なり。

⑤ 於穩とは、於は歎辭、穩は深
遠なり、詩の頌、清廟の章に
「於穆清廟」と見ゆ。

⑥ 水を飲んで源を知るとは、一
を聞いて十を知るの譬なり、
景德傳燈錄第二雜嚴羅多尊者
の傳に、「河有り名づけて金水
と曰ふ、其の味殊に美なり、
云々。尊者來に告げて曰く、
此の河の源凡そ五百里に聖者
僧伽羅提有り、云々」と見え
たり。

⑦ 蓬然とは風の行く貌。

⑧ 瀛洲は海中に在りて仙人の棲
息する所と傳ふ、蓬萊、瀛洲、
弱水、之を三神山と稱す、今
は日本を指すものならん。

⑨ 冲霄は大空をいふ。

⑩ 帝象とは表にあらはれたるも
のをいふ。

⑪ 日午に三更を打すとは、日中

松平民部少輔に示す

開士塵世を醒し、真人有空を破す。聊か三寸の舌を舒べて、太和の風を挽轉す。志は負ふ青霄の外、心は閒なり。未發の中。丈夫須らく返照すべし、碧雲をして籠ましむること莫れ。

柏庭道茂信士を薦す

歸依 淨信の士、退隱已に多年。三途の業を懺破して、便ち九品蓮に登る。死生皆夢幻、出沒天然に任す。伽陀の旨を味さずんば、風光大千に徧し。

桂の雨に遇ふを賞す

轟轟たる雷雨秋光を破る、桂子紛紛として半は落香、悔ゆるくは閒に花下の路を行くこと莫きことを、一身淨潔也た清涼。

偶成

自ら愧づ無能の老倒翁、飄飄として一葦西東に任す、杖頭撥ひ出す秋波の眼、覺えず毫端祖風を耀すことを。

又

を以て夜半とすることにて、大地黒漫々たる本分の境界をいふ、五家正宗贊の白雲の章に見ゆ。

開士とは菩薩の譯名なり、諸の衆生を開導する士夫の義なり、前乘の符堅、沙門の徳解ある者に開士の號を賜ひたることあれば、又高僧にも用ひたるものなり。

未發の中とは性の本源なり、中庸に「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ、發して皆節に中る、之を和と謂ふ」と見えたり。

淨信とは清淨の信心なり、金剛經に「是の章句を開いて乃至一念も淨信を生ずるものなり」と見えたり。

一杖横に挑ぐ兩嶺山、東西之れ遠つて等しく閒閒、軒かに知る百歲幻花の夢、鏡に對して寧ろ靨顔を差づること無からんや。

又

圓顯方服眞經を講す、説いて三途に到れば鬼も亦驚く、酒食分明なり兩個の字、活埋す多少の好英靈。

又

金剛を嚼碎してより後、一字烏ぞ齒牙に掛くべけんや、八面の鑽錐縫罅無し、機に臨んで撒き出して恒沙に滿つ。

桂月の漫興

海外閒に蒲散、何ぞ期せん此の郷に到らんとは。忽ち聞く天際の响ゆることを、徒に落つ一枝の香。玉露秋鏡を懸け、人の肝膽を照して涼し。少時多く孟浪、老大愈々清狂。髮白うして脩途邇く、眼青うして看世忙し。等慈解脱の路、般若是れ歸航。念を擧すれば三際を超え、眉を開けば十方に洞かなり。縁に隨つて放曠に任す、何れの處か吾が藏にあらざらん。

列子の 天瑞篇を読む

無形の大盜天眞を盗む、向氏 卽そ能く此の情を識らん、竊み得たり太和些子の氣、頂天立地自

桂月とはよき月かけをいふ。
等慈とは平等の無縁の慈悲。
天瑞篇は列子の開巻第一章なり。
卽は那に同じ。

ら仁を成す。

某善人に示す

正信の歸依點塵を絶す、時時返照す本來の身。鐘殿角に鳴る山中の主、月峰頭に吐く格外の寶。百歳の光陰能く幾か有らんや、一生の幻夢摠に眞に非ず。這回了徹して他事無し、負かす拈花會上の人。

華鯨

君が家海中に住し、性命水府に鍾る。木を以て其の形に肖、高懸奚ぞ太だ。楚なる。衆僧齋を喫せんことを要せば、先づ來つて君が肚を敲く。君が肚虚空に等し、誰人か君が苦を憐まん。苦中响ゆること雷の如く、知音惟だ佛祖。佛祖聖賢の心、受命今古に同じ。相資く未發の前、大なる哉小補に非ず。試みに問ふ把柄の人、聲消して何れの所にか歸す。歸する處知る可からず、聞く時孰れか伍を爲す。根塵所依無し、突出す雲門の。普。聲聲般若の聲、色色蓮華の士。是れを眞佛陀と名づく、諸數に墮せず。

布袋和尚

獨坐の布袋、一杖天を撐ふ。眼四海を空じ、身心悄然たり。咲ふに堪へたり忙忙たる幻化の裡、幾

人か未生の前に豁醒す。

山を負ひ海に跨る羅漢の圖

山を負ひ海を踏む、當に買賣を行ふべし。天涯に踏偏して、自由自在。三千の刹境毫端に現じ、一

點の靈光法界に周し。

達磨の梁王に面する圖

迢迢として萬里より來り、對面如何が不識。人天の功德に貪着して、頓に不識の質を忘る。果して能く相を離れ名を離るるも、妨げず端端的たることを。

大眉徒の茅を結ぶに示す

江山踏遍して自ら閒忙、偶々瓢居を結ぶ古樹の傍、訝ること莫れ峰高うして日の出づること晚きを、人を炤す頂上愈々風光。

又

日用の靜操那畔邊ぞ、平懷の風雅愚賢を一にす、鳥啼き花咲ふて機鋒俊に、閒居を嵐ち得て就れと共にか傳へん。

仲秋念八の。晡間、明堂の外を歩す、忽ち天際の流輝、燦爛として紫繩二十四道有り、北

①大眉、諱は性善、字は真者、支那福建泉州府晉江縣の人なり、隆元大師に従ひて東渡し、圖待すること前後四十餘年、晩に黃檗の東偏に居をトし、東林庵といふ、延寶元年十月十八日寂す、年五十八。
②晡は音の申の刻、今の午後四時に當る、又夕晩の時を稱す。

極を貫く、竊に吉氣の應兆と爲す。聖主賢臣の民に臨むに徳を以てする、所感の徴に非ざる

卓朔たる杖藜晚眺を閒にし、普天の靈彩禎祥に映す。雲碧漢に收まつて千邦靜かに、桂寒巖に落ちて萬壑香し。念四の紫繩北極を貫き、一林の瑞氣文章を煥かにす。聖人の御世民徳を旌し、廣く蒼生に被りて量る可きこと莫し。

二十九日空印居士終七の期、衆禪誦經修懺、以て冥福を資く。仍つて偈を述べて以て薦す。

娘未生の時一片の地、來來去去百千番。今朝直指無生の路、端倪を徹見せば心自ら安し。珍重す讚岐の空印叟、行藏味すと勿く沒絃彈す。

知音萬里空しく恨を遺し、月高峯に上る玉一團。大千幻化の夢を、燦破せば、吾人等間の看を作すこと莫し。自ら慚づ徳薄うして、龍鍾の甚だしきことを、聊か伽陀を述べて膽肝を照す。

玉峰居士に贈る

春容落落として又秋霜、何物か推遷し底事か忙し。開士忘れず弘願の力、丈夫豈に自らの行藏を味さんや。脚跟據有つて三際を融し、眼底塵無うして十方を炤す。謂ふこと莫れ侯門深きこと海に似たりと、旁く消息に通せば愈く風光。

半井瑞雪遠祖和氣清麻呂真人を薦せんことを求む

大功は宰せず久しうして彌く新なり、錯節盤根妙神に入る。徳乾坤に被つて千古に重く、心日月を懸けて一天眞なり。頓に靈鷲無生の果を超えて、徹證す蓬萊不老の春。七百年來法眼の裡、聊か半偈を吟じて真人を表す。

自讃 越州の信童求む

少小頻りに黄檗に參じ、善財獨り觀音を禮す。多生の意氣を味さず、圓明一片の眞心。朝昏瞻禮他事無し、魔障頓に消して古今に徹す。

九日諸禪と同じく高峯の絶頂に登る

烟收つて嶽面獨り晴明、磊落として相將めて頂上に行く。環遶せる千山朝に翠を拱き、高居せる一座坦然として平なり。杖は、杲目を挑げて心膽を昭し、塵は秋風を發して謂情を洗ふ。未だ敢て浪りに險崖の句を彈せず、恐らくは天外をして人の驚くを得しめん。

又

風光の碧天に映する有るを喜び、軽く老倒を扶けて峰巔に上る、胸開いて徧界淨きこと洗ふが如し、黄花を刺し得て眼前に供す。

錯節盤根とは、盤根はわたがまれる木の根、錯節はまじはれる木の節、共に切り難きものにて艱難辛苦の義なり、後漢書に「盤根錯節に遇はずんば、何を以て利器を別たんや」と見えたり。
靈鷲は印度の山名靈鷲山にて耆闍窟山の譯名なり、釋迦牟尼佛の住し給ひし處なり。
善財獨り觀音を禮すは、釋元大師父を尋ねて南海の補陀山に到り、發心せられしをいふものなり。
杲日は明かなる日。

重陽の後二日、清水寺に遊んで大士を禮す

大士清水に現じ、湛然として妙神に入る。等慈苦海を濟ひ、弘願迷津を渡す。物を念ふに原同體、生を視るに兩人無し。舊面目を挽回し、本來身を徹見す。共に圓通の境を證し、淨うして半點の塵無し。密に窺ふ大慈の徳、洪恩陳ぶ可きこと莫し。我れ來つて勝槩を探る、瑞氣天真に映す。道は契ふ山中の主、雲は從ふ格外の寶。中虛萬象を含み、雅誼日に彌く新なり。正に清秋の景に値ひ、懷開けて意倍く親し。法門互に帥を表し、老能仁に負かず。

成就院主に贈る

扶桑の境に歴徧して、何ぞ期せん此の翁に逢はんとは。行藏皆樂地、顯密盡く圓通。淨きことは清秋の月に似、渾べて太古の風を成す。未だ常に片語を吐かず、三昧其の中に在り。天運今猶は古、驪車西復た東。人情流水に付し、道義虛空に廓なり。特に太和の室を造り、殷殷として意倍く隆なり。雲を推して老叟を迎へ、榻を下つて梵宮を淨うす。山簡の供を竭盡し、懷を開いて己躬を潔くす。百年幻化の夢、唯だ此れ全功を卜す。

又別句

① 清水寺は京都の清水寺なり、普照國師年譜寛文二年の條に「九月成就院の主僧、請じて京師の清水寺に遊ばしむ、偶有り」と見えたり。
② 成就院は清水寺内の一院にして、近年その住房となれり。
③ 顯密とは顯教と密教。
④ 驪車は太陽なり。

羨む君が好手藝に、勾を抛つことを、搭着す無依の鐵鼻牛。清水池邊聊か飲嘍し、白雲嶺上恣に優游す。滿林の秀氣千年の瑞、大地の霜花一色の秋。芒繩を掣斷して歸り去る也、了に踪跡の峰頭に落つる無し。

德風禪者の里に回るに示す

德風皆草を偃し、草偃して風光好し。并せて太和の春と作す、世間何れの處にか討ねん。歸去騰騰に任す、再來須らく急早なるべし。九上と三登と、大事乃ち保つ可し。

松平對馬守に示す

正氣千群の象、回天の語漸く舒ぶ。丹心日月を懸け、赤膽空虛に耀く。戲破す浮雲の夢、圓明なり徹夜の珠。滄海の望に孤かず、仁者樂 虞ふること無し。

獨本 藏主の自肯庵に回るに示す

來來去去して忙を辭せず、溪聲を踏斷して流遠長、始めて徹す開忙に一致無きことを、脚頭脚底盡く風光。

歲壬寅に次る菊月十九日、本寺觀音開光に云く、「法身宇宙に彌り、道

① 勾は句に同じ。
② 也是鉄鼻の辭。
③ 無依とは備ふることなし、即ち安きに依ふ語。
④ 獨本、諱は性源、安房の人、隱元大師の法嗣なり、深川に自肯庵を建て、又海福寺を開き、相模に淨業寺を創す、元祿二年八月十一日に寂す、年七十二。
⑤ 藏主は經藏を司る所の役名なり。
⑥ 普照第六則の頌に「徐に行いて踏斷す流水の聲、縱に觀て寫し出す飛禽の跡」の句あり。
⑦ 普照國師年譜寛文二年の條に「師國に入つてより見る所の梵像甚だ如法ならず、適々閩南に范道生といふ者あり、造ることを善くす、肩監院に命じて觀音、韋駄、伽藍、祖師、監齋等の像を造らしむ、開光の日各々法語あり、四方

眼周沙に廓なり。一點光通達して、圓明にして點瑕を没す、諸人會す麼。茲者大士示現の時、靈光正に照して、吉氣筵に臨む。祥を爲し瑞を爲して、家國晏然。霖と爲り雨と爲つて、山川秀麗。眞誠は衆生の福田、永く長河の寶筏と作る。聲を尋ねて苦を救ひ、類に隨つて生を度す。而して其の神通妙用、無量無邊、最親最切なり。何ぞ山僧が筆舌の助揚を用ひて、而る後光明とせん耶。然も是の如くなりとも雖も、也た這の一點を少くことを得ず。何が故ぞ、^②道ふことを見ずや、^③天一點の紅光を得て、愈々高明の廣大なることを見、地一點の精華を得て、益々百寶の光輝を増し、人一點の正見を得て、能く邪を推き正を扶くるの功助を成し、僧一點の正知を得て、卻つて魔を揀び異を辨するの天眼有りと。然らば則ち乾坤覆載の功有りと雖も、亦今古聖賢の表揚發揮を借つて、以て三才の徳を成じ、而して蒼生に被らしめて、^④廣博窮り無きなり。山僧然も不慧なりとも雖も、日用の事別無く、行藏缺虧没し、古往と今來と、何ぞ曾て一毫端を少却せん。既に欠少無し、妨げず一隻手を出して、光明を點開し、觀音大士と互に相表揚して、共に佛事を作して、以て群機を利せんこと亦至善ならず乎。筆を擧して云く、「諸人還つて見る麼、黃髮由來多子無し、全く這の點に憑

瞻禮のもの、嘆じて希有となす」と見えたり。范道生は明の泉州の人なり、寛文初年渡來して長崎の福濟寺に寓す、十年十一月二日同寺に卒す。^② 聖は物を指すにいふ語、又語餘の發聲なり。^③ 老子第三十九章に、「天一を得て以て清く、地一を得て以て寧く、神一を得て以て靈に、谷一を得て以て盈ち、萬物一を得て以て生ず、侯王一を得て以て天下の正となる」と見えたり。^④ 助は勳の古字なり。^⑤ 廣博とは廣大博厚の意なり、中庸に天地の道を形容したる語なり。

つて生涯を作す。慧眼を掲開して今古に亘り、生靈を焔徹して一家に歸せしむ。便ち點す。

長門の神谷勝右衛門、妣孤雲を薦せんことを求む

孤雲幻化の境、黑白居諸を業とす。一句伽陀の語、剖開せば業盡く除く。生死海を打翻し、夜明珠を焔徹す。三界輪回息み、一靈太虚を覺す。儼然として彼岸に登る、極樂意何如。

睡起の戲筆

老來聊か小神通を展べて、夜は家山に返り晝は東に在り、^①夢筆花開いて新に燦爛たり、一園の桃李舊春風。

萬里相公參する次で、問ふ、「是の如く來る者は是れ什麼人ぞ。」師云く、「舊面目を豁開し、本來人を徹見せよ。」進んで云く、「如何が徹見し去らん。」師云く、「日用の事別無し。」相公便ち禮拜す、師云く、「會し了つて禮拜するか、會せずして禮拜するか。」進んで云く、「某甲道ふ可き無し。」師云く、「秋花點點新なり。」

河村十右衛門、妣梅岸妙林を薦せんことを求む

孝子原本を追ひ、貞臣帝京を起す。英傑の事に孤かす、豈に慈恩の情に負かんや。家國兩ながら全美、功助一に大成す。返觀猶ほ未だ足らず、直に法王城に造る。偈を乞うて靈福を薦す、蓮花舌上

^① 居諸とは日月の異稱。^② 夢筆花開とは、和凝年十七、明經に擧げられて、京師に至る、忽ち人五色の筆一束を以て之に與へて謂つて曰く、「子才以て進士に擧げらるべし」と、是れより才思敏聰、十九にして登第せりといへるに基づくなり。萬里相公とは萬里小路雅房也。^③ 法王城とは佛土なり。

に生ず。頓に三界の業を消し、淨土坦然として平なり。大道方所無く、心に隨つて善名を得。妙林登彼岸、極樂舊家聲。

胡信士に示す

久しく至寶を埋めて塵勞に在り、撥ひ出して當陽に見るや也た廢や。眼虚空を廓にして欠剩無く、心滄海を平にして風波を少く。一天の霜月晴れて方に好し、萬里の江山瞬息に過ぐ。飽くまで家珍を載せて歸り去る也、高く彼岸に登る樂しみ如何。

西村久左衛門、考成玄、妣壽圭を薦せんことを求む

法を請ふは敬を主と爲す、親に事ふるは孝を先と爲す。孝敬兩ながら俱に足る、是れを眞の福田と名く。茲を以て父母を薦せば、特地に自ら玄を成す。再び偈を乞うて證と爲す、又腦後に鞭を加ふ。頓に清淨界に超えて、共に寶花蓮に坐す。

惟住孫に示す

惟れ住に所住無く、惟れ行に所行無し。兩頭俱に踢脱して、日午正に三更。世を擧つて渾べて夢の如し、幾か能く此の情を醒す。霜花道骨を堅

- ① 當陽とは分明の義なり。
- ② 清淨界とは佛淨土に同じ。
- ③ 踢脱とは踢は急遽なる貌にいふ字なり、急速に解脫するの意。
- ④ 形山の寶とは、色身形殼の中に法身の至寶の存在するをいふ、僧肇の寶藏論に「天地の内、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す」と見えたり、碧巖第四十二則に出づ。
- ⑤ 普照國師年譜、寛文二年の條に「侍者惟一、華嚴を血書して晝夜に經を禮す云々」と見えたり。
- ⑥ 老子第一章に「無名は天地の

うし、羅月眉を啓いて明かなり。但だ惜む。形山の寶、豈に世上の榮を貪らんや。蓬萊偶々錫を寄せ、和氣平生を暢ぶ。聊か安閑の法を得て、頓に幻化の聲を消す。福慧果して圓滿、乾坤掌上に平なり。言はずして天下信じ、沙界縱横に任す。

惟一侍者、華嚴經を血書するに示す

千差の路を坐斷して、儼然として一に坦平。脚跟實地を踏む、豈に更に虚聲を聽かんや。萬法皆幻の如し、一眞亦強ひて名く。無名は天地の始め、觸處自ら現成。現成の物を識得せば、人天汝を輕んせず。乾坤同一體、何れの處か情に關す可き。榮辱三春の夢、興亡一瞬に傾く。心心間斷無く、念念自ら圓明。滴血經海と成つて、華嚴界上に行く。

- ① 始め、有名は萬物の母」と見ゆ。
- ② 僧肇の涅槃無名論に「天地と我と同根、萬物と我と一體」の語あり、碧巖第二十則にあり。
- ③ 華嚴とは、美麗なる花にて玉臺を莊嚴する意にて、佛徳の圓滿具備せるに譬へたる語なり。

歌

十二時辰の歌、寶誌公の韻を用ふ

平旦寅、割出す當人の清淨身。心境兩ながら忘じて聖寂無し、拈じ來れば手に信せて是れ家珍。相に着せず迷津を啓く、觸處分明是れ塵にあらす。古に亘り今に彌りて活潑、由來假に非ず亦真に非ず。

日出卯、一點圓明巧巧に非ず。樂破す閻浮の八萬州、佛魔頓に盡く誰か來つて撓す。赤條條了せざる無し、直者は直く兮。拗者は拗なり。法法頭頭自性空、原我相無し奚ぞ憂惱せん。

食時辰、當體現前す妙法身。日用尋常の淡粥飯、何ぞ須ひん更に蓋辛を著くるを要すること。平等の見疎親没す、切に忌む從前我人に着すること。一たび源頭を錯まれば千萬里、招回未だ免れず幾埃塵。

禺中巳、亘赫圓明にして至らざる無し。炤徹す沙を算ふ没量の人、頓に實相を空じて文義を離る。死生を了して一字無し、明明に觀露す是非

是。我無く人無く去來無し、大千沙界吾が使と爲す。

日南午、突出す。蘊山の一大寶。智者は山に到つて寶を得て回る、資生淨物貧苦を賑はす。迷ふは自ら迷ひ悟るは自ら悟る、雲開け雲合す朝還た暮。等間に踏斷す。兩頭の關、生死去來一路に歸す。

日昧未、虚空を爛嚼して味義無し。舌頭を咬破して飽くまで休せず、縦横舒卷。西來意。口に信せて談す何の諱む所ぞ、人間天上吾が止に非ず。縁に隨つて偶々寄る。古灘頭、錦鱗を釣り得て自ら棄てず。

晡時申、本來無物貧を知らず。寒山幾幅か暫く知己、雲影淡濃幻假眞。外に望むこと勿し自ら神を全うす、頑石團圓として隣を作すに堪へたり。咳唾一聲皆點首す、眸を凝せば何れの處か同人ならざる。

日入酉、寂滅須臾長且つ久。相を離れ名を離れ古今を離る、詎ぞ聞かん虚しく。曹山の酒を設くることを。未だ放逸せず何ぞ守ることを須ひん、看破せば從前奚の有所ぞ。突出す本來の鐵臉皮、無生界内團圓として走る。

黃昏戌、萬別千差一室に歸す。坐臥空空爲す所無し、身を翻せば覺

①寶誌、又保誌に作る、支那金城の人、梁の天監十三年に寂す、壽凡九十七。景德傳燈錄に大乘讚十首、十二時頌、十四科頌等を收む。

②平旦はもとの寅の刻の異名、寅の刻は今の午前四時頃なり。

③日出卯は今の午前六時頃なり。

④拗は曲るなり。

⑤食時辰は今の午前八時頃なり。

⑥禺中巳は今の午前十時頃なり。

⑦日南午は今の午前十二時頃なり。

⑧蘊山の一大寶とは、形山の一寶に同じ。

⑨兩頭の關とは迷悟の兩頭の關なり。

⑩日昧未は今の午後二時頃なり。

⑪西來意とは達磨西來、直指人心見性成佛の活意なり。

⑫古灘頭とは新黃檗に譬ふ、但し底意は自分の處なり、錦鱗は英靈の衲子なむ。

⑬晡時申は今の午後四時頃なり。

⑭什門の四哲の一人、道生法師、虎丘山に隱れて涅槃經を講ぜしに、頑石皆點頭せしといへる故事なり。

⑮日入酉は今の午後六時頃。

⑯曹山の酒とは景德傳燈錄第十卷、曹山本寂の傳に、僧清鏡問ふ、某甲孤貧、乞ふ飯糲濟せ

る故事なり。

⑰看破せば從前奚の有所ぞ。突出す本來の鐵臉皮、無生界内團圓として走る。

⑱黃昏戌、萬別千差一室に歸す。坐臥空空爲す所無し、身を翻せば覺

えす東方日あり。鳥關關蟲唧唧、一部の眞經幾點の漆ぞ。動着すれば、
毫端も大千を隔つ、未だ萌さず一念の波羅蜜。

人定亥、夢に靈山に到つて歸つて疲息す。名勝に耽着して夢遊長し、
無想の主翁今何くにか在る。破砂盆誰か替り代る、東擲西抛胡ぞ聖礙せ
ん。返炤すれば個の中無一物、空花影を露して徒に憎愛す。

夜半子、一夢生無し曷ぞ死有らん。嘆するに堪へたり夢中に夢を説く
人、何ぞ曾て契着せん離言の字。玄中の玄格外の事、非を去却し今是を
翻却す。暗謝し明來つて互に奪凌す、眞空實相誰か試むるに堪へんや。

鶏鳴丑、一聲啼き破つて長に悠久。空色堆頭片誠を露す、追尋すれ
ば特地に鳥何か有る。頭を没却し手を伸出す、把住放行還つて老朽。饒ひ
伊能く十二時を轉すれども、争か如かん虚空の口を塞殺するに。

茅を結ぶ歌
茅居好し茅居好し、茅居素静にして煩惱無し。家の豊儉に随つて樂し
窮り無し、節槩の風情何れの處にか討ねん。松微吟して幽草を動かす、
天然一段の妙嘉藻。彈せず濁世繁華の夢、但だ惜しむ光陰無價の寶。美

少年老倒を咲ふ、老倒徧く能く懷抱を開く。眼乾坤に慄いて古今を空じ、
胷一帶を流して淨うして歸ふが如し。常に無事にして間眠早く、柴門掩は
ざれども雲來り鎖す。夢に遊ぶ東土と西天と、淨穢踏翻して幾ど絶倒す。
忽ち惺惺として光浩浩たり、斗室門開いて大道に通す。寂照圓明にして
缺虧没し、果然として蓬萊島に勝れり。

磊落の歌

没量の漢莽鹵の人、端無く西に没し又東に昇る。礫岫潭中瘦影を忘れ、
扶桑添へ得たり一開の身。有る時は喜び有る時は嘆る、惹き得たり娘生
滿面の塵。凡聖位中收むれども住まらず、驢頭馬臉也た天真。徳徳にあら
ず仁仁に非ず、殺活縦横妙神に入る。逆順圓通にして罣礙無し、一毫頭上
萬年の春。住に住無く言唯だ新なり、抖擻す衣下作家の珍。何開いて平
等にして高下無し、賑濟す。玲瓏たる徹骨の貧。非常の法を準繩と爲す、
落落たる風光陳ぶ可からず。亂草場中強ひて主と爲る、任教あれ四海自
ら來賓することを。

無用の歌

よ、師曰く、鏡開梨近前來、
鏡近前す、師曰く、泉州自家
酒三盞、猶ほ道ふ未だ唇を沾
さす」とあるをいふなり。
② 黄昏戌は今の午後八時頃な
り。

③ 關關とは鳥の鳴く聲にいふ。
詩の國風關雎の章に「關關た
る雉鳩」とあり。
④ 信心銘に「毫釐も差有れば、
天地懸隔す」と見ゆ。
⑤ 波羅蜜は到彼岸と譯す、悟り
の義なり。

⑥ 人定亥は今の午後十時頃な
り。
⑦ 破砂盆とは破れたる砂の盛り
たる盆の意ならん、極く無雜
作なる義か、密庵成傑の語な
り。應庵一日問ふ、如何なる
か是れ正法眼と、密庵答へて
曰く、破砂盆と。蓋し正法眼
を滅却せしものが、格外の傑
答といふべし。

⑧ 夜半子は今の午後十二時頃な
り。
⑨ 景德傳燈錄第十道州從諗の傳
に「僧問ふ、如何なるか是れ
玄中の玄、師云く、汝玄にし
來ること多少時ぞや、僧云く、
之を玄にすること久し、師云
く、聞梨若し老僧に遇はずん
ば、幾んど玄殺せらる」と見
えたり。

⑩ 雞鳴丑は今の午前二時頃な
り。
⑪ 古尊宿語錄第十三、趙州眞際
禪師語錄に「問ふ、十二時中
如何が用心せん、師云く、爾
は十二時に使はれ、老僧は十
二時を使ひ得たり、爾那箇の
時を問ふ」と見えたり。
⑫ 結茅とはかやをむすぶにて、
茅屋を造ることなり。
⑬ 簡槩とは簡操の義。
⑭ 妙嘉藻は善き文章なり。
⑮ 斗室とは方丈の笏室なり。

無用の人は天真に任す、時に随つて屈し也た時に随つて伸ぶ。幾度か雪霜傲骨を鏗ち、一番の風月一番新なり。幻化の景は却つて眞に非ず、造物私無うして妙神に入る。蝴蝶夢中に隻眼を開き、百花叢裡に身を沾さず。恒に返照す本来の人、出沒奚ぞ曾て點塵を惹かん。五濁劫中悲願切に、千華臺上能仁に捧ぐ。喜ぶ可き無し何の眞か有らん、徹見す本来無我の人。一天淨潔にして空有を超え、徧體の風光假眞を融す。

古稀の歌

壽に着せず祿を干めず、太和の風雅四時足る。無爲無事天真を樂しみ、甘つて清閑を守つて惟だ我れ獨りす。山は自ら青く水は自ら緑に、萬象森羅同一幅。倏忽として天は開く。五老の圖、蓬萊の峯は獻す喃喃の祝。數樹の梅幾叢の竹、一味清幽巖谷に供す。重重たる瑞氣東西を遠り、片片たる白雲夜共に宿す。心の欲するに従つて拘束無く、時清く道泰にして一陽復る。正氣瀾漫たり。四大洲、果熟し香飄る六十六、松は蒼蒼たり花は簇簇たり。道は存す林下數間の屋、窮通壽夭自ら天然、本来眞の面目を味さす。舊時の路は已に復ることを忘れ、人をして萬里於穆を嘆せしむ。頓に

① 磊落とは度量の宏大にして細事に拘はらざる義。
② 金剛經に「是の法平等にして高下あることなし、是れを阿耨多羅三藐三菩提と名づく」と見えたり。
③ 鈴鐺とは、行くに正しからざること。
④ 莊子逍遙遊篇に「今子の言、大にして用無し、衆同じく去る所なり、云々。今子大樹あり、其の用無きを患へば、何ぞ之を無何有の椰廣莫の野に樹みざる」と見えたり。
⑤ 昔照國師年譜に「百花叢裏に過ぎて、一葉身を沾さず」と見えたり。
⑥ 五濁とは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五なり。阿彌陀經、俱舍論等に出づ。
⑦ 昔照國師年譜寛文元年十一月の條に、「是の目台山の兩序齋

壽相を空じて思議せず、南北東西同一穀。

丈室落成の歌

安樂の節太和の天、正に是れ人間の太福田。金剛の眞種子を著得せば、花開き果を結んで三千に遍し。草莽を刪り法筵を開く、丈室の落成豈に偶然ならんや。不二門中萬象を昭し、法界を收羅して廣きこと無邊。師子は吼ゆ萬松の巔、異口同音に聖賢を祝す。道泰く時豊にして家國瑞く、仁風德澤林泉に動く。般若を演じ金仙を禮し、一念圓明にして後先に耀く。無位の眞人赤洒洒、門頭戸底風顛を掣く。主中の主玄中の玄、由來千聖相傳へず。一聲の因地自ら端的、瓊樓百寶の蓮を超出し、名狀に非ず言詮を離る。毘耶此に到つて宣ぶること能はず、請ふ君試みに。威音叟に問へ、必竟如何が一言を決せん。口を開かば恐らくは三十棒ならしめん、逸巡として首を回さば更に鞭を加へん。聲を收め氣を斂めて元本に歸し、把住すれば大千枕を同じうして眠る。是の如きの撐持、滲漏無し、流傳の勳業萬斯年。

牛頭梅檀瑞相の歌

并に引

を營んで慶を申ぶ、師古稀の歌を作つて以て答ふ」と見えたり。
① 睡陽の五老あり、今之を詳にせず。白居易、晩に香山居士と號し、常に胡果等と燕樂す、皆高年にして仕へざる者、人之を慕ふて繪いて九老の圖となす、是れ老人圖なり。禮記の曲禮に「七十を老といふ」と見え、同王制に「七十國に杖つく」と見えたり。
② 四大洲とは南閩浮提、西羅耶尼、北鬱單越、東弗于逮の四洲なり、即ち古の世界なり。天長元年九月六十六國二島と定まり、明治維新の時に及べり。
③ 金剛經の壽相なり、法身はもと壽命の相を離れたり。
④ 丈室は維摩居士の方丈の室より來る。
⑤ 無位の眞人とは本来具有の眞

露香長者、優鉢羅華を善財童子に示して云く、「摩羅耶山に栴檀香を出す、名けて牛頭と曰ふ。若し以て身に塗らば、設ひ火坑に入るとも、火も焼くこと能はず」と。又云く、「赤栴檀は牛首峯に出づ、峰を以て名を得たり、以て寒症の病を治す可し。故に國人の重んずる所良に以有るなり。」
 茲に崎中の信士に係る津田又左衛門、三十年前、其の國に往いて之を得、諸を蘊んで以て來る、知る者有ること無し。前歲適々唐人至る、善く能く減塑す、此の香を出して觀佛を雕成す。寶相嚴麗、瞻禮咸希有と嘆す。更に餘る、逸然上座之を求め、依つて一尊を雕し、送つて老僧に上り、隨身奉供せしむ。嘆、東西相去ること數萬里、奚の縁の感する所か、此の瑞應を得たる。加ふるに妙手の莊嚴を以てし、相好善を盡し美を盡す。夫の三平の瑞相、同渡の祖圖と、並びに三瑞應の吉と作す。一會儼然、永く萬福の家寶と爲す。庶はくは百千年後、一瞻一禮、福慧兩ながら全し。其の功德曷ぞ思議す可き者ならん哉、遂に三瑞の歌を作り、以て之を識す。

也太奇也太奇、天然の三瑞斯の時に會す。東西程賦するに幾萬里ぞ、應感機縁思ふ可からず。牛頭没し佛頭照く、頓に煩惱を空じて即ち菩提。

實主人公なり、臨濟錄に出づ。眞人の語は莊子の太宗師に出づ。
 ②主中の主とは寶鏡三昧に出づ、又臨濟宗四寶主の一なり、主は本分を指す。
 ③毘耶とは維摩詰を指す、維摩詰は毘耶離城中の長者なるが故なり。
 ④威音王とは威音王佛をいふ、過去無數劫の佛なり、本來の主人公に譬ふ。
 ⑤滲漏とは八成にして未だ十成ならず、機智情境滲漏偏枯にして無礙圓通ならざるなり、洞山に三滲漏の語あり。
 ⑥優鉢羅華とは、青花と譯す、その花赤白の二色あり、蓮花に似てその花小さく、葉の形狭くして長く、上の方にて尖れりと。
 ⑦摩羅耶とは詳しくは摩利伽羅耶といふ、其の山は南天竺の

一瞻一禮三昧を成す、正信に歸依すれば悟迷に徹す。老いて何の幸ぞ斯の期に逢ふ、白頭光耀す。五須彌。當陽に點出す人天の眼、并せて太和般若の基と作す。非常の相過量の儀、今朝現するや思議し回し。祥海國に徴して千古を頌し、信當人に感じて自ら欺かず。見無見にして狐疑を絶す、體用全く彰る若個か知る。西没東昇二致無く、行藏取舍更に誰にか由る。作無作爲無爲、名跡を掃除して眞規を露す。頓に黃檗の多子無きことを明めば、觸目千差也た宜しきに合ふ。

菊に對する歌

人老に垂んとして天復た秋、眼底の黃花孰れか放收せん。白首閑に行いて、晩節を歌ひ、儼然微笑して新愁を解く。秋光好し却つて留め難

境、摩利伽羅耶國の南界に在り、山中に白栴檀木多し。
 ①栴檀は外國の香木なり、又藥用となす、白檀は熱病を治し、赤檀は風腫を去るといふ。
 ②逸然、諱は性融、浪雪庵と號す。明の人なり、正保元年に渡來し、長崎興福寺に住す、晝を善くす。寛文八年七月十四日寂す、年六十七。
 ③三平の瑞相とは閩の漳州三平山にその開山唐の義忠禪師その境に楡樹を植ふたり、九百餘年にして枝幹盡く枯る。清順治六年隱元大師の法弟眞信和尚、その殿宇を重興せしときその樹を伐り、釋迦牟尼佛三十餘像を刻せしむ。隱元大師東渡の後、欽台の許公、此の瑞像を贈れり、隱元大師その贊を作れり。祖圖は欽台許公の爲に、その贊を題せられたる列祖圖なるべし。

④也太奇也太奇とは、いとめづらしき義、洞山良价の無情說法の偈に見ゆ。
 ⑤程も賦も共にはかる意味に用ひらる、はかるなり。
 ⑥五須彌とは須彌山の量に五倍せりとの義なり。觀無量壽經第九佛身觀に「眉間の白毫、右旋轉すること五須彌山の如し」とあり。同智者大師の疏に「須彌山の擧高三百三十六萬里、縱廣亦爾り、彼の佛の毫相此に過ぐるること五倍」と見たり。須彌山は北面は黃金、東は銀、南は吠瑠璃(青色寶)、西は頗胝迦寶(赤色の水精)の四寶を以て體とすといふ。
 ⑦韓魏公、北門に在り、九日に諸僚佐を燕す、詩有り云く、「差ちず老圃秋客の淡きこと、且つ看る寒花晩節の香しきこと」と、その風霜掃落

きも、離邊の風景、恣に悠悠たり。細にみて却つて霜に傲るの志有り、覺えず林間一段の幽。① 隱逸の最高流を尙び、淡淡たる清馨獨り自由す。縦ひ兩輪をして高遠に炤さしむるも、素心淨潔空に對して酬いん。名謂を離れて却つて憂無く、夢境の繁華盡く放休す。惟だ個の中の清意味を得ば、更に此の外に於て復た何をか求めん。

竹を種うる歌

其の志を堅うし其の心を虚しうす、日常竹を種ゑて自ら林を成す。枝枝の秀氣天澤を承け、節節の文明古今に播く。微風和雅の音を動かし、葉葉の青標風吟を引く。雪龍鍾を覆うて片玉を掛け、日疎影を搖かして千金を浪たす。② 三徑友は暢ぶ胸襟の眉、秀を開いて茂り俯す群陰の操。節霜を凌いで千古に勁く、名君子を標して聖賢欽しむ。

の時に盛なるを以て晩節を賞するなり。
① 隱逸とは易に「王侯に事へず、其の事を高尙にす」と見えたり、隱逸高逸の義なり。

② 龍鍾は竹の名。
③ 蔣開、舍中の竹下に三徑を開く、羊伸、表伸の徒あり、之と遊ぶ。三徑は隱逸者、又は挂冠せし人の門庭なり。

國譯黃檗和尚太和集終

黃檗和尚太和集

侍者 性性 激派 全編

萬治三年庚子十二月十八日承

上令旨所賜太和田爲黃檗山萬福禪寺於

寛文元年八月二十九日進山門云一錫臨筵千山稽首法法獻誠拈來信手黃檗安名不忘

本有聊興一念無絲慈永爲千秋不請友老僧到這裡建立法幢且止只如進門一句作廢生

道萬福門開日日新時豐道泰長悠久便進至

佛殿基云乾坤蓋載萬古如在日月炤臨光明廣大一片坦平縱橫無礙卓立個中山靈有待

諸人還見麼一莖草上現瓊樓三世如來俱頂戴至

方丈云六牕明淨一室虛玄拶入個中一會儼然轟轟烈烈白日青天點凡成聖轉愚作賢進

開隻眼耀後光前背鼻盧都談不二流轉燥辣起風顛起風顛且止今日新開黃檗又作廢生

道一棒破荒千古振檗山現瑞萬斯年

初到檗山 偶成

新開黃檗壯禪基正脈流傳海外奇有志英靈須著眼苦心道義共撐持法身不礙莊嚴相勝跡何妨出現時劣削峰頭觀慧日一莖草上挂須彌掀翻岐路險崖句縱奪希常過量機大道

黃檗和尚太和集

坦然成正果，不孤塵世好男兒。

又

聊伸隻手破天荒，莖草拈來當法幢。一片太和溫道義，千秋黃檗振宗綱。掀翻陸地波濤湧，收放紅爐燄上霜。盡謂通身無影像，誰知徧界不曾藏。偶來卓立高峯頂，睨看大千空自忙。

題雙鶴亭 有引

歲庚子仲冬，承上令受太和田，為黃檗萬福禪寺基。越明年春，再遊取向，仰望松際，有雙白鶴翹焉，更上二十餘武，其鶴翔鳴，次嶺松頂而立，仍陟高峯絕頂，大觀勝槩，逾時而下，鶴猶在松，嘆曰：奇哉奇哉！此日為我前導，點其勝跡，倘建刹時，當以此為驗。即紀遊贈近衛大納言公，有鶴鳴松頂，招賢侶之句。嗣後龍溪回，令僧仲秋念日起工，於閏八月二十九日進山，次早登亭遠眺，大暢胸襟。江山萬頃，翠靄千祥，盡在當人一瞬，可謂千古風光殊勝事。一天靈彩印文中，侍僧謂前白鶴現瑞，即此處當顏之雙鶴亭可也。余唯唯稱善，仍說偈以識。

空亭未現復何知，白鶴翹松示悟期。老眼豁開雙翠壁，孤筇卓立片靈芝。天然雅趣風光別，曠世遶觀格外奇。此日功成聊憩錫，何羅秀氣正當時。

又

亭開微見歲寒心，霜雪滿頭亦喜吟。老得古梅堪共友，靜思白鶴也知音。峰高忽吐寥天月，葉落平鋪徧地金。閒把藤條聊卓朔，萬緣放下絕追尋。

示瑞光院

勞生幻世轉飄蓬，百歲渾成一夢中。金玉到頭將不去，兒孫滿眼孰同終。情關打破異常樂，慧性圓明業頓空。倏忽心花開爛熳，何愁結果不全功。

出山釋迦讚

埋頭雪嶺豈尋常，為道忘軀世莫量。不是一番徹骨後，如何做得法中王。

與松浦肥前守書

夫半偈撐持法界，永劫無窮。成住壞空，安可比耳。一心護惜宗門，千生不昧。幻花露影，豈能惑哉。是以金剛種子，百煉愈光輝。藥汞銀禪，一煅便逗漏。驗在當人，難逃至鑑。老僧憶二十年前，在唐重興黃檗，肯首疏云：跨海非常木，撐天必大材。東君如有意，吹入我門來。嗣後工竣，應扶桑請。迄今又閱八春秋矣。茲蒙上令開山，草創此地，仍名黃檗。始覺前偈，應驗于此。日倘來數萬里之木，為梁為棟，豈可思議也耶。又得居士護送到此，可謂天工人力，兩全其美。今古罕聞。舉世希有，誠不可思議之境。非凡小庸庸之所知也。然則不思議之大材，必有不思議之大用以顯不思議之大功。成不思議之大事。功不浪施，福歸有地。他日奏成，廣聚龍象，正法流通。普利日域，則護送之功，有所得矣。老僧德渺福微，但說一偈，兩全黃檗。單提柳栗，西沒東涌。可思議耶，不可思議耶。或試問于黃檗，黃檗亦不自知。適管城子在傍，忍俊不禁。聊答半偈，圓滿勝事云：二十年前用不盡，飄來海島復何疑。毫端逗漏無多子，突出和山第一枝。

性印信士同獨健劉通事舍西國大木至書示

大材必大用，美器亦非常。一柱空王殿，功勳莫可量。因緣出現處，木石自鏗鏘。相去幾萬里，何期到此方。莫非夙願力，共豎寶蓮坊。不著有爲福，當人只自強。世間盛德業，事事已全彰。藥軸添靈彩，千秋詎可忘。

又

靈山無鎖夢雲開，放出撐天拄地來。一鑿空門千古振，不孤格外棟梁才。

又

昔年筆底夢花開，點醒鷺峯出格才。此際聊舒正法眼，儼然一會也奇哉。

洛中九十翁慶會

九十翁翁慶古稀，相看盡是白頭兒。頓忘壽相無增減，千載同風會一巵。

文殊普賢同瞻讚

對談妙道忘卻獅象，行解相應天下榜。機利己利人成一合相，舒卷乾坤無二致。單提如意福難量。

龐居士靈照女讚

一法空皆萬法空，家珍盡付急流中。不因靈女營生活，龐老如何立上風。

觀音讚

大悲度苦現全身，世上何人見得親。惟有當機高著眼，一回瞻禮一天真。

雙鶴亭示松平若州守

點塵飛不到，雙鶴占機先。格外聊舒眼，胸流徧大千。

井上信士求薦考心覺妣妙春

一言合大道，心覺便超昇。行藏無罣礙，何處不通津。孝道感天地，心花發妙春。點開清淨眼，不昧本來人。直指無回互，悄然自此辰。覺靈悟厥旨，徹證妙天真。

觀音讚

獨坐垂楊下，自觀觀世音。慈心能與樂，悲願渡迷津。一瞻一禮一回顧，徹見本來無二人。

達磨讚

不識對梁王，淒淒暗渡江。去來無罣礙，面壁亦何妨。直至神光斷臂後，浪傳五葉徧諸方。

又

突出嘴臉，流露半身。無端西沒東湧，知他是假是真。眨得眼來千萬里，回光返照獨全神。

洛中信士送古梅樹至

粥老倚巖隈，骨瘦若寒梅。纖塵渾不染，曾占百花魁。微吟驚殘雪，吟風獨露腮。清幽徧法界，脫俗也奇哉。

申景禪人送菩提樹至

菩提既有樹，的的西來。五葉臺中土，歸根共一枚。苟知原不二，詎可不栽培。花發三春麗，香飄九品臺。丈夫須猛省，那更又疑猜。苦口唯黃蘗，無端吼似雷。知音如錯過，令我嘆時哉。

登雙鶴亭四首

一度登亭一解懷，乾坤何意待西來。寒梅雪鶴龐眉叟，偶爾團圓搗不開。
一度登亭一展眉，江山萬頃布希奇。淡濃隱約難情狀，舉筆三思不易題。
一度登亭一破顏，陰晴顯煥剎那間。杖頭眼豁幻花夢，萬竅怒號也等閒。
一度登亭一度新凝眸，何處不天真。山環水遠村村供，併作太和萬劫春。

贈別妻木彥右衛門回江戶

道義圓明昭日月，世情濃淡等空華。返觀本有無多子，生死岸頭路不差。此日重光臨萬福，聊吟半偈當杯茶。

門頭晚眺

閒坐庭前看晚山，半啣落日映江間。空餘返照光天德，彩氣臨門壯老顏。

示惟大禪者

禪者善調羹，頗能愜老情。二時無失候，一味卻精盈。日用事如法，心華發至誠。行門開八萬，福足自圓明。

示道榮信士

乾坤幻化夢，業海浪滔滔。六趣輪無息，悲哉奈若何。幸有西方聖，一心念汝曹。長年垂隻手，直接苦婆娑。智者三思本，翻身出愛河。狂愚癡莽鹵，逐浪又隨波。一醉利名酒，酣酣昧自他。一落繁華室，我山萬丈高。福緣逐日減，業累轉增多。縱有拔山力，曷能動一毫。丈夫亟猛省，豈可自蹉跎。本來青白眼，那更混塵勞。須秉金剛劍，剖出蘊中魔。德澤馨格外，真風扇太和。珍重道榮

子，此行爲甚麼，寵辱三更夢，願期一剎那。虛名漫世界，若個挂烟蘿。返照娘生面，不孤老雪陀。可吹無孔笛，拍拍應狂歌。真個能如是，千秋不可磨。

妻木彥右衛門求薦考朴英居士妣梅室妙薰孺人

三界一夢宅，業識浪無休。福大昇天府，業多汨下流。杖頭開正眼，直指上蓮舟。淳風亘萬古，朴道振千秋。梅室虛生白，靈然壯祖猷。

觀雪

由來眼廓不沾塵，獨占閻浮第一貧。閒臥空亭赤洒洒，飄身不覺萬山銀。

栽梅

老來無事任天真，一鑿生涯混剝塵。纔種梅花又惹雪，雖然骨瘦也精神。

示林元實信士

搜羅萬卷書容易，打徹源頭放下難。得失窮通皆造化，榮枯夢幻不相干。風波歷盡心平坦，歲月推移性地安。海外青山山外海，羨君一片鐵心肝。

七句誕日自適

白雪堆頭兩鬢絲，峰高煦日上遲遲。渾天理氣運無息，蹈海心真不可移。鐵幹凌霜堅志節，老松帶甲長威儀。孤光閃爍龍蛇動，葉葉濤呼慶此時。

其二

中華咸慶古來稀，蓬島古稀未足奇。百歲無知猶赤子，朝聞夕死勝願期。一心淨潔超塵剎，片

念圓明徹悟迷不涉春秋幻化夢撞頭磕額盡龐眉

其三

未出娘胎全體現降晨獨露半邊腮人天見相咸歸敬龍象知機俱嘆哉歷盡七旬幻化夢重增萬福面門開拈花一會逢斯日奕葉香飄徧九垓

其四

天然一會也奇哉特地全彰格外材眼爍三千光日月舌翻一片猛風雷東西坐斷無回互今古頓空絕去來以此祝人兼自祝大家共住碧蓮臺

復獨健徒書

老僧自入太和以來面門與高峯同其突兀鼻孔愈更遼天而人情世務不待遣而忘矣忽然閒睡峰頂願望西方又不覺倏起唐國故舊之思令人不忍聞之事感愧交懷抑不能已也嗟嗟生此末運莫非宿業所成逆順境緣消歸自己則無怨尤之嘆公等獨居安閒之地自當努力造證斯道為急務餘者盡是夢幻空花何須眷戀切不可錯過時光埋卻本來面目是老僧之所望也果是丈夫漢子直下便行孰敢擱當他日摸著老僧鼻孔愈見通風其慶快當何如矣草草布謝不盡

復毓楚何信士書

蹈海老漢人情濃淡早已付之東流具眼禪和窺覷無門而況塵勞中業識茫茫豈能擬議者哉邇者妄動一念携杖卓立太和峯之頂四表具觀惹得鶴鹿獻瑞人天仰祝如雲如雨如

風如雷如星如月如稻麻粟葦轟轟烈烈震動山川讚者祝者笑者吒者吟者呵者聲喧九重正眼看來逗漏不少似添面門之醜遮羞無地矣正躊躇之間忽報來翰讀之不覺翻轉舊時面目抑見昔日一會儼然如故其慶快可思議者哉當此布復

薦長崎雙道婆

崎中雙道婆千里謁頭陀淨念無餘欠誠心不可磨別來將七白道況意如何近聞西歸信令人動輓歌靈知超彼岸決不墮塵勞我說偈如是功成一刹那

馬淵性益求薦母妙仁

人生幻化夢夢裡轉留連福大超諸有業盈墮九淵昇沈幾萬劫何時得悄然孝誠撼大地念正理無偏直入太和室拜求萬福前乞法薦慈氏救拔急如絃孝真薦必克定超九品蓮以此報慈德即刻契金仙雖然仁無敵也須腦後鞭

示尼性蓮

心淨潔如蓮性明圓似鏡不昧本來人觀體超凡聖看破死生關何曾有欠剩善人解返炤摧邪而入正佛祖不汝欺天人咸歸敬

復道詮劉信士書

意者今歲初入太和事事未備雖則大誕不必如何若何但入境隨俗安然為慶忽聖壽與福福濟兼信士等著人般般致祝仍舊突出昔時面門一任揀抹一上所謂通身無影象徧界不曾藏添花獻彩無不可矣前者蒙舍西國大木嘆誦未已今承慶祝之誠其功德重重曷可

思議者哉。蓋此時際，頗有利於物者，可為則為，切不可錯過勝緣。徒稱丈夫之名，吾亦老矣。風燭不定，每思放生為急務。意欲慧命與生命永壽無疆，乃稱本懷。苟能體吾意，行吾事，生生不盡，放放無窮，則祝國福民，報恩植福，盡在於斯。布謝不盡，何如何如。

示性堅信士

繁華蓋世，揔成空。若個丈夫，不被蒙花，落花開夢，眼裏香飄，香盡幻光中。一絲弗挂，離塵網，萬事無干，出樊籠，聲色堆頭，看得破，是名格外主人翁。

與松平土佐守書

標草為利，非手眼親切，不能也。撐持法門，非材用弘大，難支矣。是以大人成，大器，大機得，大用。今見乎此日，則速成之功，可期矣。春間意欲葢茅峯頂，吟風嘯月，自娛以酬輸地之德而已。後蒙諸居士樂助，結屋之資，誠不敢虛費。則有建方丈之舉，又慮不能全功。正躊躇間，忽接華翰，有良材美木見惠，竊喜方丈之舉可成，其功德莫大無相之福，不可思議。所謂不謀而自至，不介而自親，合乎天然，豈人情之所能議哉。茲因使回，勒此布謝，不盡依依。

王振鵬所畫五百尊者朝觀音圖序

詳夫梵語阿羅漢，華云殺賊殺盡無明賊，以證不生不滅之果。遊戲三昧，天上人間，各展神異，誠莫可測。亦代佛揚化之一助也。忽遇振鵬王公，一筆收盡，卷而藏之。縱有無量神通，曷能為哉。信乎振鵬妙用，猶勝五百尊者者多矣。是以仁宗皇帝，錫孤雲之號，良有以也。然天子所重，非重孤雲之筆，誠貴尊者之妙道也。至我明太祖一匡天下，腥氣頓除，胡人失守，此卷落子田。

舍翁之手，一日持出易糧，柱史張公，以斗粟得之，嗟嗟不遇其時，賤固如是。賤時非賤孤雲之筆，誠帶累五百尊者不少矣。後值遊宦，點破張公乃寶之，寶時非寶孤雲之名，誠寶尊者之妙道也。吾親自開關以來，佛祖聖賢，天地萬物，榮枯得失，理素如是。豈獨孤雲尊者而已哉。然則奇蹟困於鹽車，伯樂一顧，日馳千里，大道屈於勢利，聖王一遇，天子師之，不以為貴。茲大明失守，胡虜縱橫，此卷又落於亂兵之手，其貴賤尊卑，又何如也。迄今三百餘載，東西得失，不知幾幾，所幸者不沒于水火，莫非尊者神通有驗歟。余遊扶桑，不意得之海外，其神遇道合，法屬相關。古今一揆，非偶然也。一展卷，神異萬狀，難以名言。始知孤雲之名不虛，而尊者之道，叵測非尊者莫顯。孤雲之大名，非孤雲孰知尊者之妙道，尊者孤雲，名實並稱，其貴賤尊卑，豈能擬議哉。真格外美器，法門大寶，可入觀音大士圓通之境，與夫大光明藏，并傳永永，而無窮者宜矣。

病中頌即心即佛因緣

即心即佛死太急，非心非佛下藥遲。大梅中毒卅餘載，病入膏肓不可醫。堪嘆昔日迷路者，又來個裡弄唇皮。浪談藥病人無數，累殺江西馬簸箕。

又占二偈

偶中病魔滅素神，面門不覺又沾塵。誠如破漏郎當屋，爭得風光舊日新。

又

得病始知幻化身，豁然觀破本元辰。瞿曇曾說病為藥，今日翻來調更新。

辛丑十一月二十日，本師福嚴老和尚訃音至，挂真云：此便是支那國杭州府崇德縣福嚴

堂上，傳曹溪正脈三十五世，費和尚全真，卷起也。纖塵不立，展開也。大地全彰，曾坐十大寶刹，說法三十餘年，爲人一片，直心直行，挽回紆曲良多。一條惡辣鉗鎚，收拾鱗龍不少。道滿四海，如龍若虎，大似江西馬老師，踏殺天下人無數。餘風直到海門東，驚得泥牛俱起舞。盡出金鳥出海門，光前耀後超今古。以茲用報我師恩，究竟未答一棒痕。虛空忽聽淚如雨，白浪滔天自吐吞。打濕娘生真面目，真誠徹骨逆兒孫。諸人還見麼，山僧如是舉揚，還當得酬恩一句麼。復云：大道存兮師益尊，法輪常轉一乾坤。正脈長流四大海，光明亘赫見師恩。便舉哀。

首七祭文

維寬文元年歲旅辛丑十一月庚子二十日，不肖徒某寓日本國山城州黃檗山萬福禪寺，爲前一日申刻，郵到支那國杭州府崇德縣福嚴堂上。本師費老和尚遺囑，并未後事寔一封，焚香跪讀，乃知本師以是年三月念九日未時示寂。越七日念有五日，謹以瓣香盃茗，致奠于丈室。昭告以文，曰：於戲我老和尚，生於大明神宗正盛之世，係玉融何氏巨族，早歲脫白本邑，鎮東三寶巖。年十九便知有宗門中事，遍參知識二十餘秋。宗教二說，莫不該通。末後謁密師翁，受惡辣鉗鎚，乃得了手。大事已畢，慶快生平。其受用安樂，無餘蘊矣。後師翁應金粟，再上省親，乃就西堂之職。逮翁應黃檗，亦從服勤。一日當堂付囑正法眼藏，嗣後隱于浦城馬峯院。乙酉冬應黃檗，首開爐舖，鉗鎚惡辣，鎔凡煨聖。一鎚之下，良有本也。某也不肖，首中其毒。迄今三十餘載，幾處申雪，難罄其懷。然則中毒之深，而解之不易也。昨聞訃至，且喜天下太平，昔日之冤，不待雪而自解矣。更所歉者，承召回二書，教誨諄諄，最親最切。微見婆心畢露，未得親面以快

師資之命，罪莫大焉。今也已證真常之果，無聲無臭，雖聖賢佛祖有所不知。況區區某小子乎，茲值首七之期，敬設純陀之供，奉獻靈前，少酬萬德。伏惟老和尚大寂光中，鑑某微忱，尚其鑒之。

聞福唐黃檗因事有感寄外護居士并警本山僧衆

槩山千古法幢聲實，徧覆諸方。正幹開關，始祖鴻休。罵賊名揚，斷際道滿。天下軒知，源遠流長。邇來天童重振濟道，豁然有光。吾師繼席，三載井井。有條有章，愧余莽鹵。相續門頭，戶底開張。力撐十七春秋，惹得兩鬢如霜。一旦因緣別離，杯渡直至扶桑。大擔慧公鼎首，慈悲一片柔腸。頑蠢無知，無賴成群。成黨爲殃，不尊道義。法化利圖，業識茫茫。愚者由來自用，焉知審勢行藏。浪費斷無，結局禍來莫怨蒼蒼。江淺魚蝦可掬，林深虎豹難當。我聞如是不軌，五內如焚。如傷水遠不濟，炎火天遙豈拒孤狼。全借始終法護，圓明正眼。金湯極力掃除，妖氛大道萬古全彰。

哭本師福嚴費老和尚

獅絃絕響在中華，撈得餘音到海涯。老大願王超法界，廣長舌相卷恒沙。雲收碧漢空生覺，葉落寒林玉吐花。愁殺杖藜無倚靠，一雙白眼對西霞。

又

吾師傑出最英華，奕葉芬芳徧海涯。撒手歸源成道果，吉祥而逝體金沙。粲然舍利僧中寶，亘赫名言錦上花。一片婆心澄碧漢，千秋道義挂煙霞。如何是佛，突出渾身骨。一飽乳香糜，圓明相滿月。

如何是法，動着活潑潑，拈來無多子，一生用不之。
如何是僧，白雪兩眉橫，老來無思算，日午喚三更。
如何是道，日常光浩浩，十字任縱橫，足下缺甚麼。
如何是禪，開口落半邊，一念未生時，全彰徧大千。

次董太宰軸韻

錫寄高峯日上遲，臥雲深處夢敲詩，牧童歌舞驚啼鳥，鶻醒南隄梅一枝。

壽參議乾菴陳檀越七十初度

天賦玉融叟，文章起世家，一朝宦夢破，歸隱舊桑麻，五桂常薰膝，齊眉紫玉花，人天咸仰祝，道義嘆唯嘉，大哉乾德備，妙用廣無涯，一軸壽蓬島，三山映彩霞，理明昭日月，筆老化龍蛇，海屋添籌日，瑤光篆寶華，從心兩互炤，稀有淨無瑕，聊捧東溟水，爛烹趙老茶，開懷三五盞，福履滿恒沙，載上庭花甲，江干待返查，來時全歲月，歸也定無差。

文殊讚

雲中現身，妙德如神，文不加點，分外天真，一卷心經常不離，未知等待付何人。

終七再祭

維寬文元年歲次辛丑臘月晦日，不肖徒某，謹以純陀之供，再奠于本師費老和尚覺靈之前，而告曰：嗚乎！我老和尚首開黃檗爐鞴，中興濟北之道，耀後光前，何其偉歟！末後撒手福嚴，坐斷千差，寂然解脫，有自來矣！世壽六十有九，法臘五十餘春，開法三十年，恢擴十大刹，師法森嚴，接人不倦，繼往開來，功勳固無極矣！其正眼圓明，青天白日，胸開四達，了無城府，號令人天，著著可法，棒頭得旨者，轟轟烈烈，句下脫落者，迥迥巍巍，乃至名公鉅卿，兒童灶婦，靡不服膺，染指宗門鼎盛，師道炳如，嚴寮宗統，千古龜鑑，禪林禮樂，全備於斯矣！蓋禮貴中節，行之有方，情切正真，感通幽顯，以正真之情，剖露師靈之前，必也俯鑒，以中節之禮，行於常寂之堂，斷無不格，中誠君子之所貴，常寂禱僧之所歸，得其源則無孟浪之弊，貴獲其本誠，有超俗之方，吾師兼而有之，行可以濟天下，言可以垂萬世，自我明以來，名寔中正，獨脫無二者，非吾師而誰歟！末後吉祥而逝，體雙林之遺旨，茶毘之後，舍利燦然，二百餘顆，緇素區分供養，則當年之流布天上人間者，似不異於今日也！不肖某，應緣海外，已經八載，莫視最後音容，不聞涅槃遺訓，抱恨終身，含羞無地，茲當終七之期，敬陳伊蒲之供，聊表寸忱，伏惟尚鑒。

臘月念九日，本師和尚圓七，即日安座云：濟道中興與未闌，如何撒手也無端，打翻花甲春三月，嚼碎紅爐鐵一團，位設草堂田地穩，名垂海國杖頭寬，圓通應感天真佛，不用安神神自安，神既安也，且道，即今在甚麼處，舉拂云：還見麼，常光瑞現靈機發，一會拈花又破顏，還有當機者麼，老倒憐兒不覺醜，和盤托出大家看，成群別踏春光裡，若個當機不自瞞，遂披吉服，禮拜歸方丈。

本師過七誦金剛經

電光泡影夢無端，圖報師恩再展看，怪道口門無個齒，金剛嚼碎又團圓。

又誦法華經

黃檗和尚太集

七軸蓮經一法華，剖開心印淨無瑕。和盤托出酬師德，狼藉香風遍海涯。

辛丑辭年

乾坤負我古猶今，我負乾坤空自吟。七十如愚渾歲月，多生習氣轉浮沈。者回坐斷孤峯頂，那更無端向外尋。最喜松濤鏗晚節，共彈一曲歲寒心。

壬寅元旦

洪鈞運轉歲華新，惟慕心香祝至仁。丈室乍開萬福泰，衡門不減四時春。喜無車馬喧靈谷，却有江山繞法身。年去年來幻化裡，日常終不昧天真。

又

無愧蒼蒼是我家，乾坤運泰慶年華。腳跟淨潔聊為主，眼目圓明豈逐邪。梅發南枝含正氣，日昇東海擁朝霞。微風吹醒堂前柳，待得鶯啼滿院花。

春日寄懷

一氣和風開黛臉，翻身鼻孔愈遶天。江山懸隔徒懷夢，唯對梅花共悄然。

又

列祖功勳寄向誰，海天空廓欲奚爲。神頭鬼臉消磨盡，十二峯巒又展眉。

又

世界未寧家國慮，禪心不一法門憂。事難方見金湯力，拽險扶危不計秋。

又

新開黃檗今猶古，舊種青松古到今。兩點無私開日月，炤臨千載歲寒心。

自叙

少時不學無術，一味杜田到老。幸得內無雜毒，身心空淨如掃。等閑抖擻皮囊，狼藉衣中至寶。信手拈來示人，聲光落落蓬島。寒山拍手呵呵，拾得幾乎絕倒。苟能直下承當，便是風顛種草。否則錯過此生，驢年夢見斯道。

觀音讚

獨坐磐石，慈念永真。一甌甘露，遍洒利塵。楊柳枝頭悲願切，却教大地盡回春。

彌勒負小兒過水圖

新春舉筆，事事堪克。偶逢布袋上人，必竟有何所得。背負少小孩兒，不覺腳跟打濕。勿忘兜率路頭，便是真正彌勒。

列祖圖序

西乾四七，眼橫鼻直。中華二三，寐語喃喃。惑亂天下，無有了期。正眼看來，電影空花。奚足爲珍，詰其本源。蓋因靈山老子，關頭不密。聊露枝花，以致頭陀咬破。無端承虛接响，以訛傳訛。相襲成風，直至如今。無人截斷，深可慨也。那更依樣畫貓兒，持來示余。致令忤心惡發，未免呵叱糊塗。一上累及東土，西方諸老面門。愈增醜態，罪我奚辭。雖然如是，返憶雲門老漢。一棒打殺，餓狗子吃貴圖。天下太平，掃潔源頭。知恩有地，余之逗漏。奚足云爲，但願智者達觀斯圖。頓悟其本，則圓明亘赫。淨潔無餘，樂莫大焉。以遂丈夫之志，終不隨波逐浪。他日拈條白棒，打殺雲門。

為釋迦老子雪屈一番敢保佛日重光道風益熾列祖常寂光中拍掌呵呵則不孤按圖得馬之功也

一山寧禪師贊 相國寺恩溪禪人請

祖承頑極愈添倔強無法為人觸著便棒有放有收無偏無黨宗開祖印白華逼來隨波逐浪褒貶踟躕原非兩樣末後無端動聖顏可為古今之標榜

示固心信士

仁智樂山水祖師契未萌頓空諸色相心月自圓明遇物則靈鑑隨緣利有情凡夫能返本天不汝輕本來無二致何壞復何成視之不可見名之豈能名唯餘深造者步步證無生珍重固心子日常須力行勿忘本有路沙界任縱橫

示啓文林居士

奉道不知道不知奉甚麼參禪不會禪莽鹵更堪憐學儒不識儒鄉愿賊何如三教既漏逗令人長嘆吁九流去不返何日得逢渠半瓢測東海一棒透虛空截斷千差路圓明徹夜珠天開太和臉法界一吾應坐臥乘風雅行藏無欠餘東西皆夢幻夢破樂無虞一段還鄉曲吹來慰道軀蒼蒼如有眼終不負區區

示日昌劉信士

本來無一字筆舌閣虛空對機無縫罅何處可通風有語非干涉無言大夢中有無俱坐斷八面盡玲瓏塵說熾然說心通道亦通揚眉超語默直指醒迷蒙觀破言前路譯傳始見功掀翻

格外句不負本來翁

青木民部求薦罷山成休信士

心心無二念念無二心心念渾一致圓明古到今正因該正果終不向外尋花發蓮池會香飄碧玉林以茲薦靈德剖出罷山金聊述偶為證名標上品箴

薦靈雲院信女

本寂超三際返觀無自他蓮開方寸裡香熟徧娑婆助道頻伽鳥安心極樂窩一彈無生曲慶快意如何

辛丑仲冬礫山慧首座專使慶誕兼請駕歸山不果作偈慰之

洪荒萬里一乾坤獨羨薰風撼海門奕葉芬芳擁法座氤氳瑞氣壯祇園無私撥轉天鈞令有力難消鐵棒痕不味九潭雲孕種掀翻海嶽始知恩

自叙

老倒杖藜跨海東不忘名質舊家風尋常運用事無別坐臥圓明方寸中圍遶人天增萬福大開手眼廓虛空逍遙蓬島奚拘碍徹見西來弗宰功

深尾庄兵衛求薦考了喜信士

生死由來幻昇沈曉復昏善哉能了業葉落自歸根八十六春夢空無一法存唯心常不昧炤徹本來源以此薦靈福頓超詎可論心花開馥郁果證是知恩

性公尼求薦嚴石見太守清閒居士

佛日流輝四海濱，杖頭指處絕纖塵。死生樂破烏何有，來去分明別假真。三十三春孝行滿，這回提起愈尖新。蓮花會上風光美，盡是清閑無事人。

薦御史津田平左衛門 孝子平六求

正氣奉天命，代巡壯帝畿。生民俱偃草，德化迅風馳。啓手無留戀，歸途春正肥。恰逢屆彼岸，微證夫何疑。說偈通靈性，頓超淨者機。圓明亘萬古，一會碧蓮池。

仲春念五日方丈上梁

拈來莖草卻鋒芒，到處爲標水月場。徹底大機堪大用，果然成棟又成梁。門開不二千差攝，法演無多莫可量。此日太和風雅振，礫山正脈永流長。

方丈上梁，且時陰翳，侍僧恐雨及時不便，亟催拜梁。老僧謂：時至自然光輝，稍停果驗，遂說偈識之。

新開丈室迅鋒芒，御苑翻成選佛場。莫道太和無手眼，遼天一撈愈風光。

示小川又左衛門

正信三思本，平心一自佗。檀門開六度，慈海不揚波。浩氣衝真主，脩身驅蘊魔。百年幻化夢，豈可自蹉跎。曾謁西來叟，胸開滿太和。礫山添翠茂，福德轉增高。四海誦玄化，功歸一刹那。日常能如是，不必問如何。

三月三日誦華嚴經畢

讀罷華嚴春未闌，白毫光耀兩眉間。悲心片片承知識，願海重重壯老顏。歷盡百城幻化境，頓

忘三昧徹空還，門開樓閣風光甚。勝似忙忙走萬山。

示水野源太夫

仁者興善事，愚人行惡道。惡極自滅身，幾人能到老。至善優天下，古今皆曰可。黑白兩分明，善擇是所寶。得之用弗窮，藏諸分外好。福德日彌新，慧光圓杲杲。決定信無疑，超群之種草。

虛樞禪德過訪

老衲心開解脫花，時時增長福無涯。薰風五度臨玄策，和氣三春間紫霞。潦倒不迷正法眼，英賢豈可混塵沙。香飄果熟人天慶，便是靈山一會家。

復示卓石信士

人生豪富之室，多被五欲之所籠罩。活埋丈夫之志，無一出離。真可慨也。如信士，茂年便覺無常迅速，正信此道，孜孜不退。唯願依此精進力，頻開佛知見，爲急務。不被塵勞所汨，萬中唯一二而已。甚美甚美，但信得及。晝參夜究，無間問忙。忽然因地一聲，佛知見現前。不從外得，了了自知。生死去來，千魔百怪，不能搖動。始知自證之驗，與夫龐老子把手並行，便信日用事無別。則不虛度此生，否則盡是流俗隊中算將去。與佛知見奚啻懸隔霄壤矣。何如。

語石禪人，求薦故考宗順信士

有子力參禪，薦超而必克。何須乞余言，而後成明德。觀破本來心，了然空卽色。死生夢幻中，夢破便超格。一撈鼻遼天，圓明無礙塞。觸處是菩提，靈然無不得。

季春望日，關梅巖居士過謁

梅巖誠信士來謁太和翁花柳春將暮江山日正紅善遊俱適趣到處盡同風會得個中旨歸家路路通

新山仁左衛門求薦故考昭心性月信士

世途見別各崢嶸直指西來路坦平托出昭心常不昧推開性月獨圓明三千塵夢即時斷六五春秋撒手行此日更求末後句靈然一拶證無生

老子讚 高力左近大夫求

大隱無知混閭閻如何騎犢過函關誰人一拶五千語玷汚面門只自謬

示松前志摩守

正氣鎮邊疆洪波海不揚功成而不宰德業始全彰返照本來物頓空莫可量死生事無惑萬慮盡消忘突出天中月炤人肝胆涼仁風偃四野草木俱生香格外求玄旨玉毫聊放光淨臨東海畔地久與天長

示老唐張振甫

踏斷孤岩頂上峯看來無異亦無同眼開不著繁花夢撼醒當人一瞬中
僧呈一紙師目訖云未透祖師關護行險崖路僧云某甲喫三十棒有分師云有棒不打這無血氣死漢僧云和尚莫向掌中弄死蛇好師大棒打出云且道是死是活
福嚴先大和尚小祥忌拈香云吾師德量廓虚空包裹乾坤不宰功直截為人三痛棒無私照物一輪紅滔滔法海洪流柱兀兀宗門大雅風此日涅槃初忌諱又添滴淚檠山中諸人還會

麼福嚴堂上春光盡太嶽峯前正脈通忤逆橫擔鐵柳栗觸翻鼻孔盡相同以此酬恩猶未足分身利利答無窮便燒香禮拜

示一峯居士

統攝乾坤力大開孔德容衛生如一子護國若雲從捧出中天日祿增億萬鍾英風彌八表一劍定先鋒生死無回互獨超蓋代功果能如是信直截勝猶龍

示津田道茂信士

前云一念一行無不成就所謂置之一處無事不辨今人作工夫心境雜亂不能歸一生死岸頭揔用不著正謂路多踏草不死豈能徹見本來面目耶又問自今何得行去老僧云一念圓明亘萬古涅槃生死等空花苟能徹證圓明本體於中覓涅槃生死之相了不可得豈有歡喜憂憾之事乎故古云隨流認得性無喜亦無憂之本體豈他人之可擬議者哉是以未又答云一念萬年終不改任他滄海變桑田始終一貫無二無別詎生死去來之可遷變可謂活潑自由無罣無礙便是月明簾外轉身時荆棘林中下脚處否則無非流俗漢子算將去與一念圓明奚啻霄壤矣道茂善人勉諸勉諸

示性海夫人寫法華經

圓明真性海心發妙蓮華手眼淨如鏡揮毫映彩霞三乘默稽首諸子共牛車七軸昭心膽萬言露爪牙靈山會上客俱證法王家

示張敬泉信士

生平造就只如是，百歲風光一瞬過，未得源頭活潑潑，那堪忙裡唉呵呵，眼開濃淡三更夢，心著榮膺五蘊魔，珍重老人亟猛省，聖賢舊路莫蹉跎。

圓硯銘

覆蓋渾淪，涵容至德，一氣元真，靈然叵測，盤古無端，平分黑白，天池浪濺，乾坤有色，際會風雲，文章乃克，應用三才，萬古規則。

示穎川藤左衛門

人生幻夢自浮沈，若個幻中惜寸陰，燦破塵勞淨圓鏡，打翻漆桶吼雷音，不虛出世丈夫志，豈味靈山大士心，一味涼人無間斷，好彈格外沒絃琴。

佛誕日

因地一聲全體現，周回指顧更吒咻，人天龍象嘆希有，草木林巒獻瑞嘉，煦日忽臨師子窟，薰風乍長法王家，團團拶入娘生會，特地心開優鉢花。

偶成 三首

把茅蓋頂便心休，那更無端強出頭，事別千差都坐斷，理明一決獨全周，機生暗室風翻席，寂照澄潭月放勾，自得安閒消舊習，空花濃淡復何求。
也曾特地嘆奇哉，直至于今絕點埃，紅日自昇還自落，白雲飛去又飛來，無明草長菩提路，荆棘花敷般若臺，覷破死生幻化夢，千門萬戶一齊開。
牛頭沒也佛頭彰，聖字凡名莫可量，草木無心薰格外，乾坤何意映山堂，自憐一味靜方好，堪

嘆兩丸太殺忙，但得松梅同素志，渾身霜雪也風光。

示某禪德

豁開正法眼，徹見太和人，出入無回互，去來始切親，當仁能不讓，正氣自高昇，末後須深造，臨機貴轉身，善藏無縫罅，妙用自然神，萬法收歸本，風光徧剎塵，果然如是證，當體是能仁。

開松平伊豆守謝世有感

九年壁觀絕追尋，孤負勞生直至今，不意洪鈞轉線脈，豁然大地作檀林，三思德澤垂千古，一願太和重萬金，如是助揚正法眼，靈明獨脫始知音。

參禪偈 十首

參禪人發真心，心真念念絕纖塵，觸著一毫光燦爛，驢頭馬臉也天真。
參禪人貴直截，一念圓明常亘赫，燦破死生夢幻花，拈來信手何奇特。
參禪人自酌斟，空花濃淡勿追尋，返觀本有無多子，徹骨風騷忍不禁。
參禪人亟返覺，返覺現成無彫琢，自家應用自收藏，何必蓮臺千葉托。
參禪人勿辭難，黃金鑄就一心肝，紅爐百煉無更色，徹見丈夫不自謾。
參禪人休草草，閒忙動靜亟鞭考，假如言行不相應，一失人身何處討。
參禪人休貢高，貢高念積便成魔，恐教拶入修羅窟，百劫千生奈若何。
參禪人綿密密，十聖三賢見不及，撞倒須彌開兩眼，死生大事始端的。
參禪人休執著，執著真空成一勺，小見誠如井底蛙，驢年夢見金剛腳。

參禪人自決疑，一念未萌正好追，追到無生無住處，豁然因地不吾欺。

示淺野玄菴

自得天然無事福，猶憐莽鹵覓漚花，漚花濃淡三春夢，無事天然片月查，水漲船高分上派，雲開江靜徹無涯，苟能眼底空如洗，不二門中共一家。

雨窓懷舊

劫燒江山盡帶愁，愧無妙法解心憂，空餘幾點寒巖淚，并作雲濤洗舊羞。

賦感三瑞相

奇哉三瑞應林間，果感希常詎等閑，華土風光俱掃地，扶桑彩氣正爛斑，群英濟濟衛真主，正信依依壯素顏，但願東西盡極樂，皤皤社舞滿塵寰。

寄示黃藥自如監寺

法門重千古，德業植無涯，海外聞風語，吹來長善芽，直心衛祖道，正氣伏群邪，返炤中天日，胸開絕點瑕，始終能若一，道果不須嗟。

示大村因幡守

人我相空，冤親一致，入解脫門，成般若智，植福放生，存亡兩利，正信歸依，超歡喜地，世諦空花，不可爭，心開便是安身處。

毓楚何信士自長崎至觀占此示之

條別崎江八載餘，今朝重晤意何如，微開眼孔洞三際，聊展襟懷卷太虛，道義頻增黃藥室，塵

勞迥脫白牛車，去來不着人天福，一塵清風壯晴曠。

示善遇禪人

霜顛一老叟，海外掣風顛，撞入太和境，高峯頂上眠，頓忘舊時路，塞殺不言天，一息夢雲裡，滄桑幾變遷，子來探法窟，兼以祝華筵，孝義撼蓬島，文名契昔賢，知儒堪入佛，善遇體金仙，不虛出格志，可觀法王前，日用能如是，同登一大年。

示字津木治部右衛門

大心淨信士，善積峻如山，不著有為福，人天孰與班，能開清淨眼，徹見本來顏，一念圓明無向背，始知生死不相關。

示警輝典座演瑜伽

智藏一片白芙蓉，聊吐毫端淨太虛，不獨幽冥沾法喜，人天樂樂意何如。

達磨讚

東土西天空眼底，三千法界一蒲團，鉢盂口閣黃梁夢，兀坐古今孰與班，不是神光納敗闕，更於何處付心安。

題揭鉢圖

一萬鬼子神通有盡，沒量真人道力無窮，劍戟雷轟電掣，臨機若斬虛空，逞盡百千伎倆，欲勝轉更迷蒙，瞿曇面點化，鬼母醒悟前功，卒急三歸淨戒，豁然親見兒童，始信四生皆一子，舌根吐出妙蓮紅，愛情盡處道情現，子母相將出樊籠。

季夏偶占

火雲影裡逼枯腸，何處飄來滿院香。莫是蓮池初破綻，解人煩惱作清涼。

又

不惹人間半點塵，小亭聊憩也天真。愧無一物壯山色，剩得滿頭白髮新。

又

心無城府行無踪，塵內幾能識此儂。何處敲雲醒午夢，一雙白眼對青松。

江州木侯守安信士送十六應真圖為鎮黃檗遂占偈識之

新開梁岫廓初禪，掃盡閒雲映碧天。十六應真探勝侶，千秋道誼蔭高賢。太和風雅東方瑞，萬福門庭特地妍。微笑法幢從此振，拈花一會永綿綿。

復魏爾酒居士書

何居士至接來翰，種種過衰，當之殊愧也。聞足下在崎，養德以遂身心，是最清福。然此時唐土正君子道消之際，賢達豪邁之士，盡付溝壑，惟吾輩乘桴海外，得全殘喘，是為至幸。惟冀足下正信三寶為根本，根本既固，生生枝葉必茂矣。原夫世間之事，水月空花，寓目便休，不可久戀。於中恐埋丈夫之志，誰之過歟。更冀時時返照自己身心，必竟這一點靈光，何處棲泊，不可錯過此生。到頭一著，誰人替代。縱有金玉如山，子女滿堂，總用不著，可不慎歟。囑囑。

觀音讚

大哉觀自在，悲願永無休。物我原同體，隨流又入流。一枝甘露酒，法界已全周。業識茫茫者，盡

教自點頭

示松平隼人正令女

菩提心發玉蓮開，返照原無半點埃。徹見娘生真面目，不孤本有個如來。

示土土呂木勘兵衛

死生若夢幻，何處可追尋。一念返觀照，圓明古至今。人情輕片葉，道義重千金。大地如蘆葦，幾能徹此心。善來求法旨，直示定南針。

示大野主稅助

丈夫出世間，日用自開開。正氣彌千古，真心照八還。死生能看破，逆順豈相關。一念明如日，風光壯老顏。

示惟明禪人

目汝所問無端又生一種疑心，却成兩物，雜亂其中，不能歸一。雖終日持般若，不能轉般若，却被般若迷，則不無起滅之惑。愈持愈不相應，轉念轉不親切。正在隱隱浮沈之中，不能一刀兩斷。更來請示者，宜乎。然老僧終不頭上安頭，節外生節，令人顛倒無休矣。但願汝一信永信，一持永持，一決永決，一斷永斷。無第二念，無第二人。萬年一念，一念萬年。那怕甕裡走鱉，龐公所謂日用事無別，唯吾自偶諸傳。大士云：夜夜抱佛眠，朝朝還共起。汝能信得及，悟得徹，提得起，放得下，要且綿綿密密，斧劈不開，刀斫不入，安有日用不相應者哉。

觀音圓光鏡銘

黃檗和尚本和集

慈悲行願輪，刹刹常清淨，照徹衆生心，本來明若鏡，眼空絕點埃，觀體見真性，十界一圓通，達觀說法竟。

黃燦者舊默公像贊

相彼者宿居諸黃燦，出人頭地，唯唯一默，轉請四代知識，惹得風清月白，兒孫烈烈轟轟，托出蓬萊片舌，海屋滔滔，贊不窮，看來也是白拈賊。

張振哲等求薦母周榮妙信心女

重恩惟鞠育，報德禮空王，半偈薦靈福，紅爐點雪光，愛根消淨盡，般若獨全彰，三十六春夢，回看一咲場，孝誠投念切，衆德復宣揚，業海重重竭，妙心片片香，以資解脫路，直下便超方。

示高泉孫

濁劫希龍象，縱橫多跋躪，遠聞惟覺額，觀面意何居，知子超群萃，能扶天馬駒，擴充正法眼，終不味區區，一片澄潭月，圓明徹夜珠，任從滄海變，萬古自如如，槩岫添靈彩，蓬萊眉轉舒，不孤微笑旨，祖席永無虞。

中元嘆

搖落空林歸本根，忽聞特地懷深恩，江山有限情無限，草木雖存誼亦存，莫報劬勞空自嘆，號天罔極向誰言，聊宣半偈含悲愴，字字淋漓帶血痕。

輓空印老居士

百歲如朝暮，浮雲一瞬目，人生古來稀，而況又加六，蘭桂滿庭中，福壽兩俱足，歸道一坦平，行

藏無拘束，生爲國所珍，去爲幽冥福，法護盡厥心，慧炤唯吾獨，欲期再晤言，云歸胡太速，世事夢中花，道情傳空谷，何處搖落聲，悲淒動林麓，聊以說伽陀，唯君是所祝，連開千百葉，葉葉如車輻，上品任化生，俯仰真金屋，師友滿閭浮，於君唯可卜，撒手歸去來，誰不嘆於穆。

又爲拈香偈

印破虛空無背面，翻身鼻孔愈遼天，真香一瓣資君福，特地心開九品蓮。

示自證禪人

歸家慕直路，擬議隔三千，一氣無回互，行藏自悄然，丈夫志決烈，豈不更加鞭，生死輪回事，夢聞亦可憐，中途如錯脚，求出待驢年。

大坂喜齋求薦大塚卜齋信士

伽陀無義味，飲水自知源，草木逢春發，禽魚得氣原，孝誠回業累，道重震乾坤，撒手十年外，今開解脫門，有靈能覺悟，徹證始知恩。

贈別松平隼人正回江戶

蓬然肅氣動林丘，杯茗殷勤解別愁，御世全憑三尺法，安禪打徹一毫頭，知君有意邀明月，愧我無能赴碧流，聞道德風皆偃草，歸來聲價滿瀛洲。

贈別

勿昧舊時路，歸家獨悄然，愁聞歌別曲，懶作賦歸篇，意氣冲霄外，行藏帝象先，一聲幻夢破，足下徧三千。

示酒井內記

惟乘金剛劍，幻花夢自消。眼空無一物，何處不逍遙。

示酒井主膳

放下塵勞夢，大千一坦平。舉頭天外看，日午正三更。

示松平民部少輔

開士醒塵世，真人破有空。聊舒三寸舌，挽轉太和風。志負青霄外，心閒未發中。丈夫須返炤，莫使碧雲籠。

薦柏庭道茂信士

歸依淨信士，退隱已多年。爍破三途業，便登九品蓮。死生皆夢幻，出沒任天然。不昧伽陀旨，風光徧大千。

賞桂遇雨

轟轟雷雨破秋光，桂子紛紛半落香。悔莫閒行花下路，一身淨潔也清涼。

偶成

自愧無能老倒翁，飄飄一葦任西東。杖頭撥出秋波眼，不覺毫端耀祖風。

又

一杖橫挑兩槩山，東西之遠等閒閒。軒知百歲幻花夢，對鏡寧無羞赧顏。

又

圓顛方服講真經，說到三途鬼亦驚。酒色分明兩個字，活埋多少好英靈。

又

自從嚼碎金剛後，一字烏容掛齒牙。八面鑽鋒無縫罅，臨機撒出滿恒沙。

桂月漫興

海外閒瀟散，何期到此鄉。忽聞天際响，陡落一枝香。玉露懸秋鏡，炤人肝膽涼。少時多孟浪，老大愈清狂。髮白脩途邇，眼青看世忙。等慈解脫路，般若是歸航。舉念超三際，開眉洞十方。隨緣任放曠，何處不吾藏。

讀列子天瑞篇

無形大盜盜天真，向氏那能識此情。竊得太和些子氣，頂天立地自成仁。

示某善人

正信歸依絕點塵，時時返炤本來身。鐘鳴殿角山中主，月吐峰頭格外賓。百歲光陰能有幾，一生幻夢摠非真。這回了徹無他事，不負拈花會上人。

華鯨

君家住海中，性命鍾水府。以木肖其形，高懸奚太楚。衆僧要喫齋，先來敲君肚。君肚等虛空，誰人憐君苦。苦中响如雷，知音惟佛祖。佛祖聖賢心，受命同今古。相資未發前，大哉非小補。試問把柄人，聲消歸何所。歸處不可知，聞時孰爲伍。根塵無所依，突出雲門普。聲聲般若聲，色色蓮華土。是名真佛陀，不墮於諸數。

布袋和尚

獨坐布袋，一杖撐天，眼空四海，身心悄然堪笑忙忙，幻化裡，幾人豁醒未生前。

負山踏海羅漢圖

負山踏海，當行買賣，踏徧天涯，自由自在，三千刹境現毫端，一點靈光周法界。

達磨面梁王圖

迢迢萬里而來，對面如何不識，貪着人天功德，頓忘不識之質，果能離相離名，不妨端端的示大眉徒結茅。

江山踏遍自閒忙，偶結瓢居古樹傍，莫訝峰高日出晚，炤人頂上愈風光。

又

日用靜操那畔邊，平懷風雅一愚賢，鳥啼花咲機鋒俊，贏得閒居孰共傳。

仲秋念八晡間，步明堂外，忽天際流輝，燦爛有紫繩二十四道，貫於北極，竊為吉氣。

卓朔杖藜開晚眺，普天靈彩映禎祥，雲收碧漢千邦靜，桂落寒巖萬壑香，念四紫繩貫北極，一林瑞氣煥文章，聖人御世旌民德，廣被蒼生莫可量。

二十九日空印居士終七之期，乘禪誦經修懺，以資冥福，仍述偈以薦。

娘未生時一片地，來來去去百千番，今朝直指無生路，徹見端倪心自安，珍重讚岐空印叟，行藏勿味沒絃彈，知音萬里空遺恨，月上高峯玉一團，燦破大千幻化夢，吾人莫作等閒看，自漸。

德薄龍鍾甚，聊述伽陀照膽肝。

贈玉峰居士

春容落落又秋霜，何物推遷底事忙，開士不忘弘願力，丈夫豈昧自行藏，脚跟有據融三際，眼底無塵炤十方，莫謂侯門深似海，旁通消息愈風光。

半井瑞雪求薦遠祖和氣清麻呂真人

大功不宰久彌新，錯節盤根妙入神，德被乾坤千古重，心懸日月一天真，頓超靈鷲無生果，徹證蓬萊不老春，七百年來法眼裡，聊吟半偈表真人。

自讚 越州信童求

少小頻參黃檗，善財獨禮觀音，不昧多生意氣，圓明一片真心，朝昏瞻禮無他事，魔障頓消徹古今。

九日同諸禪登高峯絕頂

烟收嶽面獨晴明，磊落相將頂上行，環遶千山朝拱翠，高居一座坦然平，杖挑杲日昭膽，塵發秋風洗謂情，未敢浪彈險崖句，恐教天外得人驚。

又

喜有風光映碧天，輕扶老倒上峰巔，胸開徧界淨如洗，剩得黃花供眼前。

重陽後二日遊清水寺禮大士

大士現清水，湛然妙入神，等慈濟苦海，弘願渡迷津，念物原同體，視生無兩人，挽回舊面目，徹。

見本來身，共證圓通境。淨無半點塵，密窺大慈德。洪恩莫可陳，我來探勝槩。瑞氣映天眞，道契山中主。雲從格外賓，中虛含萬象。雅誼日彌新，正值清秋景。懷開意倍親，法門互表帥。不負老能仁。

贈成就院主

歷徧扶桑境，何期逢此翁。行藏皆樂地，顯密盡圓通。淨似清秋月，潭成太古風。未常吐片語，三昧在其中。天運今猶古，驪車西復東。人情付流水，道義廓虛空。特造太和室，殷殷意倍隆。推雲迎老叟，下榻淨梵宮。竭盡山餽供，開懷潔己躬。百年幻化夢，唯此卜全功。

又別句

羨君好手藝拋勾，搭着無依鐵鼻牛。清水池邊聊飲啜，白雲嶺上恣優游。滿林秀氣千年瑞，大地霜花一色秋。掣斷芒繩歸去也，了無踪跡落峰頭。

示德風禪者回里

德風皆偃草，草偃風光好。并作太和春，世間何處討。歸去任騰騰，再來須急早。九上與三登，大事乃可保。

示松平對馬守

正氣千群象，回天語漸舒。丹心懸日月，赤膽耀空虛。戲破浮雲夢，圓明徹夜珠。不孤滄海望，仁者樂無虞。

示獨本藏主回自肯庵

來來去去不辭忙，踏斷溪聲流遠長。始徹閒忙無二致，脚頭脚底盡風光。
歲次壬寅菊月十九日，本寺觀音開光云：法身彌宇宙，道眼廓周沙。一點光通達，圓明沒點瑕。諸人會麼？茲者大士示現之時，靈光正照，吉氣臨筵，為祥為瑞，家國晏然，為霖為雨，山川秀麗。真誠衆生之福田，永作長河之寶筏。尋聲救苦，隨類度生。而其神通妙用，無量無邊。最親最切，何用山僧筆舌助揚，而後為光明耶？雖然如是也。少這一點不得，何故？不見道：天得一點紅光，愈見高明之廣大；地得一點精華，益增百寶之光輝。人得一點正見，能成摧邪扶正之功。助僧得一點正知，卻有揀魔辨異之手眼。然則乾坤雖有覆載之功，亦借今古聖賢表揚發揮，以成三才之德。而被蒼生，廣博無窮矣。山僧雖然不慧，日用事無別，行藏沒缺虧，與古往今來，何曾少却一毫端。既無欠少，不妨出一隻手，點開光明，與觀音大士互相表揚，共作佛事，以利群機。不亦至善乎？舉筆云：諸人還見麼？黃藥由來無多子，全憑這點作生涯。揭開慧眼，亘今古，炤徹生靈歸一家，便點。

長門神谷勝右衛門求薦妣孤雲

孤雲幻化境，黑白業居諸。一句伽陀語，剖開業盡除。打翻生死海，炤徹夜明珠。三界輪回息，一靈覺太虛。儼然登彼岸，極樂意何如。

睡起戲筆

老來聊展小神通，夜返家山晝在東。夢筆花開新燦爛，一團桃李舊春風。
萬里相公參次問，如是來者是什麼人。師云：豁開舊面目，徹見本來人。進云：如何徹見去。師云：

日用事無別，相公便禮拜。師云：會了禮拜，不會禮拜。進云：某甲無可道。師云：秋花點點新。

河村十右衛門求薦妣梅岸妙林

孝子追原本，貞臣起帝京。不孤英傑事，豈負慈恩情。家國兩全美，功助一大成。返觀猶未足，直造法王城。乞偈薦靈福，蓮花舌上生。頓消三界業，淨土坦然平。大道無方所，隨心得善名。妙林登彼岸，極樂舊家聲。

示胡信士

久埋至寶在塵勞，撥出當陽見也麼。眼廓虛空無欠剩，心平滄海少風波。一天霜月晴方好，萬里江山瞬息過。飽載家珍歸去也，高登彼岸樂如何。

西村久左衛門求薦考成玄妣壽圭

請法敬為主，事親孝為先。孝敬兩俱足，是名真福田。以茲薦父母，特地自成玄。再乞偈為證，又加腦後鞭。頓起清淨界，共坐寶花蓮。

示惟住孫

惟住無所住，惟行無所行。兩頭俱踢脫，日午正三更。舉世渾如夢，幾能醒。此情霜花堅，道骨羅月啓。眉明但惜形，山寶豈貪世。上榮蓬萊偶，寄錫和氣暢。平生聊得安，閒法頓消幻。化聲福慧果圓滿，乾坤掌上平。不言天下信，沙界任縱橫。

示惟一侍者血書華嚴經

坐斷千差路，儼然一坦平。腳踏實地，豈更聽虛聲。萬法皆如幻，一真亦強名。無名天地始，觸

處自現成。識得現成物，人天不汝輕。乾坤同一體，何處可關情。榮辱三春夢，興亡一瞬傾。心心無間斷，念念自圓明。滴血成經海，華嚴界上行。

歌

十二時辰歌用寶誌公韻

平旦寅，剖出當人清淨身。心境兩忘無罣礙，拈來信手是家珍。不着相，啓迷津。觸處分明不是塵。亘古彌今活潑潑，由來非假亦非真。日出卯，一點圓明巧非巧。爍破閻浮八萬州，佛魔頓盡誰來撓。赤條條無不了，直者直兮拗者拗。法法頭頭自性空，原無我相奚憂惱。食時辰，當體現前妙法身。日用尋常淡粥飯，何須更要著薑辛。平等見沒疎親，切忌從前着我人。一錯源頭千萬里，招回未免幾埃塵。禺中巳，亘赫圓明無不至。炤徹算沙沒量人，頓空實相離文義。了死生無一字，明明觀露是非是。無我無人無去來，大千沙界爲吾使。日南午，突出蘊山一大寶。智者到山得寶回，資生澤物賑貧苦。迷自迷悟自悟，雲開雲合朝還暮。等閒踏斷兩頭關，生死去來歸一路。日昃未，爛嚼虛空無味義。咬破舌頭飽不休，縱橫舒卷西來意。信口談何所諱，人間天上非吾止。隨緣偶寄古灘頭，釣得錦鱗不自棄。哺時申，本來無物不知貧。寒山幾幅暫知己，雲影淡濃幻假真。勿外望自全神，頑石團圓堪作

隣。咳唾一聲皆點首，凝眸何處不同人。

日入酉，寂滅須臾長且久。離相離名離古今，詎聞虛設曹山酒。未放逸何須守，看破從前奚所有。突出本來鐵臉皮，無生界內團圓走。

黃昏戌，萬別千差歸一室。坐臥空空無所爲，翻身不覺東方日。鳥關關蟲唧唧，一部真經幾點漆。動着毫端隔大千，未萌一念波羅蜜。

人定亥，夢到靈山歸疲息。耽着名勝夢遊長，無想主翁今何在。破砂盆誰替代，東擲西拋胡罣礙。返炤個中無一物，空花露影徒憎愛。

夜半子，一夢無生易有死。堪嘆夢中說夢人，何曾契着離言字。玄中玄格外事，去却非兮翻却。是暗謝明來互奪凌，真空實相誰堪試。

鷄鳴丑，一聲啼破長悠久。空色堆頭露片誠，追尋特地烏何有。沒却頭，伸出手，把住放行還老朽。饒伊能轉十二時，爭如塞殺虛空口。

結茅歌

茅居好茅居好，茅居素靜無煩惱。隨家豐儉樂無窮，節槩風情何處討。松微吟動幽草，天然一段妙嘉藻。不彈濁世繁華夢，但惜光陰無價寶。美少年，唉老倒，老倒徧能開懷抱。眼爍乾坤空古今，何流一帶淨如掃。常無事，問眠早，柴門不掩雲來鎖。夢遊東土與西天，淨穢踏翻幾絕倒。忽惺惺，光浩浩，斗室門開通大道。寂照圓明沒缺虧，果然勝於蓬萊島。

磊落歌